
らき☆すた ある高校生の物語

悪霊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき☆すた ある高校生の物語

【Nコード】

N6023G

【作者名】

悪霊

【あらすじ】

1人つまらない生活を送る高校生。その男子に降りかかる運命とは……

出会いと波乱

俺は姫神 佑樹。今年で高2だ。学校は陵桜学園。

俺の通う陵桜学園は1学年13クラスというマンモス校。

ま、俺にとってそんなことはどうでもいいのだが・・・

そして今日は高校生活2年目の始業式から半月ほど経ったある朝。

正直言って1年通って友達になったやつなんて俺の場合皆無であろう。

なので2年になってからの半月も例外なく友達とは程遠い人付き合いを続けている。

まあ近くになったやつに平凡とした挨拶をかけられて返事をする程度しかしなかったので

別に当然だと思っているし残り2年もそう過ごして卒業しようと思っっている。

だがその考えがもろくも崩れ去ることになるとは思いもしなかった。

それは学校まで残り30mってところで起きた。

玄関の前や通学路でキャーキャー騒ぐ女子生徒のグループを嫌そうに見つめながら

歩いていると後ろから少しばかり衝撃を感じた。

どうやら前方不注意で女子がぶつかってきたらしい。

後ろを振り返って状況を確認する。まるで同じ高校生徒は思えないくらい

小さい姿が映し出された。身長は140cmってところか・・・

小さいな・・・

？「今小さいって思ったでしょ！？」

こっちを見ながら反論している。当然無視して手を差し伸べる

いつもならなにか一言言ってそのまま立ち去るのだが

なんというか今日は気づく前に助け出していた。

起き上がらせているとこの女子の友達だと思われる女子3名が走ってきた。

それをちらっと見ながら起き上がらせ、

そのまま立ち去る。迷惑ごとになりそうな雰囲気だったからな

いわゆる回避行動ってやつだ。

なにかお礼を言いたげな顔をしていたが、まあいい。この際気にしない。

さっさと玄関先で靴を履きかえ自分のクラスである、B組へと向かう。

B組に到着後、自分の席にただ眼を向けて誰とも話さずに席に着席。いつもこんな感じだ。毎日毎日この生活を繰り返す。

誰に話しかけるわけでもなく、かといって話しかけられたら話さないわけでもない。

つまらない人生だと言われてもいい。俺は十分満足してるからな。そんなこんなで校長のつまらん話を聞き流しつつも休み時間がやってきた。

周りのやつらは他のクラスや同じクラスの友達と話している。ま、俺には関係のないことだ

そんな中で俺に話しかけるやつがいた。通学路で助けた女子たちだ。

？「さっきはありがとう」

「ああ、いい。別にいいことしたわけじゃねえし…。気にするな」

？「せっかくフラグが立ってるんだからここは乗るべきだよ！」

なんのフラグが立ってるのかは知らんがフラグと言われて少しでも理解できた

ことはできれば自分の脳から消去しておきたい。

「へいへい」

視線を変えずに答え、ちらっとうかがうともう一人いたはずなのにいなかったの

「そーいや、もう一人はどうした？」

？「あ、お姉ちゃんはC組だから」

お姉ちゃん？双子か？

と考えているとその人物がやってきた。噂をしたらその噂した人が来ると言うが

まさか本当だったとはな……

向こうも俺に気づいたらしく

？「あ、さっきの…」

と言ってきた。

「姫神 佑樹だ」

こういうときは名を名乗るのが常識というものだ。だいたいさっきのとか

名前を聞かずにものみたいなので呼ばれるのは好きではない。

呼んでもらえるなら名前で呼んでもらいたいものだ。

その後女子4人が名前を名乗った。

俺にぶつかってきた薄い水色で膝まで届くロングヘアの小さいのが
泉こなた

お姉ちゃんと呼ばれてたライトパープルでロングヘアをツインテールにしているのが柊かがみ

お姉ちゃんと呼んでたライトパープルのショートヘアをリボンでカチューシャ風にまとめているのが柊つかさ

ライトピンクでロングヘアなのが高良みゆき

だそうだ。ついでに言えば俺は上の名前でくん付けで呼ばれること、
4人は下の名前で呼び捨てで呼ぶことが俺の反対意見が出される前に決まった。

要するに俺には断る権利がないと判明した。

まあ一応よろしくと言っておこう。

「よろしく」

「」「」「よろしく」「」

そこまで言ったところでチャイムが鳴り4人はそれぞれ席に戻っていく。

1か月もたつと学校は黙々と授業を続け午後から上級生としての自覚という話題で

校長の若い時のただ長くてつまらんだけの話が午後から延々とあったのを

適当に聞き流し、放課後は委員会や部活などがあるのだが・・・

あいにく俺には委員会に入って少しでも良い高校生活にしようなどという

良心は持ち合わせていないし、部活に入って仲間とともに汗を流そうなどという

くだらない感情は陵桜に入ったときすでに捨てているので

毎日バイトに明け暮れる日々を送っている。今日も例外ではない。

俺は自転車で家の近くにある喫茶店に入った。ここがバイト先だ。名前は執事喫茶くひまわりくだそうだ。なぜここでバイトしてるかというと

ここの店長とは昔からの知り合いだしここなら物好きな奴でない限り入ってこないの

陵桜の生徒に見つからんからな。しかも時給が1230円ときたもんだ

これほど楽なバイトはない。ちなみに担当は接客だ。

ま、しぐさ等は●執事のセ●スチャンを想像して欲しい。

奥で準着替えを済ませ準備していると声が響く

「お嬢様3名ご来店なさりました」

その声に俺の含む従業員が全員反応し

『いらっしやいませ！お嬢様方』

と言った。さて今度は俺が注文を取ってくる番だ。

客が3名座った席に注文を取りに行く。

「いらっしやいませ、お嬢様方。今日は何にいたしますか？」

と言いつつ、かるく一礼して顔を上げる。

ここまではいつもと一緒なのだ。だが今回は違った。

3人を見ると、啞然とした顔をしている。俺の顔をしだいにこわばってきた。

そう、目の前にいたのはこなたとかがみ・つかさ姉妹だったのだ。

だがここで立ち尽くしてるわけにもいかない。笑顔を作り

「ご注文は何になさいますか？お嬢様方」

「あ・・・アイスティー3つにおすすめケーキセット3つ」

かがみが少し困惑した声で注文をする。俺は平然とした顔で

「アイスティー3つにおすすめケーキセットですね。かしこまりました」

少々お待ち下さい」

と言って早足でその場を離れた。

10分もしなかっただろうか・・・

再び俺は注文されたメニューを手には3人のところへ向かった

「お待たせしました、お嬢様方。アイスティーとケーキセットでございます」

と3人の目の前にケーキセットを置きつつ一番手前にいたこなたに紙を渡して

「ではごゆっくりお楽しみください」

と言に残し、再び早足でその場を離れた。

まずい・・・、こなたたちを口封じしなければ何を言われるかわからん。

特にこなたは口が軽そうだ。ばらされたら俺は二度と学校に行けなくなっちまう。

俺はそう考え紙に

『ここから出たらすこし行ったところにある公園の自販機の前に立っている』

と書いて泉に渡したのだ。とりあえず口封じせねばならんことは目に見えていた。

そうこうしてる間に3人が店から出て行った。

俺は店長に休憩をとることを許可してもらいすぐに公園の自販機のところに行く。

もうこの際執事服を着ていることなどどうでもよかった。

公園のところまでいくと3人が立っていた。

近くまで行くと3人の表情が大体見えてきた。

つかさはまだ困惑した表情をしている。

かがみは笑顔だがかなり引きつっている。

こなたはかなりニヤニヤした顔をしている。一番不気味だ。

「えーとなんて言ったらいいか分からんがとりあえず忘れてくれ」

着いてすぐ3人に忘れるよう促したがこなたは

「こんな面白いこと忘れるわけないじゃん」

いや・・・そう言うとは思っていたが、つか指を立てるな！

「まあまあ、見つかったのは仕方ないことだし・・・ということでは家に泊めて!!」

「なんでそうなるんだ!!」

「いいの?言っちゃうよ?」

「くっ・・・それを盾にさせたらどうにもできん・・・」

俺は助けを求めるような眼で隣のつかさを見る。

他にいた人物が違うと言えばだますことは可能だ。

・・・だが人生はそう上手くいくものではない

「私も姫神くんの家に泊まってみたい!!」

「だからなんでそうなるんだ!!!」

まったく…、仕方ない。最後の砦であろうかがみを見る。

「私も男子の家って興味あるわね」

「いやいや、だからなんでそうなるんだ!!!」

「いいじゃん、泊めてくれたらあの事黙っててあげるって言ってんだから」

「いや、よくねーよ」

ここまで言って俺はため息をした。なんでかって？悟ったんだよ俺がいくら反論したって無駄な抵抗であって体力を消費するだけだとな

「はあ、分かった。じゃあ持ってくる荷物があるんだったら今から帰って

執事喫茶のところに集まってくれ」

と言った。もうほとほとあきらめたね。これ以上学校で変なうわさを流されても

俺が困るってもんさ。それだったら俺なんかの家に泊まってくれるだけで

言うのをやめてくれるんだったら大いに結構だ。

それを聞いた3人は楽しそうにその場を去っていった。

これから俺の人生どうなるんだろうか？

出会いと波乱(後書き)

どうも悪霊です

え〜と前書いていた小説はあきらめました。

話のネタがまったく続かなかったのが原因です

この小説もいつまで続くかわかりません

なにぶん文書能力が皆無なので・・・

ですのになにかアドバイスをくれたら

かなり助かります！

どうかこれからよろしくお願いします

お泊まり決行！（前書き）

だいぶ遅くなりましたが2話です

お泊まり決行！

さて、3人が去って30分ほどが経った。

すでに俺は執事服から着替えて店の前で3人が来るのを待っている。

「あいつら、遅すぎだぞ……」

いや、別に女子が泊まるのを楽しみにしているわけではないぞ？

まあ、多少興味はあるがな……

俺はA型なんだ。時間とかはきっちりしてくれんのは我慢ならんだけだ。

それから5分後かがみ・つかさ姉妹がやってきた。

さてあとはあのバカだが……まったく来る気配ねえな

結局こなたが来たのは2人が来てからさらに20分も後のことだった。

「お前、何してたんだよ！遅すぎだろーが！！」

「いや〜どんなゲームを持っていたらいいか迷ってさ〜」

「つか3人とも荷物多いな……」

3人が手に持っている荷物を見る。

これから修学旅行にでも行くんだらうか？

「とりあえず、行くぞ」

俺は自転車に乗って走り出す。後ろから3人もついてくる。

俺の家は店から徒歩でも5分程度のところにある。

家について中へ入るとこなたが

「姫神くんの部屋ってどこ？」

「なぜそれを聞く？つか聞いてどうするつもりだ？」

「入ってみたい！」

なにを言っているんだこいつは・・・

「却下だ」

「えーいいじゃん！！」

「よくねえだろ！！俺の部屋には絶対入ら——」

そこまで言って言葉を止める。

どうせここで止めても俺がいないときに結局入られるだろう・・・
たぶん。

だったら居るときの方が安全だよな？

「やっぱいい。2階上がって左の角の部屋だ。でもあんま触ん」

言い終わる前に2人は階段を上がっていった。

人の話は最後まで聞いとけよ。

ふと横を見ると、かがみがこっちを見て肩をすくめて同情の顔を浮

かべていたから
いつものことなのだろう。

それから10分後・・・

こなたとつかさが2階から降りてきた。

「うゝ姫神くんの部屋、つまんないね」

「何の話だ？」

「男子の部屋には必ずあるものがないんだもん！」

必ずあるものなのかどうかは知らんぞ・・・

「そんなことはいい・・・部屋決めをするからこっちにこい」

「はゝい」

「姫神くん、部屋はどれぐらいあるの？」

かがみが訪ねてきた。

「1階に部屋3つ、2階に部屋俺のも含めて4つあるぞ」

「じゃあ、みんな2階でいいんじゃない」

「そうだね、私は姫神くんの部屋でいいや」

ゴツン

言い終わった瞬間にこなたはかがみの鉄拳制裁をくらっていた。
まあ、自業自得だろ……。

「うう……かがみん痛いよ……」

「あんたが変なこと言うからでしょ」

「じゃあ、かがみんが姫神くんと寝る？」

ゴツン

今度はさっきよりもかなり大きい音がした。

「次そんなこと言ったら本気で殴るわよ!？」

「もう本気で殴ってるじゃん……」

と言うと、すでに蚊帳の外だった俺とつかさの方を見て

「かがみんがいじめる〜!」

「いや……今のは完璧お前がわりいだろ」

「私もそう思うな」

「つ……つかさにまで見捨てられるなんて……」

と言いつつがつくりしていた。

はあと一つ息を吐き収拾のつかなさそうなこの状況を変えるべく

「とりあえず俺が決めるぞ？いいか？？」

こなたを含め他二人とも賛成した。

俺の隣の部屋にかがみ、目の前の部屋にこなた、右斜めにつかさの部屋とした。

部屋割りが決まると3人は部屋に荷物を置いて来ると共に制服から私服に着替えてくることになった。

「さて、俺も着替えるか・・・」

さっさと服を洗濯かごに入れていつもお気に入りの私服に着替える。下に降りてくるとまだ誰もいなかった。

まあ男子の着替えは女子に比べて、5分もかからんもんだろう・・・

「この間に、紅茶でも入れるか」

紅茶を入れている途中に3人が並んで降りてきた。

私服の女子のなんかあんま見ないから新鮮に感じたのはたぶん気のせいではないだろう・・・。

「姫神くん？」

「佑樹でいいよ、もう」

一緒に暮らすのだから別に名前と呼ばれようがもう気にしてもしょうがないことだろう。

つか同じ屋根の下にいるのに他人行儀な呼ばれ方ではお互い落ち着

かんだろうしな。

それでもいきなり言われたからびっくりしたのか、頭がおかしくなったとも思ったのか

3人は顔を合わせてなにやら目を丸くしている。

しばらくその状況が続いていたが、急につかさが聞いてきた。

「じゃあ佑樹くん、何作ってるの？」

「紅茶を入れてる」

そう言った瞬間、3人は興味深そうにキッチンの中へ入ってきた。

「紅茶入れれるの？」

しばらくじっと見ていたが、かがみが聞いてきた。

「ああ、紅茶好きだからな」

「料理とか好きなの？」

続いてつかさが聞いてきた。

「まあな、親がいねえし」

そう言った瞬間、空気が凍ったのがすぐにわかった。

「あ、死んでるとかじゃねえから、海外で仕事してんだ」

「あ、そうなんだ・・・」

「ねえ、その親ってなんの仕事してんの？」

こなたが興味津津な顔で聞いてきた。

「母さんと親父はどっちとも服のデザイナーをやってるよ」

「へえ、すごいねえ。なにかデザインした服とかあるの？」

「ああ、そういうのはねえけど雑誌はあるぜ」

と言いつつできた紅茶をカップに注いで机まで運ぶ。

紅茶を置いたあと近くの引き出しを開けて雑誌を3冊ほど取り出して持っていく。

「一応、向こうでは人気あるみたいで雑誌によく載ってるよ。たまに顔見せに帰ってきては自分たちの雑誌をさんざん自慢してるからな」

「へえ、そうなんだ」

しばらく雑誌を見ながら雑談をしていたがふと時計に目を向けると6時を指していた。

そろそろ作り始めるか・・・。

と、立とうとした時、3人がこっちを見ながら

「あ、ご飯は私たちが作るよ？」

と言ってきた。

ふとここで疑問に思った。

「料理得意なのか？」

「私は得意じゃないけどね、つかさは料理好きなのよ」
得意なのがあるのはいいことだ。

「で？お前はどうかんだ？」

「私？私も得意だよ。お母さんいないから家事ずっとやってるし」

「え？母さんいないのか？」

「うん、私が小さいころに死んじゃったから」

空気が重くなっていく。

これは・・・悪いことを聞いてしまったな・・・

「ま、だから家事は得意だよ！！かがみんとは違って」

「・・・空気ぶち壊しか・・・お前」

「シリアスなのは嫌いなんだよね」

「悪かったわね！どうせ私は家事は不得意よ！！」

ゴツンッ！！

うわっ、痛そうだな

ま、こういうところはこいつらしいな。今日初めて話したけどこいつらとなら

あいつらのような友達づきあいができるかもな――

<こなた視点>

うう・・・、まったくかがみんもあんなに殴ることはないのに。
あれ？ 佑樹くんこっちの方を見て複雑な表情を浮かべてる・・・。

「佑樹くん、なんか変じゃない？」

「うゝん、確かに変ね。」

「どうしたのかなあ？」

「とりあえず聞いてみましょ」

と言いつつかがみんが
佑樹くんに近寄る。

<佑樹視点>

「佑樹くん！ なにしてるの？」

突然耳元で大きな声が聞こえたと思ったら、続いて肩を揺さぶられ、
はっと意識を取り戻した。

ふと前を見ると3人のほっとしたような顔が映る。

「どうした？」

「どうしたじゃないわよ。いきなりぼーとし始めたから、なにかあったかと思ったじゃない」

かがみが俺の問いに答えた。
って俺ぼーっとしてたのか。

「大丈夫？ 佑樹くん」

つかさが俺に聞いてきた。

「ああ、大丈夫だからしん「大丈夫じゃないなら私がナース服で看病してあげるよ」・・・こなた、お前はいいかげんにしろ！」

「え？ なにしてるのカナ？ 佑樹くん」

握りこぶしで頭を掴んで万力の要領で軽く締め付ける。

「ぎゃあああああああ！！」

しばらくしてかがみとつかさがキッチンで料理を作りはじめた。
こなたは俺の万力でダウンしてソファで休憩中だ。
そんなに痛かったんだろうか？

「なにか手伝うことあるか？」

「あっ、じゃあ皿出して。佑樹くん」

どんな料理を作るのか興味がある。
だがそれは、出来上がるまで我慢することにしよう。
それより……

「おい、大丈夫か？」

「だ……大丈夫じゃないよ。あんなに締め付けなくてもいいじゃん！」

「そんなに強くは締め付けてねえよ。まあ、とにかく悪かったな」

一応謝っておこう。俺にも責任はあるしな。
とその時キッチンからかみが

「おーい、2人とも。ご飯出来たわよ」

と俺達に言った。

その後ろからつかさも俺に

「佑樹くん、向こうに運ぶの手伝って」

と言って忙しなく動き回っていた。

キッチンまで行って皿に盛られた料理をテーブルまで持って行くのを
8往復してようやく全て運び終えた。

つか作りすぎじゃねえのかこれ……。

ま、ともかくこなたも大分回復したようですでに座って待っていた。

「「「いただきます」」」

早速目の前のから揚げを一口。

かがみとつかさも味が心配なのかずつと俺の反応を伺っている。
まあ、もちろん答えは

「うまいな、このから揚げ！」

「本当？」

「本当にうまいぜ、これ」

「あ、ありがとう」

かがみが照れてるってことは今食べたから揚げはかがみが作ったものみたいだな。

「微妙に照れてるかがみん萌え」

「うっさい!!」

ゴッソ

こいつらは毎度毎度同じだな。

ってかさつきからつかさがずっとこっちを見てから揚げを食べるたびに

安堵と緊張を繰り返しているな。

たぶん前者がかがみので後者がつかさが作ったものなのだろう。

「つかさ、俺の反応ばかり見てないで自分も食べた方がいいぞ」

「ふえ?・・・あ、うん。そうだね佑樹くん！」

と言ってつかさも食べ始めた。

ほんとに料理好きなんだな……。ていうかあれだけ見られたら逆に食いつらいぞ……。

しばらくしてテーブルの上の料理がすべて皿から消えた。

「ふう、うまかったな」

「佑樹くん、結構食べたね」

「それだけ食べたなら太っちゃうんじゃない？ 佑樹くん」

こなたがそう言いつつニヤリと笑っている。その隣で太るという単語に

かがみはかなり反応してたのは今はスルーしておくとしよう。

「俺は太る体質じゃねえから心配ねえよ。ってかうまかったから食べただけだ。」

いつもはこんなに食べてねーよ」

とこんな具合に会話をしていると急に玄関の扉が開き、叫び声が聞こえてきた。

「げ……。この声まさか……。！」

と言った瞬間、今の扉が開いてでかい声と共に酒の匂いが漂ってきた。

「佑樹！ 今帰ったでー！ ！ ！ ！」

「帰ったでってなんだ！ 今日友達の家泊まってくんじゃねえの

かよ・・・!!」

「知り合いなの？佑樹くん」

かがみが驚いた顔をしながら聞いてきた。

「ああ・・・、俺の姉貴だ」

と言って俺の姉貴である

姫神 佳奈を見ると「酒を持ってこい!!」と叫びながら暴れている。

まったく何してんだか・・・。

「あら？佑樹、その子らは誰や？」

やばっ・・・、かなり嫌な予感がする・・・（汗）

「ただの友達だ」

「へえ・・・、で？誰が好みなん？」

「だからただの友達だっていってんだろ！」

友達だって言ったのになんで好みを聞くんだけ・・・

なんとか早く寝させなきゃ絶対まずいことになるのは目に見えてる。

「で？今日はなんで帰ってきたんだ？」

「それがね・・・」

と理由を語りだしたが関西弁なのに加え酔っているのでまったく分かりやしねえ・・・。

「もう今日はとことん飲むでっ！！！」

バタンツ

ふう・・・、やっと寝てくれたか・・・。

とりあえず姉貴を部屋のベットまで運んでひと段落。

「はぁ・・・、疲れた」

「お疲れ様。っていつもあんな感じなの？お姉さん」

「まあな。今日はずいぶんと荒れてたが・・・」

まったく、今日に限って帰ってくることもないだろう・・・。
姉貴に付き合っていたせいです。時刻は9時を回っている。

「ふぁ・・・、眠い・・・」

「ちょっと、大丈夫つかさ？」

すでにつかさは寝る寸前。隣でつかさを支えるかがみの顔にも疲れが見える。

「ねえ部屋にあったPCって使えるの？」

唯一元気なこなたがそんなことを聞いてきた。

「あ？使えるけどそれがどうした？」

「あ、ゲームしたくて……」

ゲーム？この時間からか？

「今からバーニングタイムなんだよ！」

なんかものすごい目が輝いてやがんな……。ま、いいか……。

「今日はとりあえずこれで終わりにするから3人とも自由にしていかな」

つかさとかがみはそのまま寝るようだ。

さて、俺も朝食つくんないといけなさそうだからさっさと寝よ……。

お泊まり決行！（後書き）

なんかからき☆すたっぽくなくなってしまいました。

途中の佑樹がぼーっとしたところは今後の話のネタっていうか今回の最大のネタになります。

突然ですが

オリジナルキャラクターを何人が募集します。
ぜひご協力お願いします

非日常↓日常

パン

タッタッタッタッタッタッタッタ・・・

「だいたい7秒前半ってどこか・・・・・」

こなたのやつ速えな・・・。なんで部活入んねえんだろう・・・。
いや、もう理由は聞いたことあんだけどな。
こなたいわく

「部活に入ったらゴールデンタイムのアニメ見れなくなるじゃん！」
らしい・・・。

正直もったいないと思うのは俺だけだろうか・・・？こなたならど
この部活に入っても

有名になれると思うのだが・・・。

と考えていると自分の番が回ってくる。

さて、5秒台目指して頑張るか・・・。

とその時、

「佑樹く〜ん！頑張って〜♪」

「佑樹さん、頑張ってくださいね」

「光の速度で駆け抜けろ〜！」

と3人の声援が聞こえてきた。

でも、1つ声援じゃねえのあったがな・・・。

「光の速さは無理だろ！」

まったく・・・、こなたのやつ・・・。

あいつらしいと言えばあいつらしいのだが・・・。

ていうかみゆきもあの2人につて叫ばないでくれ・・・・・・・・。。
かなり恥ずかしいのだが・・・。

でも、せっかく応援してくれてるんだから頑張ってみるか・・・・・・・・。
と思いつつ、スタートの合図とともに走り出した。

<こなた視点>

「光の速さは無理だろ！」

おお、さすが佑樹くん。ツツコミがかがみ並に速くなってきたね。

「佑樹くん、速い！」

「そうだね。ってか速すぎだと思うヨ・・・？」

あのスピードは男子でも中々出るもんじゃないネ。

「確かに早いですね。なにかスポーツでもしてたんでしょうか？」

「うーん、どうなんだろうね・・・？」

「今はしてないだろうけど、昔やってたんじゃナイ」

というよりそうじゃなきゃあんなにスピードなんか出ないヨ・・・。

「でもさ……」

つかさが一度言葉を切って佑樹くんを見てから

「佑樹くんがスポーツしてるとこなんて想像がつかないんだけど……」

「確かに……。佑樹さんは基本無口ですからね」

つかさ……さすがにそれはいいすぎじゃないかな……。ていうかみゆきさんもそう思ってたの！？
それじゃ佑樹くんがかわいそうだよ……。ま、私もそう思ってたんだけどネ！

「まあ、後で佑樹くんに聞いてみればいいんじゃない？」

「そうですね……」

ふう……。なんとか話をずらすことができたよ……。でもほんとになにやってたんだろう……？

<佑樹視点>

「ふむ……。6秒01か……」

先生からタイムを聞いてふうと息を吐く。

去年は6秒後半だったしだいたい日本記録が5秒75なのだからこの記録は

トップクラスの成績だろ・・・。

とここで俺の前に走っていった白石・・・だっけ？（下の名前は覚えてない）が話しかけてきた。

「いやゝ、速かったなあ。姫神くん」

「そんなんでもねえよ」

ま、こんな会話しかいつもしないのだが、同じクラスでこなた達以外で

唯一話しかけてくるのがこいつなのだ。

こいついわく俺はいつも無口でつまらなそうっていうか無愛想な感じが

して怖いので話しかけずらいのだという・・・。

つまり俺は喜怒哀楽の喜と哀、楽が欠けているらしい。

ま、ここまで詳しいのだからこいつも俺をそういう風に思っていた口なのだろう。

「女の子の声援のおかげかな？あの中に好きな女の子の声援でもあるのかな？」

「バカかてめえは・・・。あいつらはただの友達だ」

「ふゝん・・・、友達ねえ・・・。」

と言いつつ白石はこっちをニヤニヤしながら見ている。

正直気持ち悪い・・・。やっぱバカだなこいつ。もう放っておこう。しかし、なにが好きだ。恋愛なんてバカバカしい上に限りなくくだらねえ・・・。

俺にはもうそんなやつらはいらねえよ・・・。

もうあんな思いはしたくねえからよ——・・・。

その日の昼食。つかさが

「ねえ、佑樹くんってなにかスポーツしてたの？」

「あ？なんでんなこと聞くんのだ？」

「さっきの体育の時間にこなちゃんとうきちゃんと話してて気になつて・・・」

「え？なんの話？」

事情を知らないかがみにみゆきが説明をしている。

・・・で、俺はというとつかさの興味津々の視線をうけながら言うか言うまいか迷っていた。

「へえ・・・、すごいやつもいたもんねえ・・・。確かに気になる・・・」

「なにかしてたの？」

つかさがかがみを見ながら聞いてくる。

「言いたくねえから言わない」

嫌な予感しかしねえし・・・。

「えー、いいじゃん佑樹くん教えてくれたって」

「ダメだ。絶対言わん」

「いいの？ 佑樹くん。あの例のバイト言ってもいいのかな？」

「・・・！」

ちっ、こなたのやつめ。余計なことを・・・。
だがそれを言われちゃ反抗出来やしねえ・・・。

「分かったよ。言うからそれだけは絶対しゃべんな」

こなたは俺の言葉に頷いた。ふう、あんまし言いたくなかったんだけどな・・・。

「中学のときバスケやってたんだ俺」

「おお、バスケか・・・。」

「なんか・・・、意外ね・・・。」

おい、こら。失礼じゃねえかそれ？

しばらくそのまま4人は固まっていたがみゆきがなにかに気付いたのか顔をあげて。

「今はバスケしてないんですか？」

と聞いてきた。っていうかやっぱそれ聞かれるのか・・・。
みゆきの言葉で3人も気付いたのかこっちを見ってくる。
言うしかないねえよなあ・・・この状況。

「バスケット部の先輩と同じ学年に嫌な奴いたから入んなかったんだ」

「ふくん・・・、どんな人達なの？」

かがみが聞いてくる。

「もうとにかく暑苦しいやつだ・・・」

そいつらを見てるだけでいらいらしてくる。

だがこういう噂をしていると来なくてもいいのに噂したやつが来るのが不思議なことである。

「おい、姫神！出てこい」

俺は頭に手をあてながら、ため息をつく。

「佑樹くんが嫌いな理由がわかる気がするわ・・・」

かがみが呆れ顔でこっちを向きながら話してくる。

「わかってくれてありがとう」

かがみにむかって言いながらちらっと廊下の扉を見る。

仕方ねえな・・・。ったく飯もろくに食べてねえのに・・・いい迷惑だぜほんとに・・・。

もう1回ため息をついて、立ち上がり2人の居るところへ向かう。向こうもこっちに気付いた。

「やっと来たか！姫神」

「今日こそバスケット部に入ってもらおうぞ！」

「黙れ。そして死ね」

「最初からそんなに否定するなよ姫神！」

「そうだ。俺達はお前と一緒に青春を過ごしたいだけだ！」

相変わらずうぜえな……。つか気持ち悪い。

「お前らなんかと一緒にいたら吐き気がでるだろ」

「まあ、そんなこと言わないでバスケット部に入ろうぜ！」

「嫌だな。だいたい1年入れればいいじゃねえか」

「もう1年は一通り入部してもらっている。だが勝つためにはどうしても姫神。お前の力が必要なんだ！」

俺の力を必要としている？なんで俺なんだ？他にもいるだろ……。俺は無理だ。バスケットやる資格など持ってねえしな……。だから・

「俺は入る気なんかねえよ。さっさと帰れ」

「そんなこと言うなよ、佑樹！」

「俺達と青春の汗を流そうぜ！」

やっぱきも・・・。

「うるせえな。帰れよ」

「人になにか頼む時は敬語だろ！」

あ？意味わかんねえし・・・。つかそれ言ったらお前らもだろ。でもこれ以上付き合うのめんどいしな・・・。

「さっさと帰ってください」

「だが断る！」

「帰ってください」

「俺達と共に青春の汗を流そうぜ！」

「帰ってください」

「青春の汗は気持ちいいぞ〜！」

ドゴッ

「帰・っ・て・く・だ・さ・い」

「いや・・・だからあn「帰・っ・て・く・だ・さ・い」・・・はい」

2人は俺が壁を殴って威嚇したら顔を見合せてオロオロしていたが・
・

「今回は俺達の負けだが、次h「何か言いましたか？」・・・いえなんでもないです」

2人は再び顔を見合せてそのまま走って逃げて行った。
ったく、やっと帰ったか。

そのまま席に戻って食べようとしたが運悪くチャイムがなった。
結局午後の授業は空腹とイライラでまったく集中できなかった。

GWまで残り1週間で切ったある日の朝。

クラスのやつらはGWになにして遊ぶかなどという話題で
かなり盛り上がっていた。

しかし休みと言っても大量の宿題も出るし、GW明けはすぐ中間テ
ストなのだが・・・。

果たしてこの中で何人わかっているんだろうか・・・。怪しいもん
だな。

ま、でもかがみ達はさすがに知ってんだろ・・・。
と思って4人に目を向けるが・・・。

「GW楽しみだねえ、こなちゃん」

「そうだねつかさ。GWは深夜まで堂々と起きてられるヨ」

いた・・・。こんな近くに2人もいんのかよ・・・。

まあこなたはある程度予想していたんだがつかさもか・・・。
つかさは几帳面だからそういうところはしっかりしてるだろうとは思
っていたんだが・・・。

2人でGWになにして遊ぶかと笑いながら話し合っているがたぶん

この2人の頭の中には
宿題とかテストとか言う概念は存在しないのだろう……。

「楽しい相談中申し訳ないけど2人とも。一応言っておくけどGW
だって宿題は出るのよ？」
それに休み明けテストとかあるんだから遊んでばかりは無理だからね」

と忠告をする。その忠告に2人はというと

「そっかぁ……、忘れてた……。そんなに遊べないね……」
「む……、かがみん。せっかくの気分をぶち壊しにしないでよ……」

2者それぞれの対応をしている。

「ダメよ、特にこなたはね。一応2年生なんだからそれなりに自覚
を持ちなさいよね。」

1年の時みたい丸写しなんて絶対許さないんだから」

丸写し……？もしかしてこなたのやつ宿題とか全部丸写しだった
のか？

「いいじゃん、せっかくの休みなんだし。しかもGWは1年に1回
しかないんだヨ？」

「でもちゃんと勉強しないとダメですよ？泉さん」

「えー、みゆきさんもそんなこと言わないでいいじゃん」

ダメだこいつ。完全にやる気がねえ……。

「でもさー、ぶっちゃけテストとかあるの知らなかった私とつかさだけじゃないと思うんだよねえ」

と言いながら俺の方へ目を向ける。

なんだその視線……。もしかして俺もテストのことを知らなかったとも思ってるのか？こいつは……。

「わりいけど俺もテストは知ってたぞ？ていうかもうそれなりには勉強してるぞ」

それが普通だとは思うのだが……。

「さすが、佑樹くんね。こなたも佑樹くんを見習いなさいよね」

「むう……。佑樹くんは同じ仲間だと思っていたのに……」

お前と同じ仲間にするな。

「でもまあ……。勉強頑張るんだったら少しぐらい遊んであげてもいいわよ！」

「わかったよ。お姉ちゃん」

「かがみんのツンデレ萌え☆」

つかさはそのまま頷いたがこなたはそう言いながらかがみに抱きついていた。

「あんたはいいかげんにしなさいっ!」

バキッ

やれやれ・・・、また喧嘩が始まったか・・・。
ま、毎度毎度のことだから放っておこう・・・。

その日の昼休み。

「GWは勉強もしながら遊ぶってのはどう?」

「私はいいわよ。もちろん勉強しながらだけどね」

「私もこなちゃんに賛成だよ」

「私もいいと思いますよ」

「佑樹くんはたぶんいいだろうから・・・、どこか行きたいか希望ある人」

ガシッ

「待ちやがれこなた。みんなに聞いて俺に聞かねえとはどういうことだ」

「佑樹くん、痛いヨ?」

「なんで俺には聞かねんだ？」

「だって佑樹くん別に用事ないんでしょ？」

う．．．、確かに用事はねえけど．．．。それでも一度聞くのが普通じゃねえのか．．．。

「佑樹くん、もしかして用事でもあるの？」

つかさとかがみが声を合わせながら上目遣い（なぜか目がうるうる）で聞いてきた。

「いや、別にねえけど．．．。」

「よかった」

と言って笑顔を見せる。

それをじつと見つめていると

「友達になれてよかったって思った？」

「．．．！？」

突然耳元でこなたの声がした。

っていうか俺の心読むんじゃねえよ．．．。

「いや、顔にもろ出てたからさ」

げっ、マジかよ．．．。

「まあ、このことは黙っててあげるから」

と言ってベツと舌を出しながらこっちを見る。
まあいいか。

こうして俺とこなた達が出会って初めてのGWを迎えようとしていた・・・。

非日常↓日常（後書き）

最後適当になってしまいました・・・。

テスト週間の中ですので急いでました・・・。
すみません。

ま、勉強もしなければならぬので

次話はゆっくり更新します・・・たぶん↑おい

GWの過ごし方（前編）

GW前日の昼休み。

いつものどおり弁当を食べているとこなたが

チョココロネが食べながら変なことを聞いてきた。

「皆に聞きたいんだけどチョココロネってどこから食べる？」

「私は頭から食べるよ」

どこから食べるっていう質問もわからんが・・・、頭って言ってもな・・・どっちだ？

こなたもそっか・・・と答えつつ

「ところで頭ってどっち？」

と聞いてきた。

「私は太い方だと思うわ」

「私は細い方かな」

「そっかあ、私は太い方だと思ってんただけどねえ。みゆきさんと佑樹くんは？」

「細い方じゃねえの？」

「私も細い方かと・・・」

「でもなんで細い方が頭だと思ったの？」

「だって貝みたいじゃない？こなちゃんはどうしてそう思ったの？」

「だって芋虫みたいだし。・・・ま、そう考えると貝の方がイメー
ジいいネ」

おい、見事に他の全員引いてるぞ。

いくらなんでも芋虫はないだろ・・・。

「じゃあ聞くが太い方から食べたら最後チョコないんじゃないのか
？」

「それは大丈夫。チョコをぐいぐい押し込んで食べてるから」

ずいぶん豪快な食べ方だな。

「佑樹くんは食べ方とかあるの？」

「細い方をちぎって余ったチョコにつけて食べる」

ま、食べ方は結局人それぞれなんだけどな。

「私もそういう食べ方があると聞いたことがあります」

「むう・・・、佑樹くんがまさかみゆきさんと同じ意見とは・・・」

「じゃあシュークリームはどう食べる？」

「2つにわってフタの部分をポット部分のクリームにつけて食べた

後、ポット部分を食べるな」

「でもそれって食べるのめんどくさくない？」

かがみがそう聞いてきた。

ということはかがみはそのまま食べる派なのだろう。

「でもクリームがはみだしたりしねえし、クリームとシューがバラ
ンス良く食べられるぞ？」

「じゃあショートケーキの苺は最後まで残しておく？」

「俺は間に挟んである苺の量にもよるが、大抵最初に食べるな」

「私は最後まで残しておくんだけど、お腹いっぱいでは食べれなかつ
たり家族に取られちゃうこと多いんだよね」

まあ、一番よくあるパターンだな・・・。

「やっぱり好きなものは先に食べなきゃネ」

「そういえばお姉ちゃんが苺取られたとこ見たことないなあ」

「つかさゝ、なにしゃべってんのよ！」

「にやはは・・・、メンゴ」

「さすがかがみん。抜かりないな（ニヤリ）」

「・・・・・・・・っさい！」

ゴツン

からかい気味に言ったこなたの頭にかがみの強烈な鉄拳制裁が振り下ろされた。

「つかさ、こいつにあんまり余計な話言わないでね！は、恥ずかしいんだから」

「ん．．．．．？」

今一瞬かがみがこっち見たような．．．。
かがみはまだこなたとつかさを叱っている。
気のせいか．．．？

その日の最後の授業。授業は担任黒井先生の世界史。
が、正直眠い．．．。

だが黒井先生は寝る生徒がいれば容赦なく制裁を加えるので
寝る奴は居ない．．．1人を除いてだが．．．。

バキヤ

「眠気は覚めたか、泉」

「いや、頑張ってるんですけど無理です！いきなり奴らは来るんです！突然襲って来るんです！不意打ちなんです！防御不可なんです！！」

ゴツンッ

「どや？これでしばらく襲って来んやろ」

「・・・はい、そうですね」

授業が終わった後、すぐ帰りのHRをやって黒井先生は出て行った。
つかさがこなたのところへ歩いて行った。

「大丈夫？こなちゃん」

「天国のおかーさんが見えたヨ・・・」

そうとう重症だな。まじで痛そうだもんなあの人の拳骨・・・。
ま、でも・・・

「寝る方がわりいと思うのは俺だけか？」

「佑樹くん、ちょっとひどくない？」

「ひどくない。あくまで事実を言っただけだ」

「つかさ、佑樹くんがいじめる・・・」

と言いつつ、泣きまねをしている。
俺は呆れながら

「いじめてねえよ・・・」

と言いながら帰る準備をしはじめた。

ふとここで考える。

毎日が楽しいと思ったのはいつ以来だろうか・・・と。

昔自分にも今と同じような時間があった。

それをまた失ってしまうのだろうか・・・と。

だがそんな悲しい考えを吹き飛ばす声が聞こえてくる。。

あいつらを見るとマイナスな考えは嘘のように消えていった。

この楽しい時間は2度と手放さない。神に誓っても。

GWに入ってから3日目。今日は午前中にこなた達と集合してカラオケに行くことになった。

っていうか1日目と2日目は俺がバイトを一日中入れていたため行けなかった。

その事に対してかがみにかなり怒鳴られた。

「あんなに怒鳴らなくてもいいだろ・・・」

ぶつぶつ文句を言いながらも集合場所に行くとするでにかがみ達がい

た。

はやいな・・・。一応集合時間の20分前に来たんだがな。

・・・が、こなたの姿がどこにも見えない。

「こなたはどうした？」

「ああ、こなたのやつは遅刻するってメール来てたわ」

またか……。あいつ。

かがみも呆れているような顔をしている。

「しかしあいつ遅すぎじゃねえか？」

と言うのも俺が到着してから40分は経っている
もう時間は11時を指そうとしている。

「あいつの遅刻はいつものことだし、仕方ないわ」

かがみがため息をつきながらそう言った。

結局こなたが来たのは

11時を30分も過ぎてからのことだった。

「いやー、ゴメンゴメン。駅で重そうな荷物持ったおぼあさ『言い訳はいいからさっさと行くぞ（わよ）』……はい、わかりました・
・・」

ほんとにどうしようもないやつだな。

来てすぐに言い訳を言うか……。

こいつらしいと言えばそれまでだが……。

結局昼も近いしつかさがずっと待ってて疲れてるみたいだからか
がみの提案で昼がわりにケーキバイキングへ行って休むことになった。

店に入り、テーブルまで案内されると店員から時間は1時間半で残した分は別料金がかかると説明された。

説明を受けたあと全員でケーキを取りに行って戻って来る。

他の4人はかがみをはじめかなり大量のケーキを持ってきた。

俺はあまり甘い物は好きじゃないから少なめである。

正直甘い物が嫌いな俺にして見ればかなり多いのだが……。さらにあっという間に1回目を持ってきたケーキを食べ終え2回目も1回目と同じ量を持つてくる。

ってこいつらこれ全部食べる気か……？

「そんなに持つてくんのはいいが全部食べれんのか？」

「これぐらい大丈夫よ。佑樹くんも食べた方がいいわよ」

「もういらねえよ。甘いもんはあんま好きじゃねえし」

「佑樹くん、甘い物得意じゃないの？こんなにおいしいのに……」

「まあ、食べれないなら仕方ないけど。もったいないネ」

結構余裕そうだな。

まあ、万が一も考えて飲み物でも用意しとくか……。

「うう、もう無理……」

「調子乗りすぎて持つてきすぎたかしら……」

数分後俺の予想は見事に当たった。

持ってきたケーキを8割ほど食べきったところでこなた達の動きが止まった。

ちらっと向こうの方を見ると店員がこっちを見ながら様子を伺っていた。

仕方ねえな・・・。

視線を戻して隣のかがみのケーキの皿をこっちへ寄せて食べはじめる。

「ちょ、なにやってるの！？佑樹くん。ケーキ苦手なんでしょ？」

「食べれないほど嫌いってわけじゃねえ」

「でもあんまり無理しない方がいいんじゃないですか？」

「こんなちよつとしか残ってねえのに無理もねえだろ。それにだいたいこうなることは予想して元々食べてねえから大丈夫だよ」

と言いつつケーキを次々と食べていく。

結局10分で4人のケーキを食べきった。

「大丈夫？佑樹くん」

つかさが店を出てからずっと俺を心配そうな顔で見ている。

「大丈夫だ。あれぐらいならたいしたもんじゃねえ・・・」

「大丈夫だ。あれぐらいなら許容範囲だ」

ってかつかさ。心配してくれんのはうれしいんだが顔が近い・・・
(汗)。

「それで佑樹くんがバイトしてるカラオケ店ってどこにあるの？」

「その角を曲がったとこだ」

店から出た俺達はかがみの提案で俺のバイト先のカラオケへと行くことになった。

ほんととは嫌なんだけどな・・・。

まあ、そんなことは絶対言えないが・・・。
と考えているうちに目的地に着いた。

「着いたぞ。ここだ」

と4人に言いながら中へ入る。

「いらっしゃいま・・・って佑樹ちゃんじゃない！どうしたの？
今日は担当じゃないわよね？」

「こんにちは店長。今日は友達と来たんですよ」

俺がそう言うのと後ろから4人が顔を出した。

「」「こんにちはわ」「」

「あらあら・・・かわいい女の子ばかりね。私はこの店の店長で
佐川亜紀って言うの。よろしくね。それで？佑樹ちゃん、誰が好み
なのかしら？」

「いや、だから友達ですって！さっきいったじゃないっすか」

ていうかお前らもなんで顔赤くしてだんだよ。
誤解されんだろ！

「クスッ・・・冗談よ、佑樹ちゃん。じゃあ部屋まで案内するわね」

「はい・・・。あと佑樹ちゃんって呼び方やめてください」

と言いながら未だに顔を赤くさせている4人を正気に戻してから部屋まで歩いていく。

ちなみに部屋まで行く間にずっといじられていたのはできれば記憶から消去したい。

「さて、どんどん入れるよ♪」

「一気に入れすぎだろ、お前・・・」

「はやくしないとこなたのアニソンメドレーになるわよ」

確にかがみの言う通りだな。もうすでに3曲入っている。

もたもたしてたら結局こなたしか歌わなかったなんてことにもなりかねない。

ちなみにつかさとみゆきは本を使って曲を決めている。

かがみも入れたようだし俺も入れるか・・・。

「佑樹くん。何歌うの？」

かがみが聞いてくる。

「そうだな・・・、こなた寄りのもあるけど普通の歌の方が多いと思うぜ」

ま、と言っても俺の場合はこなた寄りのロボット系とハ○ヒぐらい。

他にアニソンは歌うが

女子でも見るようなものしかない。たとえばナ○トとかブ○ーチ。

「そうなんだ。上手いの？」

「上手くはないと思うが・・・」

だいたい何点とれば上手い部類に入るのかがわからねえ・・・。

「ふうん、まあ男子の歌なんて聞く機会ないから期待してるわよ」

「たぶん上手くねえから期待すんなよ・・・」

そしてこなたとかがみの歌が終わり俺の番になった。

「「「・・・」」」

なんか視線が集中してる気がするのだが・・・。
まあ、いいか。

「♪なにかもそうだろ？バツの悪い事情にはいつも蓋して食わせ物のリアル〜、歪んだジレンマ時代で約束したはずの二人さえ気付かず通り過ぎていく〜♪」

「おお、いきなりこの曲で来るとは・・・佑樹くんやるね〜」

「え？じゃあこれもアニソン？」

こなたの言葉を聞いてつかさが聞いてくる。

「そうだが・・・これは有名なグループが歌ってる曲だからアニメ関係なく結構誰でも歌う曲だよ」

「へえーそうなんだ」

しかしアニメ関係のばっか歌ってたらほんとにこなたと同類にされそうだな・・・。

その後は適当にG○e e e e NやE○I L Eなどの有名グループの曲の間にアニソンを入れながらみんなでわいわい楽しく歌っていた。

5時間後・・・、満足した俺達はカラオケ店を出て帰りの電車の中にいた。

「いやー、佑樹くん。歌上手かったねえ」

「そんなに上手くねえよ」

「なに言ってるの？佑樹くん上手かったじゃない」

「そうですよ。上手かったですよ」

「それ言うんならお前らも上手かったじゃねえか」

こなたはアニメ曲しか歌っていなかったがそれでも上手いのはわかるし

かがみもかなり上手い。つかさも声がきれいだしみゆきに至っては何も言う必要はないだろう。

ちなみにこなたと俺を除く3人が次の日、喉がかれたと言っていたのは別の話である。

GWの過ごし方（前編）（後書き）

やっとテストが終わりました。

結果はかなり上出来だと思います。関係ない話ですが・・・

あと評価してくれるとありがたいです。

あまり出来は良くないので作品の向上のためにぜひお願いします

GWの過ごし方（後編）

GW5日目。

俺はこなた達と約束した通りゲームセンターに行くため
集合場所にした駅前にいた。

ちなみに昨日は一昨日のカラオケでつかさとかがみ、みゆきの3人が
喉がかわれたと言っていたのでなしとなった。
しばらくしてこなた達が4人揃ってやって来た。

「おはよう、佑樹くん☆」

「おはよう、佑樹くん」

「おはよう、佑樹くん♪」

「おはようございます佑樹さん」

4人それぞれあいさつをしてくる。

「おはよう」

とあいさつを返してゲームセンターに向う。

ゲームセンターへ着くと4人はそれぞれ分かれてゲームを始める。

俺は最初は観戦しとくか。

「まずかがみのところでも行ってみるか」

と呟きつつかがみが歩いて行った方へ行くとかがみがシューティン
グゲームをしていた。

「上手いな・・・」

「そう？そんなんじゃないわよ？」

かがみが一瞬こっちを見て答える。

「それだけできりゃ上手っていうレベルだろ」

「そうなんだ・・・」

ん？なんかかがみが俯いてる・・・。

俺悪いこと言ったか？

しばらく沈黙が続いたが・・・。

「そういえば佑樹くんはゲームしないの？」

「ん・・・、最初は見てるだけにするよ」

「そう。じゃ、私もこなたの見に行こうかな」

俺とかがみはこなたのところへ向かった。

こなたは格ゲーをやっていたのだが・・・。

かなり強いな・・・。

相手は同じ陵桜の制服だが後ろのやつは聖フィオリナ女学院の制服を着ている。

それはともかく相手はこなたの連続攻撃にまったく歯が立ってない。強すぎだろ・・・。

「あいつ、また強くなったわね・・・。まったくどんだけゲームに

金使ってんだか・・・」

かがみもかなりの呆れ顔で見ている。

確かに・・・、どれだけ金つぎ込んだらこれだけ強くなるのだろうか・・・。

「うう・・・、佑樹くん代わって・・・。」

こなたがかなり疲れた表情でこっちを見てくる。

それもそうだ。俺が見てる限り8戦はやってる・・・。

相手は相当な負けず嫌いのようだ。

だが、ここまできると正直迷惑だと思うのは俺だけだろうか・・・。
というわけでこなたと俺がバトンタッチ。

「佑樹くんってゲームセンター来たことあるの？」

「あるのはあるが・・・、もう1年は来てねえかしんねえ・・・。」

「

久しぶりなので上手く操作できるか不安だ。

そして対戦が始まる。

20分後・・・、やっと向こうの金欠で俺は解放された・・・。

俺が代わってからすでに10戦はしただろうか・・・。

「お疲れさま、佑樹くん」

「いやゝ、強いねえ佑樹くん！今度は私も対戦してみたくなったヨ」

「・・・勘弁してくれ・・・」

一応女の子には負けないので適度に手加減しながら全勝したのだが、

さすがに10戦もやると精神的にかなり疲れる。

「冗談だよ。でもほんと強いねえ」

「確かにこなたと対戦してもいい戦いができると思うわ」

「ああ・・・、ありがと・・・」

今はなにを言われても素直に喜べない・・・。

まじで疲れた・・・。。。

相手の方は落ち込んでるのか後ろで見ていた女の子に慰められている。

「うう・・・、勝てない上に今月のお小遣い無くなっちゃった・・・」

「それはこうがしつこく挑戦するからでしょ？仕方ないじゃない」

「でも今月は買いたい本があるのに・・・」

「その分は私が貸してあげるから。元気出して」

というような会話が聞こえてきた。

なんだかんだで後ろの子は優しい性格のようだ。

ああいうタイプがモテるのであろう・・・。

しばらくして俺達はつかさとみゆきの所へ向かった。

「あゝ・・・、また取れなかった・・・」

「どうしたんだ？つかさ」

2人のところに行くときクレインゲームの前でつかさとかがみが落ち込んでいた。

俺が事情を聞くとみゆきが

「実はつかささんがヌイグルミを取ろうとしてるのですが上手く行かなくて」

と説明してくれる。さすがみゆき、的確な説明でありがたい。

「もう何回も失敗しちゃって・・・」

「っていうかつかさ。お金残ってるの？」

「あゝ！・・・どうしよう、結構使っちゃったよゝ！」

「だからいつも気をつけて使いなさいって言ってるじゃないの」

「はうゝ・・・、ごめんなさい・・・」

つかさは少ししょぼんとした顔になった。

「でも確かにこういうのって全然取れないからやらないのよねえ・
・」

「ここは私に任せなさいっ！」

とこなたが前へ一步出てきてお金を入れる。

結構自信満々だが大丈夫だろうか・・。

だがこなたは、場所を指定してあっという間につかさ目当てのヌイグルミを

取ってしまった。

あまりの早業に思わず自らの目を疑ってしまう。

「はい、つかさ。取れたヨ」

「ありがとう、こなちゃん」

こなたが入口から取り出したヌイグルミをつかさに渡す。

その隣でかがみがお金を取り出してクレーンゲームをしようとしている。

たぶんあれだけ簡単に取れたのだから自分も出来るだろうと思ったのだろう・・・。

しかし、現実は・・

「アレ？」

「ウソ！」

「何で!？」

結局かがみは1回も取れなかった。

「偉い人は言いました。UFOキャッチャーは貯金箱であると」

「上手いわね・・・」

その後落ち込んだかがみを励ましつつ帰路についた・・・。

GW最終日。

俺はかがみ、つかさの家へと来ていた。

なぜ俺がここにいいのかというと、それは昨日のかがみとの電話ま
で遡る。

俺がバイトから帰宅した時のこと・・・。

「あ?勉強会？」

「うん。答え合わせも兼ねてね。来れる？」

「まあ、別にかまわねえけど・・・。なんで俺なんだ？」

「実は昨日こなたのやつから電話来てね。『宿題の掃除も兼ねて勉強会でもない?』って

電話してきたのよ。でも私はつかさにも教えないといけないしみゆ

きは来れないって言うから
アンタしか頼るやつ居ないのよ。もちろん勉強は終わってるんでしょ？」

相変わらずだな。あいつは……。

「まあな。で、どこでやるんだ？」

「佑樹くんの家って駄目なの？」

「ああ……、わりいな今は姉貴の友達が泊ってるから無理だ」

「そうなんだ。じゃあ、私達の家しかないわね。こなたの家じゃあいつゲームするし……」

さすがかがみ……。こなたをよく知ってるな……。

その後俺は家の行き方をかがみに教えてもらってそこで電話は切れた。

宿題と言っても数学と英語に世界史だけだしな……。

俺は終わってるし一日いっぱいかかるってものでもなさそうだからな……。

勉強が終わった後のことも考えた方がいいな。

「なんかお菓子でも買ってくか……」

というわけで俺は時間通りに家まで来た。一応お菓子を買ってきた。こういうのは最初が肝心だからな。

ピンポーン

チャイムを鳴らすと若い女の人が出てきた。
かがみ達の姉さんか？

「あらあら、あなたが佑樹くんね。私は柊みきよ。かがみ達から聞
いてるわよ」

「どうも。よろしくお願いします」

「それにしてもあの2人が男の子を家に呼ぶなんて・・・。
今日はお赤飯を炊いた方がいいかしら？」

「あの、勉強しに来ただけですよ？」

そこへ、かがみとつかさがやってきた。

「おはよう、佑樹くん」

「あ、佑くんおはよう！」

佑くん？俺のこと言ってるのか？

「おはよう。・・・でつかさ？佑くんってなんだ？」

「佑樹くんのあだ名だよ。これからは佑くんって呼ぶからね」

あだ名で呼ばれたことなんて一度もないんだが・・・。
慣れてないせいかもしれないぞ・・・。

「ま、ともかく部屋に上がって」

「ん？こなたはどこにいるんだ？」

「まだ来てないに決まってるじゃない」

やっぱりか……。ってか聞いた俺が間違いかもしれない。

でもこの勉強会ってこなたが言い出したんだよね？なんで一番に言
ったやつが

一番遅せえんだよ……。

ま、あいつのことを気にしてもしゃーないな。

「あ、これつまらないものですけど……。」

俺は姉さんに途中で買ってきた行列のできる有名店のプリンを渡し
た。

「あら、わざわざそんなもの買ってこなくてもよかったのよ？」

「いえ……、一応家にお邪魔するわけですし……。これぐらい
普通ですよみきお姉さん」

俺の最後の言葉にみきお姉さんが笑い始める。

「ん？俺変なこと言ったか？」

「ちょっと、お母さん！佑樹くんにお姉さんって言ったの？」

「あら、私は名前しか言っていないわよ？」

へっ・・・？お母さん・・・？

「お母さんって・・・若っ・・・」

「あらあら、そんなに若く見えるかしら」

「えっと・・・、姉妹って言っても誰も違和感無いと思うんですけど・・・」

その後なんとか立ち直った俺はみきさん（そう呼ぶことを強制された）にプリンを渡しかがみの部屋に入った。

「ごめんね。うちのお母さんが・・・」

「いいよ。もう気にしてねえから」

しかし、あんな若いお母さんなんて見たことないんだが・・・（汗）。

下でクッキーを焼いていたつかさが上に戻ってきてこなたは置いというて先に勉強することにした。

「佑くん、ここはどうするの？」

「ああ、そこはその公式じゃなくてこっちの公式を使った方がやりやすいぞ」

「ねえ佑樹くん、これよくわからないんだけど・・・」

「そこは年号で合わせて覚えてたほうがいいぞ。ややこしくなるしな」
つかさはGWの宿題の数学（他はなんとか終わったらしい・・・）
をやっている。

一方かがみは次の中間テストに向けた復習。

そして俺も、中間テストの勉強をしながら2人の分からない所を教える役。

ここまではいい。別に頼られるのは嫌いじゃないし・・・。
だが問題は俺の座っている位置。

真ん中に俺が座っていて右にかがみ、左につかさ・・・。

つまり俺は2人に挟まれている。しかも2人とも寄り過ぎだ・・・。
30分後・・・、こなたがやって来た。

同時につかさがクッキーを持ってくるというのでやっと俺は解放
された・・・。

あれだけ寄られたらどんな奴でもドキドキすんのは当然だ・・・。

「かがみ、宿題写させて☆」

「アンタは自分でやる癖を覚えろ！」

ドゴッ

「うゝ、佑樹くん・・・、かがみが虐めるよ・・・」

「なっ！虐めてなんかいいわよ！」

「んなこと言ってないでさっさとやれよ。どこまで終わってんだ？」

とりあえずこの喧嘩を見ても埒が明かないので話を進める。

「え？ 私なんにもやってないけど」

なんにもやってない・・・？

「こいつは、宿題はいつも写してるからやらないのよ」

こいつ・・・、やっぱりくでもないやつだな。

呆れながらもつかさが戻って来たので

クッキーを食べながら勉強を再開する。

昼飯を挟んで2時間後・・・。

つかさもとこなたもGWの宿題を終えていた。

もちろんこなたは写すだけだったが・・・。

その後はゲームなどをしながら夕方まで過ごし俺とこなたは帰宅することになったのだが・・・。

こなたとつかさ、かがみがこつちを向いて笑顔で

「「来週の土日もしっかりね（♪、☆）」」

と言ってきた。

「は？ なんで来週？」

「だって来週の土日明けテストでしょ？」

「だからまたよろしくネ！」

「・・・まじかよ」

こうして俺の意見なしに来週の土日の中間テスト対策勉強会の開催が決まった。

GWの過ごし方（後編）（後書き）

まずは皆様に謝ることがあります。

3話の投稿をミスしてしまいました・・・。

しかもその投稿するはずだった分も間違って消してしまったみたいで・・・

おかげで今回の投稿時間が遅くなりました。本当にすみません！

あと最後は適当です・・・。

なにかアドバイス等くださればありがたいです。

勉強会合宿1日目

GWも明け最初の学校。

俺は焦っていた。何故って？

遅刻しそうなんだよっ！

いかん……。昨日こなたの誘いに乗るんじゃなかった……。

実は家に帰ってからこなたからネットゲしない？と言われやったのが……。

やり始めたら結構面白くって朝の4時までずっとやってしまった……。

少し仮眠をとろうとおもったのだが思いっきり寝過して現在8時30分。

35分には門が閉まるのでそれまでに入らなければならない。

こんなところで遅刻などしてたまるかっ！

<黒井先生視点>

「はぁ、かったる……」

なんでうちが遅刻指導せなあかねや……。

ま、遅刻しそうな奴いじめんのはおもしろいんやけどな！

でももう来る奴いてへんやろ……。

「ん？……あれ佑樹か？」

あいつが遅刻なんか珍しいな……。

他に誰も居てへんしちよっといじめてみよか。

< 佑樹視点 >

あ、黒井先生がいる。

間に合ったか・・・。

と思って息を吐いた瞬間黒井先生が門を閉めはじめた。

「なにしてんですか！？先生！」

「なにっでもう自分遅刻やん」

「だからって閉めなくてもいいじゃないっすか！！」

「ええやん。どうしても入りたいやったら土下座でもしてみることやな」

ぐっ、この人・・・。絶対楽しんでるだろ。

土下座なんかしたくねえしな・・・。仕方ねえ。

俺は少し下がって門へと走っていく。

「通れねえなら、超えて通るまでだ！」

十分な助走から比較的小さい門を超えて校内の敷地に着地する。

それをみて先生はパチパチと手を叩いていた。

「やるもんやなあ・・・佑樹」

「誰のせいでこんな入り方しなきゃならなかったと思ってんすか・・・」

ったく・・・なんで学校に入るだけでこんな疲れなきゃなんねえんだ・・・。

その日の昼休み。

午前中身体的にも精神的にも疲れて寝ていた俺にみゆきがはなしかけてきた。

ちなみにあの3人は学食で食べるらしい。

弁当でも忘れたのか？

俺は朝の出来事をみゆきに話した。

「それはそれは・・・大変でしたね」

「まあ、朝までこなたに付き合ってた俺がわりいんだけどな」

「でも、良かったです」

「・・・ん？なにが良かったんだ？」

俺はみゆきの言った言葉の意味がまったくわからず？マークが頭の上を回っている。

「いえ、今朝から来てからずっと寝てたので私も泉さん達もずっと心配してたんですよ？

でも元気になってよかったです」

そうか・・・心配かけてたのか、俺は・・・。

あとでお礼言っとかなきゃな・・・。。。

GW明け最初の週末前の朝。俺はいつもの通り学校へ登校すると

「おーい、佑くーん！」

門の手前で後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

その瞬間俺の近くを歩いていたやつらがこっちに視線を向けてきた。
つかさのやつ・・・また恥ずかしいことを・・・。
と考えてるうちにつかさとかがみが俺の真横まで来た。

「どうした？今日はずいぶんと機嫌がいいんだな。つかさ」

「うん！ほら見て、お父さんに携帯買ってもらえたの！」

「へえ・・・良かったな。買ってもらえて」

「うん、ありがとっ♪」

まったく・・・子供みてえに笑ってやがる。

あれだけはしゃげんのもつかさのいいところなんだろうな・・・。

「つかさったら、昨日買ってもらってからずっとこの調子なのよ・・・」

「いいんじゃないの？それだけ嬉しいんだろうさ」

そういえば・・・携帯と言えば・・・。

「つかさ、ちょっとこっち来い」

「ん？どうしたの？？」

俺はポケットから携帯を取り出しながら

「番号とメアドを交換しよーぜ」

しかし・・・

「えっと・・・あれ？・・・ちよつと待っててね」

携帯を片手に迷っている。まあ、昨日買ったばかりじゃ仕方ないか・・・。

「佑樹くんって携帯持ってたんだ？」

「持ってたけど・・・あんまメールするやつもいなかったし役に立ってたわけじゃないけどな」

「へえ・・・。じゃあ、私も交換しとこうかしら」

かがみが携帯を出して赤外線交換する。

「これでメールできる相手できたんじゃない？」

「私も佑くんのメールの相手になるよー♪」

「・・・ああ、ありがと」

とお礼を言って気づく。

「で？見つかった？」

「はうっ・・・もうちょっと待って・・・」

再び携帯を片手に探し始めた。しかし、メール相手か・・・。
やれやれ・・・これからは家に居ても大変になるかもな・・・。

その日の放課後。

かがみが帰ってる途中で

「あ、明日からの勉強会なんだけど・・・佑樹くんの家でいい？」

「あ？別にいいけど・・・。お前らの家はだめなのか？」

ちなみに今回はみゆきも勉強会に参加することになっている。

「まずこなたの家だと勉強に集中出来ないだろうから却下」

「かがみ？それは酷いんじゃないカナ？」

後ろでこなたが反論してるがスルーしておこう。

「みゆきの家は都心で遠いし・・・私たちの家はお姉ちゃんたちの
友達来るらしいから

今回はダメなのよ」

「お力になれずすみません・・・」

そんな丁寧に謝ることじゃねえだろ。

「とにかくまあ、いいよ」

「あ、それと土日は泊まり込みで勉強だからねっ☆」

「それは勘弁してくれ」

「いいの？ バイト。バ・イ・ト！」

こいつ……。なにかとこのネタを盾にしやがって
しかし、それを言われちゃおとなしく従うしかねえしな……。

「まったく……分かったよ」

こいつらといると退屈という言葉がなくて助かるな……。
笑いが絶えないのはうれしいことだしな。

余談だがその日のうちにつかさは携帯を服のポケットに入れたまま
洗濯してしまい
使えなくなったそうだ……。

時間は飛んで土曜日。

俺は家から最も近い駅まで来ていた。
なぜかっていうと……

「わざわざすみません……」

「別にいいよ。近かったしな」

みゆきを駅まで迎えに来ていた。

実は昨日かがみにみゆきから

俺の家の場所がわからないという電話があったらしい……。
んで俺が駅まで迎えに来た。

でも1つ思うんだけどよ……、電話があったんなら

そのまま駅で合流して来りゃ良かったじゃねえか……。

それにこなたを俺が不在の時に家に野放しにするのは嫌なんだよな。
まあ、かがみがいんだから何かあったら止めてくれてんذار。

「そういえば、私男の人の家に行くの初めてです」

「あ？ そうなのか？」

「ええ……従兄弟の家に入ったことあるんですが兄妹みたいなものですし

同級生の男の人の家に入るのは今回が初めてなのでちょっと緊張しますね」

「ふうん、そんなもんなのか」

「はい……たぶん泉さん達も最初佑樹さんの家に行った時は緊張していたと思いますよ？」

「……そうか？」

かがみやつかさなら緊張してたかもしれないけど

こなたに緊張なんてもんがあんだろうか……。

正直疑問に思うとこだぜ。

「……ふふ」

突然みゆきが笑い始める。
一体どうしたんだろうか？

「いえ、泉さんはきっと緊張してるのを佑樹さんに知られるのが恥ずかしいんですよ」

あいつが恥ずかしがる？なんでだ？

うゝむ……まったくわからん……。

その後は今日の勉強会などの話題で話しつつ家へと到着した。

「ただいま」

「お邪魔します」

と一応あいさつをしてリビングに入ると

「おーっす、みゆき」

「みゆきさん、おはよう☆」

「ゆきちゃん、おはよー!」

三者三様の応対をしてあいさつした。
もちろん勉強をしている。

俺もみゆきも勉強道具を出して始める。

「ねえ、ここどう解くの？佑樹くん」

「そこはその公式じゃやりづらいからこっちの公式使った方が解ける。」

要は応用だから公式に縛られすぎない方がいいぞ」

「佑くん。ここの文はどう訳せばいいの？」

「そこは主語はあまり意味を持たないからそれじゃなくてIと文に直すんだよ」

「佑樹くん。ここはどう覚えればいいの？」

「地図のところは教科書やノートに書いたところが出てくるからそこを重点的に

覚える。今回は黒井先生が作るみたいだからノートとったやつ見ればだいたい点数とれるしな」

「佑樹さん。こことこっちの問題ってどう違うんですか？」

「1問目の問題はここに出てくる公式に当てはめれば出るけどもう1つの問題は

1度こっちの別の公式で答えだしてから当てはめないと単位が変わるから

問題文でこの表現が出たら2つの公式で解くんだって覚えてた方がいいな」

「ここわかんん……ってどしたの佑樹くん？」

「なあ……1つだけいいか？なぜ俺だけに聞く」

「だって佑樹くん頭良いんだもん☆」

「あのなあ・・・だからって俺ばっか頼るな。疲れんだろ・・・」

「・・・頭いいってところは否定しないんですね？佑樹さん」

「・・・！！いいだろ別に！」

「だって否定しなかったじゃない？それって認めてるってことでしょ？」

あまりにも的確な言葉（？）にかがみの言葉が鋭い槍となって俺の胸に突き刺さる・・・
ような感じがした。

「あ、凶星なんだ・・・（ニヤリ）」

そう言われて黙り込んだ俺にこなたがからかうように言ってきた。

「・・・このっ・・・」

俺は睨みつけるようにこなたを見た。

だがこなたはそれを見て舌をベツと出してバカにしてきた。

くっ・・・、落ち着くんだ俺。こいつを相手にしても俺が疲れるだけだ。

「と、とにかく俺も自分の勉強してるからあんまり俺ばっかに聞かないでくれ」

「「えゝ!?!」」

つかさとこなたが声を合わせて抗議をしている。
えゝってなんだ。そんなに俺に答えを求めんな。

「そうね・・・私も人に頼りすぎたわ」

「ちゃんと自分の力で解かないといけませんしね」

抗議をしていた2人もなんとか納得させようやく勉強を再開した。
2時間はやったと思う頃・・・こなたが後ろに倒れこんで

「ねえゝ、疲れたから休憩にしない？」

と言ったので時計を見てみると時間は12時を指している。

「んゝそうだな・・・。一旦止めて昼飯でも食うか」

「そうね。昼飯は私とつかさで作るわ」

「えゝ？かがみ料理できるのゝ？」

こなたがかがみに冷やかしを言った。

「うるさいわねっ！？私だって出来るわよ！・・・頑張れば」

その冷やかしに起こるかがみだったが最後の方は声が小さくなって
少し自信がなさそうな様子を見せた。

「まあまあ、こなちゃん。お姉ちゃん最近料理勉強してるんだよ？」

「えっ、かがみさんが・・・？」

「ちょ・・・つかさ！あんたまた余計なことを——」

「それは誰かのためかな？男のためかな？」

かがみがつかさ突っ込んでる途中でこなたがニヤニヤしながらかがみをからかう。

「うっさい！あんたはなんでもそのネタに持つてくな！」

かがみは顔を真っ赤にしながらかを追いかけ始めた。
俺はそれを見つめていたが埒が明かないのでかがみに向かって

「いいんじゃないの？物事について努力するのはどんな理由であれいい事なんだと俺は思うぜ？自分が頑張れる原動力になんだからよ。ま、その原動力の正体がなんなのかはまったくわからんが・・・」

<かがみ視点>

佑樹くんの言葉にこなたを追いかけてた私は止まった。

いい事言うじゃない。佑樹くん・・・。

ま、その原動力が自分にあるって気づいてくれれば一番うれしいんだけどね。

「期待してるぜ！」

下を俯いていた私に佑樹くんがそう言ってくれた。

「そうね。じゃあ、つかさ。ご飯に作りに行くわよ」

私はつかさを連れて部屋を出る。あの人の期待に応えたいという気持ちで芽生えていた。

そして自分でも気づいていなかった・・・。

自分の心の中に芽生え始めたもう1つの大きな気持ちに・・・・・・。

<佑樹視点>

その後俺たちは2人が作った昼飯を食べたあと夕方近くまでテスト勉強をしていて、勉強が終わると

皆それぞれ思い思いのことをして過ごした。

俺はというとこなたとPCでネットゲをしていた。

ふと心の中でこの4人との生活することに馴染んでる・・・いや、楽しんでいる

自分がいるのに気づいた。

こうやって出来るのも隣にいるこいつのおかげなんだよな・・・。

そう思って横を見ると隣のPCでやっていたこなたの後ろに同じような姿をした人が見えた気がした。

目を擦ってもう1回見るが今度はなにも見えなかった・・・。

「ん？どしたの佑樹くん」

「いや、なんでもねえ・・・」

気のせいか・・・？幻覚でも見えちゃったって言うのか？

まあ、いいか・・・。

このときの俺は気のせいにしていたがそれは気のせいじゃないことを後々知ることとなった。

勉強会合宿1日目（後書き）

やっと更新できました・・・

クリスマス時期ということもあってなにかと忙しいですがなんとか更新していきますので

感想評価なんでも言ってください。

勉強会合宿2日目

「ふぁ・・・もうこんな時間か・・・」

現在朝の4時・・・。今回は決してネットゲをしてこんな時間まで起きてたんじゃないぞ？

俺は5時にセットされている目覚まし時計を止めて着替え始めた。

さて・・・少々早く起きちまったみてえだな・・・。

まいったな・・・こんだけ早く起きちまうとなにもすることねえし・・・。

「仕方ねえ・・・たまにあれでもするか」

俺はそう呟きながら私服に着替えて裏の庭へと出る。

裏の庭にはかなりの広いスペースがありバスケのゴールなどがあった。

「ま、たまにはバスケして過ごすのも悪くねえかな・・・」

1人事をつぶやきながらバスケの基本練習などをして汗を流した。

30分後、1通り基本練習を終えるころには汗だくになっていた。ちっ・・・だいぶなまってやがんな・・・。もう1回鍛えなおしくか・・・。

でもやっぱ1人じゃつまんねえな・・・。誰か練習相手でも居れば面白いんだが。

と考えつつ汗をかいたのでシャワーを浴びに行った。

「だいぶなまってたんだな……。体が上手く動かねえや」

そう思いつつズボンをはいて上半身裸（タオルを首にかけた状態ではあるが）のまま

冷蔵庫に飲み物を取りに行く。

この時、俺の頭の中にはこなた達がいることはまったく忘れていた。

冷蔵庫からコーラを取り出し飲みながらリビングに向かっていと運悪くリビングにつながる2階の階段からみゆきが降りてきた。

「あ、佑樹さん。おはようご……ってなんて格好してるんですか佑樹さん!？」

みゆきは挨拶しかけてそう俺に言った。

「あ、わりい……」

やべ……みゆき達居るの忘れてた……。

そう思って服を取りに行こうとしていた時、後ろでばたんと倒れる音がした。

振り返ってみるとみゆきは階段にもたれかかるように倒れている。

駆け寄ってみると目を回していたので、気絶をしたようだ。

とりあえず何とかした方がいいと思った俺はみゆきを抱きかかえよう（俗に言うお姫様だっこ）としたが……

「あ、佑樹くん、おはよ……」

これまた運悪くかがみが2階から降りてきた。

しかも今の状態は抱える前なので押し倒した形にも見えなくはない。
かがみは俺とみゆきの状況を見て固まったかと思うと

「アンタ、みゆきになにしようとしてるのよ!!」

「待てっ・・・かがみ!これには深いわけがあるんだ!」

「問・答・無・用・っ!!」

バキヤ、バキ、ドカ、ドゴツ・・・。

俺は鬼のような形相をしたかがみに殴られ、そこで意識が途絶えた。

<かがみ視点>

佑樹くんが私に殴られたことで気絶したあと、意識を取り戻したみゆきが事情を説明してくれた。

私はとりあえず佑樹くんに心の中で謝りながら、あとで謝らなきゃ
なと考えていた。

そしてそのままにしといたらダメだと思いみゆきと2人がかりでソ
ファへと寝かした。

そこで先ほどの会話で目が覚めたつかさとこなたが降りてきた。

「朝から何やってるの?お姉ちゃん」

「もうせっかく寝てたのに起きちゃったじゃん、かがみ」

「実はですね。ちょっとした問題がありまして・・・」

「えっ？なにがあったのゆきちゃん」

つかさの問いには答えないで私は佑樹くんの方を見ていた。

佑樹くんって、さすがバスケットか運動やってただけあって

筋肉すごいわね．．．ってなにを考えてるんだ私は！

今はそんなことを考えてる場合じゃなくて反省しなきゃだめじゃない！

「う．．．うん．．．」

私が自分を責めていると佑樹くんが目を覚ました。

<佑樹視点>

「う．．．うん．．．」

俺は周りから聞こえる話し声で目が覚めた。

あれ？俺なんでソファで寝てんだ？

確かかがみに殴られてそのまま気失ったんだよな．．．。

「あ、佑樹くん。大丈夫？」

「．．．．．」

俺はこなたの問いに答えずにバツが悪そうな顔でこっちを見てるかがみを見た。

とそこで俺はかがみと目線が合った。するとかがみはすぐに目線を

外して下を俯く。

返事もしない俺が心配になったのかつかさも近づいてきて

「佑くん、なにかあったの？」

と聞いてきた。あんだけ気にしてるんだからほんとのことは言わない方がいいよな・・・。

俺はそんなことを考えながらつかさを見上げて

「風呂上りに倒れただけだ。心配するようなことじゃねえよ」

俺がそういった瞬間、かがみが驚いた表情でこっちを向いた。

「それを見つけたかがみさんが部屋にいた私を呼んで助けたんですよ」

みゆきも俺の意図に気付いたようでそう言った。

俺がみゆきを見るとみゆきもこっちを向いて笑っていた。

つかさとこなたは大変だったね」と声をかけてくれたので恐らくは気付いていないのだろう。

あとは話を逸らすだけだな・・・。

「さて、そろそろ朝食作るか」

俺はそう言って立つと上の服を取りにいったキッチンに向かう。

さて今日は洋食メインでいくか・・・。

「とりあえず食パン焼いて一応ジャムとチョコクリームを用意してスクランブルエッグとソーセージを焼いてサラダを作ればいいかな」

と呟きながら朝食の準備をしているとかがみがキッチンに入ってきて

「佑樹くん、私も朝食作るの手伝うわ」

と言ってきた。俺はサラダに使う野菜を水洗いしながらかがみに

「じゃあスクランブルエッグとソーセージ作ってくれ」

「分かったわ」

かがみは俺の言葉に頷きつつフライパンでスクランブルエッグを作りはじめた。

しばらく俺達は2人とも黙ったままだったがかがみが

「・・・さっきはありがとね」

「気にするな」

「なんで嘘ついたの？」

「お前が罪を全て抱え込んだような顔をしてたからだ」

俺はそう言っただかがみの方へ顔を向けて

「今回は俺のせいでもある。お前らがいるのを忘れてなかったらこんなことは起きてなかっただろ」

「で、でも・・・!」

「だから今回はお互い様だ。これでこの話題は終わりだ。さっさと

飯にしようぜ」

「……………そうね」

<こなた視点>

佑樹くんがキッチンに入ってから数分後、それまで私とつかさ、みゆきさんの3人の雑談に入ってこなかったかがみが急に椅子から立ち上がるとキッチンへと入っていった。

「どうやらかがみは佑樹くんを手伝いにいったみたいだね」

「そうだね」

つかさも頷いている。

私はみゆきさんの方へと顔を戻し

「さっきはナイス演技だったよ、みゆきさん」

「え？演技って気付いてたんですか？」

「そりゃあれだけ叫んでたのにただ転んだだけって不自然じゃん」

「それに佑くん目が覚めた時、こなちゃんが話しかけたのに返事もしないでお姉ちゃんの方見てたし」

あ、つかさも気付いてたんだ……。

「確かにそうです。佑樹さんと私は嘘をつきました」

その後、みゆきさんから本当にあったことを聞いた。それにしても・

「佑樹くんもどっか抜けてるね」

「まあ、そこらへんは佑樹さんも色々あったのではないのでしょうか？」

「でも傷付くと思ってとっさに嘘つくなんて、佑くん優しいね」

「つかさの言う通りだね。佑樹くんは優しいし、そこがいいところなんだよね・・・」

「そうですね。ああ見えて佑樹さんは困ってる人を見るとほっとけない人ですからね」

その後3人で再び雑談をしているとキッチンから2人が顔を出して

「出来たぞー！！」

「運ぶの手伝いなさい」

と佑樹くんとかがみの楽しそうな声が聞こえてきた。

私達は3人ともお互いに顔を見合わせながら笑いあうと2人の手伝いをするためにキッチンへと向かうのだった。

<佑樹視点>

朝食を食べた後、勉強を始める。

「かがみゝここわからないんだけど・・・」

「そこはその公式使うのよ」

「佑くん、ここわからないよ・・・」

「とりあえず落ち着け、つかさ！そこは化学変化さえ覚えておけば大丈夫だ」

「みゆきさん、ここ教えて」

「そこはこの公式とこっちの公式で解くんですよ」

「ねえ佑樹くん、ここの英文ってこれでいいんだっけ？」

「そうだな。その文でいいと思うぜ」

「佑樹くん、ここわかんない」

「ん？そこは公式入れて解けば簡単だぞ」

「佑樹さん、ここはどう覚えればいいんですか？」

「そこは年号で覚えてけばいいよ」

「ねえねえ——」

「「こなた！アンタ（お前）全然考えてないでしょ（ねえだろ）！」」

「………考えてるよ」

どうなんだか……怪しいもんだな……。
しかも答えるまで随分間があったぞ？

「私だって考えてるよ？………でここからずっとわかんないんだけど」

「「やっぱり考える気ないじゃない（ねえじゃねえか）！！」」

「うゝ、最近佑樹くんとかがみのシンクロ率が上がった気がするヨ・
………」

その後はこなたに対してかがみが1対1で勉強を教えることとなり
俺がつかさに教えている時に隣から

「そこはこっちの公式を使って解くのよ！」

「………はい」

「って言ってるそばから間違えてるじゃない！そこも同じなのよ！
ちゃんと分かってるの！？」

「………はい」

「だいたいアンタは人に頼りすぎなのよ！授業中は寝ててノート書いてないし、

宿題も写すだけ！そんなんじゃないテストで大変なことになるわよ！！」

「・・・・・・・・すみません」

「今日はみっちりこの参考書で勉強するわよ！！」

「うう・・・・・・・・かがみが鬼になった・・・・・・・・」

というような声が聞こえてきた。

ま、自業自得ってことで済ましとこう・・・・。
しばらくして・・・・つかさが

「ねえ、そろそろお昼にしない？」

「そうですね・・・・そろそろお腹も減ってきましたし」

「じゃあ、お昼にしようか」

と言ってかがみが参考書を閉じてキッチンへ向かう。
みゆきも立ち上がると

「今日は私が手伝いますね。かがみさん」

「あ、うん。よろしく」

かがみとみゆきが作った昼飯を食べたあと再び勉強を始める。

「ここはこの公式で解くんだが・・・・こっちはそれじゃ答えでない

から変形してやればいいんだよ」

「う、うん……」

相変わらずこなたはかがみと1対1で勉強をしている。

みゆきは英語の英文をひたすら解いている。

そして俺はというとつかさと1対1で勉強を教えている。

しかし、さっきからつかさがまったく集中出来ていない……。

顔も赤いし風邪でも引いたのか？

<つかさ視点>

佑くんが教えるために頭を動かす度に佑くんからいいにおいがするよ……。

しかも若干吐息がかかっててくすぐったいし……。

でも佑くんがせっかく教えてくれているんだから集中しなきゃ！

「……さ……つか……つか……つかさ！」

「ふえ！？なに？佑くん」

っていうか佑くん顔近いよー！！

佑くんは一旦顔を離すとため息をつきつつ

「なにつて……お前今ぼーとしてたぞ？」

「え？私ぼーとしてた？」

「おう、なってたぞ。・・・大丈夫か？」

「うん、大丈夫だよ！」

「その割には顔が赤い気がするんだが・・・」

「え？き・・・、気のせいだよ！」

そこまで言って私は固まった。なぜなら佑くんが体温を調べるために自分のおでこで私のおでこに触れたからだ。

「ふむ、熱はなさそうだな・・・」

「ななな、何してるの！？佑くん」

「ん？何してるってなにがだ？」

はうゝ、なんで佑くんは恥ずかしがってないのゝ！？

「いや、なんでもないよ・・・！」

「でもなんか言わなかったか？」

「と・・・とにかく、大丈夫だからっ！」

「そうか・・・？」

「あ、私みんなのクッキー焼いたんだっ！持ってくるねっ！」

<佑樹視点>

「あ、私みんなのクッキー焼いたんだった！持ってくるねっ！」

と言ってつかさはキッチンへと走って行った。

ま、途中で転んでるのはつかさらしいが・・・。

それにしても逃げられたっていうか避けられたのかな・・・？俺・・・。

なんか悪いことでもした・・・のか？

その後つかさが持ってきたクッキーを食べた後、勉強を6時までやって勉強会は終了した。

ちなみに俺は今日1日つかさに避け続けられた。

勉強会合宿2日目（後書き）

まずあけおめです♪
新年最初の投稿ですが
あまり自信がないので
感想よろしくです！

芽生える気持ち　こなた・かがみ編

「なんでお前がここにいんだよ………」

今日はテスト当日で、今は朝の4時半……。

昨日の勉強会の後時間も時間だったので泊っていくことになった。

……はいい。1人じゃ正直寂し……ゴホンッ……いや

部屋は余ってるし、時間も遅い……今から帰るとなるとみゆきは大変だろうから別にいい。

そしてここは俺の部屋。ちなみに俺はベットで体を起こした状態だが……いつもと違うこととして目の前に何やらアホ毛のある小さい人影が見える。

「お前ってのはひどいんじゃない？」

「ああ、そうだな………ってそうじゃねえ！

なんで俺の部屋にいんだよ！」

「そりゃ忍びこんだからに決まってんじゃない！」

なに楽しげに暴露してんだこいつ……。つか指たてんな

「へえ……なんでそんなこと考えたんだ？」

「え？入ってたから」

おーおー……じゃあお前は初対面のやつの家でも入りたいからって勝手に入んのか。

「それにしても・・・前も入ったけど結構整頓された部屋だね」

「勝手に人の部屋あさるんじゃないよ、こら」

「えー、いいじゃん、減るもんじゃないし」

ガシッ

「佑樹さん？頭をつかんで何をしているのかな？」

俺が無言で部屋をあさるこなたの頭を掴むと

こなたはこちらに放してというような目線を向ける。

だがここで放してもまたあさり始めるだろうから、おしおきをして
おこう。

万力の要領で締め付ける。

しばらく部屋中にこなたの悲鳴が響き渡った。

「うう・・・ひどいよ・・・佑樹くん」

「わりいわりい・・・もう機嫌直せよ？」

数分後、俺とこなたは居間に降りてきて必死に機嫌取りをしている。

「なんでもするから許してくれ！」

言った瞬間こなたが顔をあげた。思わず自分の言った言葉を訂正し
たくなった・・・が

「なんでも？ほんとに？」

「・・・ああ、なんでもいいぜ」

「ふふ、なにしてもらおうかな?」

こんなに笑ってる顔見てたらそんな事はどうでもよくなってきた・・。

「じゃあ、デートでもしてもらおうかな?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ?」

今こいつなんつった? デートしてもらおうかなつったか?
それとも俺の耳がおかしくなったのか?

「待て今なんつった!?」

「だから、デートしようって言ったんだよ! いつにするかな?」

「ちょ・・・・・・・・ちょっと待て! なんでデートなんだ!?」

「え? だってなんでもするって言ったじゃ? ん☆」

「うつ・・・・・・・・いや、そうなんだけど・・・・」

「おやおや? 男が約束を破るのかな?」

「うう・・・・・・・・」

こなたがニマニマ顔でこっちを見てくる。
しかし、いきなり顔から笑顔が消えて窓の外を見ながら

「・・・それとも私みたいな子とは行きたくないのかな・・・？」

「・・・いや、そういうわけじゃ・・・」

「こんな小っこいのといたら変な人って思われちゃうもんね・・・」

「・・・いや、だから・・・」

「ふふ・・・嘘だよっ！喫茶店でなんかおごってくれればね」

「・・・そうか？」

なんか最後の方の言葉が気になったが・・・

「楽しみにしてくれるからねっ！」

これ以上聞かないでという言葉がこなたの笑顔からは感じ取れた気がしたのでやめることにした。

<こなた視点>

「じゃあ、デートでもしてもらおうかな？」

あれ？私なに言ってるんだろう・・・。喫茶店でなにかおごってもらおうかなって言おうとしたのに
なんでデートなんて言ってるの・・・？
佑樹くんも私の言葉に困惑気味だ。

佑樹くんが困ってる。やめなきゃ・・・。

「嘘だよ。喫茶店でなにかおごってもらうからね」って言わなきゃ・・・。

・・・なのに、なんで？自分の思いとは違うことを口にしてる・・・。

いや・・・これが私の気持ちなのかもしれない。ずっとずっと心の奥深くに眠っていた

自分の本当の気持ちなのかもしれない・・・。

・・・でも私は佑樹くんの困っている姿を見たくない・・・。

「ふふ・・・嘘だよ！喫茶店でなんかおごってくれればね」

やつと言えた・・・。佑樹くんはまだ腑に落ちないことがあるのか私の方を見て

何かを言いかけていた。

「楽しみにしてくれるからねっ！」

私は何を言われても答えられないから・・・自分の気持ちは何を意味してるのか分からないから

そう言って聞かないでという様な笑顔を向けた。それを見た佑樹くんは

「おう！喫茶店おごるくらいならいくらでもいいぜっ！

だから・・・楽しみにしとけよ」

私にそう言って笑った。

佑樹くんに出会って初めて本当に心から笑っている笑顔を見た気がした・・・。

ねえ、佑樹くん・・・この気持ちがなんなのか分からないけどいつ

かデートしてくれるのかな？

デートしたとしたらその笑顔を見せてくれるのかな？

私の心の中で芽生えた大きな気持ち・・・それがなんなのかは今は分からないけど

今を楽しみたいと思った瞬間だった。

<佑樹視点>

その後俺とこなたは雑談をしつつ朝食の用意をしていた。

その内にかがみ、つかさ、みゆきの3人も降りてきて

こなたが早起き？していることに驚いていた。

朝食も食べ終え、早めに学校へと登校した。

「いよいよだな・・・」

「そうだね」

「できれば来てほしくなかったヨ」

「泉さん、それは・・・」

こなたの言葉にみゆきも呆れ気味だ。

ってかお前は少しはやる気を出せ！

そう言ってる間に担任である黒井先生が入ってきた。

「とりあえずおはようさん。みんな勉強してきたか？」

「全然、勉強なんて集中できませんでしたよ」

先生の問いに白石・・・（また忘れそうになっていた）が答える。
ってかこなたみたいなのやつここにもいたし・・・。

「まあな。高校2年の生活が一番おもしろいからなく。うちも昔は勉強してへんかったわ」

それ先生の言う言葉じゃねえだろっ！

たぶんこのクラスの全員が思ったことであろう・・・。

そんなこんなで朝のHRが終了しテストに入る。

テストは全部で8教科あり3日にわたって行われる。

100点満点で赤点は50点からになっている。

<こなた視点>

むう、今回のテスト難しいんじゃないかな？これじゃ赤点者続出だよっ！

・・・って、これ佑樹くんが言ってた公式だ・・・。

これなら解けるかも。

やっぱ勉強しといてよかった。勉強してなかったら確実に赤点だったよ・・・。

ありがとうね、佑樹くん！

<かがみ視点>

このテスト・・・難しいわね。つかさとこなたにこのテストは無理っぽいかも。

って私もちゃんとやらなきゃばいわ。

ん？あ、これって佑樹くんが言ってた年号のどこだ。

これなら解けるわね。

佑樹くんありがとね。・・・ってテスト中に何考えてんだ私はっ！
集中、集中しなきゃ！

・・・あとでなにかお礼しよう。

<つかさ視点>

はうゝ・・・難しいよゝ。こんな問題解けないよ。赤点になっ
ちゃうよゝ！

あ、でもここ・・・佑くんが教えてくれたとこだ！

この元素式だから・・・こう解くんだ。あ、できたっ！よかったゝ
佑樹くん

勉強教えてもらってよかったよゝ・・・ってあの思い出しちゃ
ったよ！？

恥ずかしいよゝ！！

・・・確かにあの時は恥ずかしかったけど一生懸命勉強教えてく
れたんだから

あとでなんかお礼したいなゝ・・・。

ほんとにありがとね佑くん。

<みゆき視点>

これは・・・いつもより難しい問題が多いようですね・・・。
いつもより点数とれないかもしれません。

あ、でもここ佑樹さんが出やすいって言っていた場所ですね。
教えてもらっておいでよかったです。

佑樹さんに感謝しなくてはいいじゃないね・・・。
なにか後でお礼でもしようかね？

・・・そんな場合じゃなかったです！早く解かなければ・・・。
佑樹さん、ありがとうございます。

<佑樹視点>

む・・・これめっちゃ難しくないか？赤点続出だな・・・。
って俺も真剣にやないとヤバそうだ・・・でも出来るか・・・
？難しいしな。

・・・ってこれみゆきとかがみに教えてもらったとこじゃん。
こっちはこなたとつかさに教えたとこだ。

答案用紙の問題を見ながら俺は2日間の勉強会合宿を振り返っていた。
った。

ほんとに1年前の俺だったらこんなこと考えてなかっただろうな・・・。
・・・

いつも1人、何をやる時も1人、どんな状況になろうとも1人でやってきたしな・・・。

暗闇に迷い込んでいた俺をあいつらは救い出してくれた。感謝しないとな。

そんなことを考えながらテストを順調に消化していった。

こうして無事にテストが終了しその2日後の朝。

俺はいつも通りに学校へ行く準備をして家を出た。

家の前で振り向いて小さく「行ってきます」

と呟いた。そう言って家に背を向けた俺はさっさと学校へ向かう。
その学校へ行く道の途中で

「おっす、佑樹くん」

と挨拶しながら近づいてきたかがみに出くわした。

「おう、おはようかがみ。……そういえばつかさはどうした？」

「ああ、あの子日直だから先行ったわ」

「そうか……じゃあ学校まで一緒に行こうぜ」

俺はかがみにそう言うと、かがみは俺を不思議そうに見てきた。

「どうした？なんか俺の顔についてるか？」

「いや、佑樹くんって笑うこと出来るんだね」

「……あ？どういう意味だそりゃ？」

「いや佑樹くん、人間みたいに笑えることができるんだなあって」

む……なんかものすごく引かかる言い方だな……。

「ほう……それじゃあお前は俺のことを機械だと思っていたんだな？」

「そういうわけじゃ……」

「まあ、そうだな。俺は機械みたいだからな」

俺はかがみから顔を背ける。

もちろんわざとなのだが・・・かがみにはわざとには見えなかったように急に慌てだした。

なんか面白くなってきたな・・・もうちょいからかってみるか。

「ええつとね、別にそう言う意味で言ったんじゃないで！」

「でも、俺は人間じゃねえんだろ？」

「そうじゃなくて・・・！！！」

ダメだ・・・もう笑いこらえられねえ・・・。

「くく・・・」

「・・・？」

かがみは俺がなぜ笑っているのか分からないのか？マークを浮かべている。

俺はそんな姿を見て耐えられなくなり腹を抱えて笑い始めた。その様子を見てかがみがようやく気付いたのか

「あっ・・・まさかアンタ！」

「くく、たぶん冗談だよ！そんなこと思っていないしな」

「やっぱり・・・。焦ったじゃないもう」

かがみがそう言いつつ、頬を膨らませながらこっちを睨んできた。その姿がかわいく見えたのは気のせいじゃないだろう。

「わりいわりい。さ、早く行こうぜ。遅刻するからよ！」

俺はかがみに向かって笑いながらそう言った。

<かがみ視点>

私の方を向いて笑顔で話しかけてくる佑樹くん。

そんな佑樹くんには私は見とれてしまった。

こんなに笑うことなんて出会ってからあったかしら？

心から笑って人に接してることなんてたぶん見たことなかった・・・。

それだけ気を許してくれたということだろう。

「ん？どうした？」

いつの間にか佑樹くんが目の前まで来ていた。
ていうか顔近いんだけど・・・。

「いや、考え事してただけ・・・」

「そうか？」

私がそう言っていると佑樹くんは少し俯いたかと思うと

「でも心配だから手つないでこーぜ」

「えっ!？」

私が佑樹くんの言葉に驚いているうちに佑樹くんは私の手を握って歩き出した。

「ちょ・・・なにやってんのよっ！アンタ！」

「なにつて風邪とかだったら困るから手つないでんだろ」

「いや・・・別に大丈夫だから・・・！？」

っていうか私はこんなに恥ずかしがってるのになんでアンタは恥ずかしがってないのよっ！

「と、とにかく！大丈夫だから放して！」

「・・・わかった」

はあはあ、やっと放してもらえた。

「んじゃ、行こうぜ」

佑樹くんはまた歩いて行く。

まったく・・・人の気も知らないで・・・。

でも・・・なんでこんなに胸がどきどきするんだろう・・・。

この気持ちはなんなんだろう・・・。

今はなにもわからないけど

またその笑顔を私だけに見せてくれる？その優しさを私だけにしてくる？

そんな時が来るかなんて今は分からないけどこれから一緒に笑い合っていたいな・・・。

心からそう思いながら佑樹くんの後について行った。

芽生える気持ち　こなた・かがみ編（後書き）

ちよつとしたアクシデントがありました

8話目投稿しました

評価・感想ぜひ

お願いします！

芽生える気持ち　つかさ編&佑樹の過去のカケラ

今日は中間テストの返却の日。

すべてのテストが返され学年順位が各学年ごとにはりだされる。

もちろん赤点を取ったものは課題と週末にある講習が待っている。

さらに授業は午前中に終了し午後から講習を行うことになっている。

まあ要するに点数を取っていればなんとかなるということである。

<こなた視点>

テストが返ってきた。あまりほしくはないんだけどね……。

佑樹くんは授業が終わるなり黒井先生に呼ばれて職員室へと行ったのでここには居ない。

私たちは自分のテスト結果を見ながら帰る準備をしていると廊下から

「おっす、どうだった？」

かがみがこっちへ歩いてきた。

「あ、かがみさん。私はいつも通りでしたよ」↑平均90点前半、最高100点

「お姉ちゃん……私には聞かないでほしいかな……」↑平均50点後半、最高78点

「その様子じゃあんまり良くなかったみたいね……。ま、頑張らないさ」

かがみがつかさのことを励ましながら私の方を向いて

「さて、アンタは怎なのよ？まさか赤点とか言わないわよね？」

「それはないよ。ま、私もつかさと同じようなもんだけどね」↑
平均60点前半、最高89点

私がテスト結果を見せるとかがみはそれを見ながら

「ま、アンタにしては勉強してたほうじゃない？」

「かがみ？それはひどいんじゃない？」

「仕方ないじゃない。アンタいつもあんなに勉強してないし・・・」
↑平均80後半、最高95

かがみの言う通りだけど・・・点数取れたんだからいいじゃん。
ここぞかがみは何か気づいたのか辺りをキョロキョロしてから

「そういえば、佑樹くんどこにいるの？」

「ああ、佑樹さんなら先ほど黒井先生と一緒に職員室へ行きましたよ」

「そうなんだ・・・。じゃ先に順位表見に行きましょ？」

確かにいつ帰ってくるかわからないから先に行って待ってた方がわかりやすいかもしれない。

「そうですね。結構時間かかりそうでしたし」

「じゃあ、佑くんにメールしとくね」

つかさがそう言ってメールを打ち始める。

ってか佑樹くんって携帯持ってたんだ。初耳……。

このあとつかさがメールを送信してから

玄関前にはりだされている順位表を見に行くため教室を出た。

<佑樹視点>

テストが返却されて帰れるのになんでこんなところにいんだ俺……。

あ？ここはどこかって？

職員室。ついでにもってなぜか知らんが目の前に黒井先生も含めて3人の先生がいる。

なんも悪いことはしてねえはずだが……。

一応昔のこともあって先生から不良扱いされんのがいやだし勉強はちゃんとしてる……

最近はなんも問題は起こしてねえ……。じゃあなんだ？

わかんね……。つか早く帰りたいし。いらいらするな……。

すると俺の目の前に居た先生が

「姫神。お前部活もう一度やってみる気はないか？」

「は？」

ああ……。そういえば目の前の先生はバスケット部の顧問だったな。

今さら部活なんかする気はねえし。つか前も断ったじゃねえかよ・・。

「なんとも言うように俺は部活に入る気はないですよ」

「そうか・・・」

俺が断ると目の前の先生は黙りこんだ。その真横で俺をずっと見ていた黒井先生が

「部活入りたないんか？ 佑樹」

「ええ、入る気ないですよ」

「なしてや？ どうして入る気ないんや？」

「それほどの実力がないからです」

「嘘をつくな。お前の実力は知ってる。お前は中学1年の時に世界大会中学メンバーに選ばれていた。しかも1年なのにエースナンバーだった」

「いつの話してんすか。過去の栄光なんて俺には興味ありませんよ」

むしろその栄光を自分の記憶から消し去りたいと思っているほどだ。

「・・・だが、まだバスケに未練がないわけやないやろ？」

「・・・！！」

俺は黒井先生の言葉に返す言葉も出なかった。

確かにそうだ。心のどこかでまだバスケットをやりたいという思いが渦巻いているのは

自分でもよく分かっている。だがそれ以上にバスケットをもう1度やる権利がないことぐらい

分かっている。俺のしたことがどれほど悪いことかなんて分かっている。

とそこへ俺の携帯の着信が鳴り始めた。

それはつかさからのメールだった。つかさからのメールを読みつつ

「とにかく、俺はバスケットをやる気はないんで。話はこれで終わりますか？」

終わりなら俺友達待たせてるんでそろそろ帰りますね」

俺がそう言って椅子から立ち上がり職員室から出ようとしたとき

「まあな。昔自分が犯した罪を考えれば部活なんて始められないわな」

一番端に座ってたただ傍観してた体育教師が口を開いた。

そいつは佐山と言って俺のことが嫌いな先生だ。

「言っとくが俺はお前が部活に入ることに反対のどころかこの学校にいる資格さえないと思っている。よくもまあお前みたいな生徒を入学させたもんだ」

俺がじつと佐山を睨みつけると佐山もこつちを睨みながら

「友達と言ったな。それっていつも一緒に居るあの4人組の女子のことだろう？」

「てめえには関係ねえだろ」

「ふん、あの4人がお前からいつ離れていくか楽しみだ」

佐山は俺の目の前まで来てそう言った。

「佐山先生！なに言ってるんだ」

「せや、先生として言うてはならないことぐらいわからんのか」

「事実なんだから仕方ないだろう？なんせお前は中学の時の友達を殺してるんだからな！

それを知ったらあの4人もお前から離れて行くんだろうな」

そこまで言われた俺は首根っこをつかんで佐山を持ち上げ壁に叩きつけた。

「……ぐっ」

苦しそうに声をあげる佐山に

「……てめえになにが分かる。その時の俺の感情がてめえにわかるのかっ！！」

そう言いながら反対の手で殴ろうとすると

「やめるんや佑樹！」

黒井先生の声で俺は佐山を下して舌打ちをしながら職員室から出て

行った。

俺は教室にかばんを取りに行って玄関へと向かった。
玄関に着くとつかさ達が居たので

「おう、待たせたな。順位表見れたか？」

「あら、佑樹くん。アンタが来るまで待ってたんだから見てるわけ
ないでしょ？」

「そうなのか？先に見ててもいいのによ

俺を待ってる必要なんてまったないと思うのだが。

「そういえば佑樹さんってテストどうだったんですか？」

「俺か？・・・こんなところ」↑平均90後半、最高100点

「佑くんすごい！」

「みゆきさんよりすごいなんて佑樹くんやるね☆」

「アンタただけすごいだよ・・・。運動もできるのに勉強もでき
るなんて」

「佑樹さんにはかないませんね・・・」

それぞれの感想を聞きながら順位表を見に行く。

「さすがですね佑樹さん」↑学年2位

「みゆきもかわんねえじゃねえか」↑学年1位

「アンタらどんだけ順位いいのよ・・・」↑学年27位

「むう・・・まさか身近に学年1・2位がいたとは・・・」↑学年169位

「私も頭良くなりたいな・・・」↑学年184位

俺たちはそれぞれの順位を見たあと帰りのバスに乗りながらこんな会話をしていた。

その後みゆきと別れ、こなたとかがみはゲマズへ寄って行くということなので俺とつかさだけで帰ることとなった。

しかしその途中でみきさんから電話で買い物を頼まれたつかさの荷物運びの手伝いとして

近くのスーパーへと向かうことになった。まあ俺も買い物しなきゃならなかったし別にいいさ。

「ごめんね。買い物に付き合わせちゃって・・・」

「いいよ、別に。俺も買い物しなきゃ食べる物なかったし」

一通り買い物を終えた俺とつかさは一旦俺の家に寄って買い物の荷物を冷蔵庫にしまってから

つかさの家へと向かった。

つかさの家へ行く途中俺とつかさは沈黙していたが急につかさが

「ねえ、佑くん。どうやったら点数取れるの？」

「あ？どういう意味だ？」

「だって私いくら勉強しても点数取れないんだもん」

そういう事か。てかつかさの順位って点数は取れなかったけど184位だよな？

480人中184ってすごいことじゃねえのか？

「私じゃお姉ちゃんや佑くんに追い付くのは無理なのかな？」

自嘲的な笑みを浮かべて俺から視線を外したつかさの目から涙が溢れているのが見えた。

「そう思ってたのか？」

「え？」

「努力しても追い付けないと思ってんのか？」

「・・・うん。だって私なんかじゃ・・・とても」

「なんかって言うな。この1ヶ月見てきて分かっている。お前が一番強い奴だ。

今を失敗したからなんだ？大事な今は今を見つめ直し未来に繋げることだろ。

未来に繋げる力を一番持つてるのはお前だ！あきらめるなっ！！」

「・・・でも」

「一度の失敗でクヨクヨするなんてお前らしくないぞ？人なんだか

ら失敗なんていくらでもある。

何度でも立ち直れ。絶対光が差してくれるときが来るから」

そうだつかさ・・・お前には俺の同じ道は歩んでほしくないんだ。
光が差してくれたのに立ち直れなかった過去の俺のように・・・

「そうだね・・・！」

つかさの顔に笑顔が戻った。俺はほっとしつつもスキップをしながら前を歩くつかさを見つめていた。

これがきっかけは分からないが先のテストでつかさが俺はおろかクラス全員が驚く

点数を取るなど誰も知る由なかった。

「転ぶなよ」

「大丈夫だよ。佑くん・・・」

「危ねっ！」

つかさが前に倒れそうになったので買い物袋を置いて咄嗟に支える。

「まったく気をつけろって言っただろ」

「・・・う、うん」

あ？なんでこいつ顔赤くしてんだ？

俺は最初きょとんしといていたが今の状況を見てようやく気付いた。後ろから支えたため端から見ると後ろから抱きついている様にも見

えなくはない。

しかも俺の手がつかさのむ・・・胸に触れてるし！どうしよう・・・ものすごくドキドキする・・・。

それにしてもつかさって結構かわいいよな・・・。彼氏とか居ないのかな？

ってやべ・・・なに考えてんだ俺！早く離れなきゃ俺の理性が吹っ飛ぶ・・・。

「わ・・・わりい！」

そう言って離れようとした俺の手をつかさが握ってきた。

「っ、つかさ？」

<つかさ視点>

なんだろう・・・佑くんの言葉の1つ1つがあったかい。

なんでかはわからないけど心が温まる。

そう言葉を発する佑くんもそういうような失敗とかの経験があるのかな？

でも・・・なんでだろ？私の心は温まるのに佑くんの心は逆に冷えていっている気がする。

まるで自分の過去をことを責めるかのように・・・。心は冷えていく・・・気がする。

そんな感じがする。漠然としたことだけ・・・。

それでもこれだけはわかる。私は佑くんに大事にされているってことはわかる。

それがとても嬉しくて、恥ずかしくて赤い顔を見られないためにス

キップしながら前を歩いた。

「転ぶなよ〜！」

佑くんの言うことも聞かずスキップしていた私は何かに躓いて転びそうになった。

それを見た佑くんは私を助けてくれたけどどうしよう・・・私佑くんに抱き締められてるよ・・・。

しかも佑くんの手が私のむ・・・胸に！恥ずかしいよお・・・。

でもすごく暖かいな佑くんの温もり・・・。

佑くんもそれに気づいて顔を赤くして俯いていたけど私に謝って離れようとした。

しかし、私はそれを防ぐために佑くんの手を掴んだ。

あれ？なんで私佑くんの手掴んでるの？佑くんも困ってるし離さなきゃ。

でも自分の考えとは逆の行動を私の体はしている。口が勝手に動く。どうして？なんでこんな時に言う事聞いてくれないの？

「お願い。離れないで・・・佑くん」

佑くんは私の言葉を聞いて離そうとするのをやめて逆に抱き締め始めた。

どうしようドキドキが止まらない・・・。

佑くんに聞こえてるんじゃないかってぐらйдキドキしてる。

あ・・・今分かった。考えとは勝手に動いていた私の体のこと。

これが本当の私の気持ち。私の体はその気持ちの通りに動いていただけなんだ。

佑くんが離れるって思ったときなぜだか寂しくなった。心が1人になった気がした。

もう2度と佑くんの暖かい温もりを感じられなくなるかもって思っ

た。

理由は分からない。ただなんとなく感じた。

「つ、つかさ？」

私はすぐ後ろに居る佑くんを見つめながらこう思った。

なぜだか分からない。この気持ちもこの感じた思いも、佑くんの抱えてる思いも……。

だけど今だけはこの温もりを感じていたい。佑この人くんと一緒に笑っていたい。

ねえ……あなたはいつまでも一緒に居てくれますか？私にその優しい笑顔を見せてくれますか？

……この温もりを感じさせてくれますか……？

<佑樹視点>

つかさはしばらく俺の手を握っていたので俺もそれに応えるように抱きしめていた。

幸い誰も通らなかつたので騒ぎはなかつたが今思うととても恥ずかしい事をしていた気がする……。

そのあと急いでつかさの家に荷物を届けたが時間も時間だったので夕食を食べていけと言われてそこでまた俺に災難が降りかかるのは今度話すでしょう。

芽生える気持ち　つかさ編&佑樹の過去のカケラ（後書き）

まずすみません！

今回の話にみゆきの芽生える気持ち編を入れる予定でしたが・・・

佑樹の過去の一部を入れているうちに話が長くなったので
今回は断念しました。

次話には必ず入れます

それと芽生える気持ちつかさ編もそうですが
佑樹の過去のカケラの感想もほしいです。

あまり出来てるかはわからないので
ぜひアドバイスお願いします！

芽生える気持ち　みゆき編

「…………どこだここ。なんで俺はこんなところに居る？」

周りは真っ赤に染まっている。そう……血の海のような深い赤が広がっている。

息苦しい……なんでかはしんねえけど息がしづれえ。

昨日佐山に言われたことが影響してんのか？……わかんねえ。なにもかもわかんねえ。

いや……1つだけは分かる。もし神様ってのがこの世に存在してんだったら

今のこの状況は友達を殺した俺への罰だ。

1度は助けてもらった……地獄の底から掴んで引っ張り上げてくれたのに

逆に掴むことを、引っ張り上げることを拒んだ最悪な罪への罰だ。

誰だって分かる……。

誰が悪いのかなんてことは……俺だ。俺しかいねえ……。バカみたいに自分のプライドだけを守ろうとして仲間を見捨てた俺だ。

それなのに自分1人だけ幸せに生きてた、生きようとしてた俺に対する罰だ。

しばらくすると周りから血まみれの手のようなものが出てきて手招きしながら俺を呼ぶ声がする。

『こっちに来て……』

声も出せずにただ首を横に振ると

『裏、切り者……』

と呟きながらこっちへ歩いてくる。

俺は叫びかどうかも分からない声を出す。

そこで俺の記憶が途絶えた。

次に俺の目に移ってきたのは白い天井だった。少なくとも俺の部屋ではないことは分かった。

ツンとするにおい。整頓された白いベッド。ここはたぶん保健室だ。ちらっと辺りを見回したが先生の姿は見えない。どこへ行ったかは知らないが

窓の方がオレンジ色に輝いていて外から声が聞こえたので今は放課後ってことは分かった。

頭が痛い。カチ割れそうになるくらい。痛すぎて目を開けてもらえない。

最近は見えてなかったあの光景。夢かどうかは分からない。たぶん夢なんだろうが夢とは思えないほどリアルで毎回見るたびに実際のことのように感じる。

とそこで扉が開きこちらへ歩いてくる足跡が聞こえた。音からいってたぶん1人。

ベッドのすぐ隣で止まった音。目を瞑っていてもなんとなくは分かった。

「・・・・・・・・・・みゆきか」

「あら、起きていたんですか佑樹さん」

少し薄眼でみゆきを見上げる。

落ち着いた足跡、一応気遣ったのかベッドに来るまでのゆっくりとした歩き方。ついた後の静かな態度。どれをとってもみゆき以外にはあり得ねえ。

いやまあかがみならあり得るかもしれないねえがあいつなら全員で来る。1人で来ることはねえ。

最低でもつかさは一緒に居る。そういう奴だって分かってる。それはつかさでも同じだ。

逆にこなたの場合は1人で来る可能性もあるが絶対静かなわけねえ。どんな理由だろうと元気づけようとして自分のテンションが高いように装う。

自分がどんなに低くてもだ・・・。

そんなことを考えながらフツと笑って

「嘔吐け。起きてたの気づいてたくせに」

「さすが佑樹さんですね。私の考えはお見通しですか・・・」

「あいつらは？」

「先に帰りましたよ。私は委員会があったので・・・。今終わったので寄ってみました」

「そうか・・・。なんで俺はここに居るんだ？」

「えっ？」

だいたい俺はここに来た記憶はねえ。ってことは誰かが教室かどこから運んできたってことだ。

その理由を知りたい。みゆき1人ならなんとか聞けるかもしれないねえ。そう思った。

それにみゆきの反応は予想通りだった。なにかあったのかは一目瞭然だ。んでもその記憶がねえ。それでもみゆきの反応とあれだけのことをしたのになにも覚えてないんですかつー目してるから

俺がなんかしたことは分かった。

「お・・・覚えてないのですか？」

みゆきの問いに俺はただ頷く。

「そうですか・・・でも覚えていないのなら教えることはできません」

俺はみゆきがそう言った言葉に驚いて上体を起こしみゆきを見る。
俺はしばらく目を見開いていたが肩を掴んで

「頼む。なにあったか教えてくれ」

この夢を見るとときはいつも1人だった。だから俺にしかわからねえ。
だが今回はここにこうしていたんだから記憶ないままなにかしてたのは明らかだ。

「・・・・・佑樹さんっ・・・・」

俺はみゆきの苦しそうな声でハッとした。目の前には苦しそうなみゆきの顔。

どうやら俺は思ったよりみゆきの肩を強く掴んでいたようだ。

「わりい」

そう言って手を離しみゆきから視線を外して前を向いた。

「わかりました。なにがあったかお話します」

俺が再びみゆきを見るとみゆきもこっちを見ながら

「午前中・・・3時間目ぐらいに急に佑樹さんが机に倒れ込んだと思ったら今度は立ち上がって暴れ始めたんです」

そんな記憶はないが・・・みゆきが嘘を吐いているとは思えないし

「やはり覚えていませんか・・・」

「ああ。それでどうなったんだ？」

「その後は先生が4人がかりで押さえ込もうとしたら急に佑樹さんが倒れて気を失ったんです」

「そうか・・・」

「・・・ほんとに覚えていないのですか？」

俺の反応を見てみゆきが恐る恐る聞いてくる。

俺はみゆきを一瞬見て

また前を向いた。

そしてそのまま俯きつつ

「いや、思い出した。心配させて悪かったな」

俺はこのままでは心配をかけると思い咄嗟に嘘をついた。

「・・・・・・・・・・」

みゆきは俺をじつと見ていた。
嘔吐してるのバレたか？

「・・・そうですか、分かりました」

みゆきがそう言ったのを聞いて俺は心の中でふうと息を吐いた。

「さて・・・帰るか」

「もう大丈夫なんですか？」

「ああ大丈夫だ。それに保健室とか病院って息苦しいからダメなんだよ」

俺はそう呟きながら頭に手をあてた。

みゆきはそんな俺を黙って見ていた。

その後俺は保健室の先生に礼を言ってからみゆきと共に帰りのバスに乗った。

バスを降りて駅まで歩いている途中みゆきが、

「佑樹さんは頭良いんですね」

「みゆきも頭良いじゃねえか」

「私なんて全然ですよ。私が泉さん達や佑樹さんと一緒に居ていいのかいつも思っています」

「・・・」

「勉強も泉さん達のそばに居たいがために必死にただけですから

佑樹さんみたいな天才には敵わないんです」

「・・・」 「私に出来ることと言えば一歩ずつ努力するだけ・・・。でも不安なんです。私が佑樹さん達と一緒に居ていいのかと思ってしまっんです」

「・・・」

「所詮私なんて勉強しか取り柄がないんですよ」

「・・・本当に」

「え？」

「本当にそう思ってるのか？」

「はい・・・」

「そいつは違うな。勉強するってのはそいつ自身の個性だろ」

「私のは対したことないですよ。佑樹さんは天才ですけど。私は皆さんのそばに居たいがために努力したことですよ」

「そうだな。確かに始めたきっかけはそうかもしれないねえ。だが今はどうだ？ 今のみゆきにとって勉強ってのはただそれだけのものじゃねえだろ？」

「・・・っ」

「今は勉強することが楽しいだろ？」

「・・・はい」

「俺はそういうのを自分の個性だと思うし、そういうことが出来る奴、楽しんでやれる奴のことを天才って言うんだと思ってる」

「でも・・・私は」

「でももなにもねえよ。自分が楽しいと思えることは自分の意思でやってることだ。そのほかに他意はねえだろ？」

「・・・はい、そうですね」

「あと俺はみゆきと居たいから一緒に居るだけでその他に意味はねえし、当然あいつらも一緒に居たいから居るだけだ。そこは間違えるなよ」

一瞬目を開いて驚いた後、その目から涙がこぼれ落ちた。

<みゆき視点>

佑樹さんの言葉・・・暖かい。不思議・・・こんなに悩んでいたことなのに佑樹さんの言葉はそんな私の気持ちを暖かく包みこんで溶かしてくれる・・・でもなぜだろう。佑樹さんの言葉には説得力がある。まるで自分がそれを体験したことがあるかのような言い方だった。

昔なにかあったのでしょうか。もしかして今日倒れた事と関係があるのでしょうか。私には分からない。そこで佑樹さんが小さな声で

話しかけてきた。

「それとみゆき。俺は天才じゃねえよ」

「なんでですか？ 佑樹さんも努力したんですよ？」

「俺のはそんなじゃねえんだよ。確かに努力はした。だけど俺のはみゆきみてえに楽しんでやってるわけじゃない。ただの罪滅ぼしだ。それにいくら勉強出来たって、スポーツ出来たって――――・・・・」

佑樹さんは顔を背けながらそう答えた。最後の言葉は小さすぎて聞こえなくて、何を言ったのか聞きたかったがその時に一瞬見えた佑樹さんの顔が悲しそうな目をしていて

苦しそうな表情をしていたのがとても印象的で聞けなかった。でも佑樹さんには救われた。こんなにも暖かい気持ちにしてくれた。この気持ちはまだ分からないけどこれだけは言える。私はこれからも佑樹さん達と一緒に居たい。

ねえ佑樹さん？

もし私がまた悩んでいたら助けてくれますか。

私を励ました暖かい気持ちにしてくれますか？

これからも一緒に居てくれますか？

<佑樹視点>

「俺のはそんなじゃねえんだよ。確かに努力はした。だけど俺のはみゆきみてえに楽しんでやってるわけじゃない。ただの罪滅ぼし

だ。それにいくら勉強出来たって、スポーツ出来たって――――
・・・」

そう俺は天才じゃないし、普通の人間でもない。

ただの最低な人間だ。勉強が出来たって、スポーツが出来たってダメだ。みゆきみてえに勉強を楽しんでやれる奴とは俺は違うし、ましてや比べることなんて出来などしない。だからこそみゆきにはずっとそのままで居てほしいと思った・・・ずっとそのままが変わらないでほしいと思った。そして決して俺の様にはなってほしくない。人を疑って、なにも信じられなくなっていたあの頃の俺の様にはなあってほしくない・・・。

その後俺達は駅で別れて家路についた。

余談だが次の日こなたとかがみ、つかさに体調について心配され続け精神的に疲労困憊になったのは言うまでもない。

芽生える気持ち みゆき編（後書き）

どーもお久しぶりです悪霊です！

えーとまず4ヶ月ぶりでしょうか？

ご迷惑おかけしました。

しかしまだ完全に復活したわけではないので更新スピードは一週間に1回のペースで考えております。またこれからよろしく願います。

また今回は見直す余裕がなかったので不明な点もしくは誤字脱字、キャラの口調がおかしければ感想欄にどんどん送ってください

誕生日の思いと運命の歯車（前書き）

だいぶ遅れましたが完成したのでどうぞ

誕生日の思いと運命の歯車

テストで赤点を取った残念な人達が週末に学校で頭を抱えながら勉強していた頃、俺も俺で頭を抱えていた。

その理由はあと1週間後に迫ったこなたの誕生日だ。

前に俺がかがみとつかさと話していたとき、こなたがみゆきに自分の誕生日について

言っていたのを聞いてたのでかがみ達と誕生日会の相談をしていた。

まあ確かにこなたには恩があると思う。

こなたがぶつかって来なければ・・・、それをきっかけに話しかけて来なければ、

今こうして相談することも出来ていないだろうし

そのままにも交流がなかったら俺は残りの高校生活をただ茫然と過ごしてただつまらなく記憶にも残らない程度の思い出となっていただろう。

だからこそ多少なりとも恩返しになると思ってプレゼントは自分で決めたものを渡しかった。

そう、誰にも相談することなく自分だけで決めたものを渡したかった。

確かに皆で相談しあって決めたものを渡すのもよかったのだが、それではなんとなく出会えたことへの感謝が上手く伝わらない気がした。

なので俺は1人で送ることにしたのだが・・・。。。

「まいったな・・・」

正直今とても後悔している。

俺は頭を掻きながら街をさまよっている状態であり、何を買うかなどはまったく決まっていけない。

こうなるんだったらなにあげるかぐらいはかがみたちに聞いておくんだったな……。

だが今更1人で決めると言った手前聞くことなど出来ないし、他の知り合いにも聞けない。

そもそもこなたたち以外に高校で親しい奴らなどほとんど居ないし、中学校の奴らはあの事件のせいで俺には近寄らなくなった。

まあ、こんな話しはどうでもいい。

「さて、どうすっかな……」

ここは服でも買った方がいいのか？

と思いつつそれらしい店の中に入ってみたが……。

なんか周りの客（ほぼ女性）からの視線が痛い（汗）
というか、女性ばかりが居て、堪えられないぞ。

服買うのがこんなに大変だとは……女子ってすげえな。

こんなところで買い物とかしてんのかよ……。

と思いつつも周りの視線を無視してとりあえずすぐ近くにあった服
を見てみるが

「どれがいいんだ・・・？」

まったく分からねえ・・・。

そういやこなたの好みの服とか知らねえんだよな。

どんな服が良いんだ？これで好みじゃない服買っていったらダメだしな・・・。

ゆっくりとこなたに似合いそうな服を吟味しながら探していく俺。

女物の服を見ている男に最初は軽蔑の視線を向けていた他の客達は、真剣に探しているのに気付いたのか、ただ単に興味を失っただけなのかは分からないが

自分の買い物に戻り、なんの視線も感じなくなった。

「・・・・・・・・ん？」

服を選び始めて30分はただただろうか、ようやく俺は1つの服に目がとまった。

それは水色をベースにしたシンプルなワンピース。

適度に飾り付けられたフリルがかわいさを際立させている。

俺はこの服に決めレジへと持って行く。

「すみません、これ欲しいんですけど・・・」

レジの所にいた店員に服を出す。

店員は一度俺の顔をじっと覗くように見る。

しかしすぐさま切り替え、営業スマイルを浮かべると

「了解しました。このままでいいでしょうか？」

と言って服を持ち上げる。

俺はその姿を一瞥しながら、頭を掻いて

「・・・いや、一応プレゼントなんでラッピングしてもらっていい
すか？」

少し間をおいて、一応を強調した言い方をする。

「了解しました。・・・彼女用ですか？」

店員はラッピングをしながら、俺の一応の言い方と間をおいて言ったことを気付いているらしく
ニヤニヤして俺に聞いてくる。
ちっ、余計なことを聞いてくるやつだな。

「ただの友達っす。別にそんな彼女とかじゃないっすよ」

「へえゝそんなに大事な関係何ですね」

おい、今の俺の言葉をどう曲解したらそんな答えになるんだ。
俺は心の中で突っ込むものの口では勝てないと感じ、諦めの溜息を吐く。

この店員といいこなた達といい俺女に弱えな・・・。
しかもこの店員かなり大きな声で話すから店の中に会話が筒抜けなのだ。

おかげでこの店の中にいる客たちは俺を興味深い様子で見ている。

「・・・とりあえず、早くラッピングしてくれませんか？」

その異様な空気に耐えられない俺は小さい声ながらも店員を威嚇して先を急がせる。

そんな俺を見て、店員はくすくす笑いながら、

「はい、わかりました！すぐラッピングしますね！」

と明るい声で言ってラッピングしていく。

最後に青のリボンを付けてもらい、受けとって店を出た。

さて、プレゼントがこれだけじゃ寂しいよなあ・・・。

なんか他にいいのねえかな？

アニメ関係のでも買ったらいいか？

「こなたの好みのアニメってなんだよ・・・」

そんなにアニメを知っている訳ではない俺にとってこなたの好みなどまったく知らない。

アニメ関係は却下して別のを考えることにした。

そうして悩んだ末に無難なネックレスに決めた俺はそれらしい店に入った。

「どれがいいのか分かんねえな・・・」

いろいろありすぎて分からないがこなたが身につけてる姿を想像して比べながら選んでいった。

「・・・・・・・・これが1番いいかな？」

15分後、青の羽が星につけられたペンダントを手にとり、つぶやいた。

「すみません、これください」

店員にペンダントを出し、プレゼント用に包んでもらう。

「これ誰にプレゼントするんですか？」

店員がペンダントを包みながら尋ねてきた。

「まあ、恩人みたいな人っすかね？」

「大切な人なんですネ」

「ええ、いつも世話になったり、助けてもらったりしてもらってますから今回恩返ししたいなと思ったんですよ」

「そうなんですか。・・・優しいですね♪」

「・・・・・・は？」

ドクンッ

優しいですね――・・・。

「だってそうでしょう？大切な人なんでしょう？」

「・・・恩人って言っても、ただの、友達ですよ？」

俺らしくもない慌てた声でなんとか返したが、心の中では動揺でなにを言っていて、なにを言ったのか分からない。

「でも大切な人なんですよね。とても真剣にプレゼントを選んでいたので」

「・・・・・・・・っ」

「人のプレゼントを選ぶのが真剣な人に悪い人はいないですよ。だからあなたはとても優しい人なんですよ」

そう言って店員は優しく微笑んだ

ドクンッ

「・・・・・・・・」

その笑顔が昔のあいつの顔に似ていて、俺はなにも言えないままペ
ンダントを持って店を出た。

「俺が優しいか・・・・・・・・・・ははっ」

店を出てしばらく歩いてから自嘲的な声と笑いが出る。

あんなことをして許されていいわけがない。

あんなことをして優しいと言ってもらえていいわけがない。

全ては自分のせいだ。

故に俺は幸せを望んじやいけない。

だが、今の俺の状況は幸せなんじゃないだろうか？

幸せを望んじやいけないのならば今のこなた達と関係を終わらせなければいけないんじゃないだろうか。

「ははっ、最低だな・・・俺」
こなた達と離れたくない。

幸せになったらダメなのに今の状況が続けたいと思ってる自分がいる。

「このままじゃ、ダメなのかもな」

俺はそう呟いてからある場所へと歩き始めた。
しばらく裏道を歩いてある店の前で足をとめた。

「ここも久しぶりだな・・・」

そう言いつつ店の中へ入っていく。

「いらっしゃ・・・って佑坊じゃねえか。ずいぶん久しぶりだな」

「お久しぶりです。あと佑坊って呼ぶのいいかげんやめてください」

「がっはっはっは！呼び方なんか気にするな！！佑坊はいつまでも佑坊だぜ」

「はぁ、そうですか？」

相変わらずテンションの高い人だな・・・。

「んで？今日はなんの用事だ？ただ顔見せにきたわけじゃないんだろ？」

「ええ、例のアレ5つ欲しいんですけど」

「・・・！また出来たのか、どんな奴らだ？」

「まあいい奴らですよ」

「そうか・・・そりゃ良かったな」

「はい」

「とりあえず奥から取って来るからそこで待っていてくれ」

と言ってオヤジさんは奥へと入っていった。

俺はそれを見送ってから辺りの商品を見渡す。

相変わらずいろんなもん仕入れてんな～・・・。
誰が買ってくんだ？こんなもん。

数分後、オヤジさんが例のアレを持って戻ってきた。

「ほら、5つ持って来たぞ」

「毎度毎度ありがとうございます」

「佑坊の頼みだ。これぐらい訳ねえさ！」

「そうですか。ところであの人どうしてますか？」

「・・・ずっと病院で寝たきりだよ」

あの人の話題を出すとオヤジさんの表情が渋る。

「わかりました。じゃあ俺帰りますね」

「佑樹」

帰ろうとした俺をオヤジさんがとめる。
いつもの佑坊じゃなく佑樹と呼び、何となく表情も真剣な顔をしている。

「お前、まだあの事気にしてんのか？」

「そりゃ、そうでしょう？」

「あの事ならお前の責任じゃない！」

「結果はどうであれ、あれは俺が起こした事です。ならば罪を償うのは当然でしょう？」

「だがs「話しがそれだけなら、これで失礼しますよ」・・・おい！」

俺はオヤジさんの話しを聞かず外に出た。

なにが責任はないだ！

あの事件は完全に俺のせいじゃないか！？

俺があんなことをしなければ――・・・。

俺は歩きながら空を見た。

空はどんよりとした雲で覆われていた。

今この瞬間運命の歯車は回りはじめたのである――。

誕生日の思いと運命の歯車（後書き）

こなた（以下こ） 「どうも、お久しぶりなのだよ！」

みゆき（以下み） 「泉さん、暢気に挨拶してる場合では」

こ「む、だって久しぶりなんだよみゆきさん！こんな小説誰も覚えてないかもだけどしっかり挨拶しなきゃ！」

み「まあそれはそうですね・・・」

こ「そうでしょ！だからみゆきさんも挨拶して！」

み「はあ、そうですね？じゃあお久しぶりです。高良みゆきです」

つかさ（以下つ） 「にやははなんかゆきちゃんがこなちゃんに押されてるよ。こなちゃんもさりげなくひどいこと言ってるし。でもなぜこんなに投稿が遅れたのかな？」

こ「よくぞ聞いてくれた、つかさ！その説明が作者から紙に書いて渡されているから読んでくれたまえ！」

つ「なんかこなちゃんのテンションが高すぎるよ・・・。まあ、まあ気を取り直して。えとなになに『リアルの世界でいろいろなハプニングが起こり、投稿が出来なくなっていました。これから計画的に頑張って行くのでこれからもよろしくお願いします。すみませんでした』だって」

み「作者さんもいろいろ大変なんですわ」

こ「甘いよ、みゆきさん！作者は私達よりなにか大事なもの（主にゲーム）にハマっただけだよ！」

み「それは泉さんのことなのでは？」

こ「・・・違うよ」

つ「今ちょっと間があったよこなちゃん？というかさっきからお姉ちゃんと佑くん一言も喋ってないよ？」

かがみ（以下か） 「私は別に作者にどんなことがあろうときちんと投稿してくれればいいわ。でもなんで久しぶりの投稿なのに私達出てないのよ!!」

み「その理由も作者さんが説明を書いていますよ。『本当はこなたの誕生日の話しもまとめて入れる予定だったんだけど佑樹の過去をどんどんいれてたら明らかに理想の文字数を越えてしまったので諦めた。次回は必ず出す』と書いてありますね」

佑樹（以下佑）「・・・それは俺のせいなのか？それとも作者のせいなのか？」

か「作者のせいよ！だいたいさっきのにしろ言い訳じゃない！！」

つ「まあお姉ちゃん落ち着いて」こ「出番がなかったことに腹を立てるかがみ萌え♪」

か「うっさい！次言ったら殴るわよ！？」

こ「殴ってから言わないでよ！？」み「なにやらコントが始まってしまいましたね（汗）」

佑「やれやれ。おっそうだ。読者の皆さん、こんな隅まで読んでないだらうけどすみません。この作品はまだ続くのでまた今回みたいに遅れることもあるけどこれからよろしくお願いします」

こなたの誕生日会（前編）（前書き）

か「・・・全然進まなかったわね」

佑「それを言ってやるな。作者が泣く」

み「あはは・・・。作者さんも『今回』」

こなたの誕生日会（前編）

運命の齒車はとまっていた。

過去にも何回かとまったことがある。

しかしいずれの時もかろうじて仲間の手によって動き出した。そして今回も例外なく再び動き出した。

それは奇しくも前回齒車が動き出した時と同じ日時……。

これをとめないようにする方法は分らない。

つまり再びとまることのないように祈るしかないのである――。

「ん、・・・・・・・・朝か」

今日はこなたの誕生日。

10時頃からバースデーパーティーをして、その後は土曜日ということでこなたの家にお泊りとなっている。

しかし親父さんは初対面の男がいきなり来て泊まるなんて娘に話をされてどう考えているんだろうか？

つかよく許可したな……。

そんなことを考えつつ朝の日課を終えて、行く準備を始める。行く準備も済み、やや余裕を持って家をでた俺は電車に乗って先に乗っていたみゆきと共にこなたの家の最寄り駅まで向かった。

途中で柊姉妹と合流する。

「ところでこなたの家ってどんな感じなんだ？」

俺はふと疑問に思っていたことを口にした。

「私も泉さんの家に行くのは初めてなのでわかりませんね」

みゆきも俺の疑問に合わせてくる。

みゆきも行ったことないのか・・・。

必然的に残るのはかがみとつかさだけなので俺とみゆきは2人の方に顔を向けた。

「そっかぁ、佑くんもゆきちゃんも、こなちゃんの家に行ったことないもんね。結構面白いとこだよ♪」

「どんな感じって言われてもマンガとかアニメ関係のばっかよ。それしか言いようがないしね」

つかさはニコニコ笑ってそう言ったが、かがみは呆れた様にため息までついている。

そんなにひどいのか・・・。

俺がそう思っていると駅に着き、待ち合わせ場所まで歩いて行く。そこにはいつもなら遅刻してくるはずのこなたがすでに待っていた。

「アンタにしちゃ珍しく早く来てるじゃない」

「かがみく？その言い方だといっつも遅刻してるみたいだよ？」

「事実でしょ？」

「つかさぁ、かがみがいじめてくるよぉ・・・」

と嘘泣きしながらつかさに抱き着いている。

つかさはつかさでそんなこなたの頭をよしよしと撫でている。

「なっ！？　べ、別にいじめてないわよ！　つかさも甘やかさない！」

「あはは、ごめんねお姉ちゃん」

つかさもこなたの頭から手を離す。

こいつら、いつまで漫才やってるつもりだよ……。

「どうでもいいから、なんで早く来てるか教えろ」

俺の言葉にかがみをからかって遊んでいたこなたはこっちを向いて

「いやゝ、あまりにもおとーさんがうるさいから先に出てきたんだ
☆」

「アンタのお父さんも相変わらずね」

とりあえずこなたの家に向かいながら事情を聞いているとかがみが
深いため息をつきながらそう言った。

こなたの証言によると……

「こなた」

「なあに？　おとーさん」

「今日は誕生日だろ？　お父さんの仕事も一段落ついてるしどこかに
あs「ああ、それだったら友達来て誕生日会してくれるからいいや」
……そんな話しは聞いてないぞ！？」

「だってそんな話したらおとーさんうるさいじゃん。うざいんだもん」

「そこは面倒なんでもんっていわんか!!」

「とりあえず私迎えに行ってくるからおとなしくしててね」

「こなたあ!?! お父さんを見視しないでくれえー!!」

・・・らしい。

なんか聞く限り相当バカみたいだ。

「で? 友達の中に男子の俺がいるのは言っただろうな?」

「んー言っただいよ? てゆーか泊まることも言っただいし」

手をひらひらさせながらとんでもない爆弾発言を投下した。

「まあ、佑樹くん達来てから言っただ大丈夫だよ」

呆然としている俺達にこなたはさらに続けた。

「いや、ダメだろ……。泊まることぐらい言っただ方がいいんじゃないのかよ」

「大丈夫大丈夫! おとーさんには『お願いしますお父様』ぐらい言っただバカだから許可してくれるよ」

「・・・・・・・・・・」

前から思っていたんだが娘にこんなに言われる父親ってどうなんだ・
・・？

つかその発言もダメだろうが。それに騙される父親もアホだな・
・。

そんなこんなで泉家の前。

「さあさあ、どうぞ入って」

こなたがドアを開けて手招きする。

「おゝこなた。お帰り」

玄関の中まで入ってくると男の人が出てくる。

この人がこなたの父親か？

「いやゝよく考えたんだけど、こなたが友達を連れてくることなんてあんまりないからお父さんも歓迎しなきゃと思ってな。だから待っていたんだが・・・」

そう言って俺達に視線を向けると俺のところでもった。

「あの・・・どうかs「君はこなたの彼女なのかい？」・・・はあ
？」

「私はこなたのことを大事にしているね。誰とも分らない男にこ
なたを渡すわけn「おとーさん、ほんとにうざいよ」・・・なにを

言うんだこなた！せめてお父さんなんて大嫌い！と言わんか！！」

「・・・・・・・・・・」

「こら、その男！さっさと答えんか！！」

「・・・・・・・・・・とりあえず、殴っていいか？」

俺は泉父の話しを無視してこなた達に目を向けながらそう言った。

<かがみ視点>

こなたの家に着くと、そうじろうさんがいた。

まではいいんだけどそうじろうさんは佑樹くんを見るなりいきなりからみはじめた。

佑樹くんはこなたとそうじろうさんのやりとりに着いて行けず困惑したようなそぶりでごつちを向いた。

「まったく、相変わらずね。あの親にして子ありって感じかしら・・」

「あはは・・・・・元気な方ですね」

「・・・・・・・・・・とりあえず、殴っていいか？」

「佑くん・・・・それはちよつと」

私はため息をついて頭を抱える。

その横でみゆきも苦笑いを浮かべているし、佑樹くんにいたっては

イライラし始めており、つかさがそれをなんとか落ち着かせようとしている。

「あくもう鬱陶しいなあ。これ以上しつこくしたら一緒にゲームしてあげないからね」

「・・・そんなあ」

「分かった!？」

「は、はい・・・」

・・・あんな脅しするこなたもこなただけどそれに騙される方もバカね。

私はもう1度深いため息をついた。

<佑樹視点>

玄関での親子喧嘩(?)も終わり、部屋へとたどり着くが・・・。
正直、脅しと一緒にゲームしてあげないからでいいのか!?とかそれを本気に思ってるのか!?とかなぜ俺は絡まれたんだ!?とか俺的には納得できないことだらけだがここは華麗にスルーしておこう。

「・・・・・・・・・・」

これはなんというか・・・すごいな。

フィギュアにゲーム、本が所々に入りきらないものが積み重なれており、ポスターがはられている。

勉強机には雑誌とパソコンが置かれているが比較的整理整頓されて

いることからやっぱり女の子なのは分かるところだろう。

「どーよ、私の部屋は？」

こなたが部屋を見回している俺に聞いてくる。
ふとこなたの後ろを見ると

「相変わらずな部屋ね〜」

「でもこの本、面白いですね」

「この人形もかわいいな〜♪」

すっかり寛いでいた。

さすが女の子・・・適応能力高いな。

特に来たことのあるつかさとかがみに混ざって会話に参加している
当たりみゆきはすごいよなあ・・・。

俺はこなたの方に視線を向ける。

「どうって予想通りだろうな。環境がいいんだか悪いんだかわかん
ねえ部屋だよなあ。ま、いい部屋じゃねえの？」

俺の言葉を聞いて、こなたは胸を張ってやがる。

それを見つつ、視線を机の方に向けた。

「勉強はしてねえみてえだけどな・・・」

「うっ・・・」

胸を張っていたこなたがいい気分に水を差されて嫌だったのかこっ

ちをジトツとした目で睨んでくる。

「ま、それは置いといて・・・」

こなたのジト目を無視してかがみ達のところへ行く。
かがみ達も立ってこなたの方を向いて

「」「お誕生日、おめでとう（♪、ございます）」「」「」

「おお、みんなありがとう☆」

「つまらないんですけど、どうぞ」

そう言ってみゆきが渡したのはきれいな模様の入った櫛だった。

「泉さんは髪が長いので梳くのも大変だと思ひまして」

「いやゝありがとう。助かるよみゆきさん！」

続いてかがみとつかさが前に出る。

「私達のはこれだよ」

「ま、まあ私達のはみゆきのより劣るけど」

そう言っつかさとかがみが渡したのは手作りのクッキーだ。まあ
へタな物買って渡すよりは嬉しい代物なのかもしれない。

「へえ、かがみが私にねえ」

「ふん！どうせ私のはつかさに比べればダメでしょーね」

「でもお姉ちゃん、真剣に作ってたよね？」

「かがみが私のためにねえ」

つかさの言葉に顔を赤く染めたかがみにこなたがニヤニヤしながら
見ている。

「あー！！もう、それ以上言うんだったらあげないわよ！？」

「冗談だよ。ありがとね！つかさ、かがみ」

「えへへ〜どういたしまして♪」

「べ、別にあんたの為じゃないんだからね！？」

「かがみんのツンデレ、萌え☆」

「うっさい！次言ったら殴るわよ！？」

「もう殴ってるじゃん！？」

・・・ああ、やっぱ展開的にこうなる運命なのな。

俺は深いため息をついてこなたに近寄っていく。
ってか2つぐらい用意した方がいいんじゃないか？とは思ってたけど
ど1つで良かったみたいだな・・・。

「俺からもプレゼントだ」

俺はラッピングされた服とネックレスを渡した。

こなたは何も言わず服とネックレスのラッピングを剥がしていく。

「わゝそれかわいい♪」

「このネックレスもすごくかわいいですね」

こなたが2つを手にとるとつかさとみゆきが近くで眺めている。
かがみも後ろから興味深そうに見ている。

そんな中こなたは俺のプレゼントを凝視していた。
その様子に俺は不安になって

「どした、気に食わなかったか？」

<こなた視点>

「どした、気に食わなかったか？」

佑樹くんはずっと固まったままの私に不安そうに声をかけた。

不意打ちだった。そんな不安そうな声も素敵なプレゼントも。

かがみとじゃれあってた私に渡してきたプレゼントは綺麗な服とネックレス。

どちらも私には過ぎた代物だ。でもそれ以上にあまり不安さとかを見せたことのない佑樹くんが不安そうにこちらの顔を覗く様子は相
当な不意打ちだ。

思わず佑樹くんの顔を凝視してしまうほどドキツとした。

声すら出すことが許されないような状況で私はやつと声を出した。

「ち……違うよ。ちょっと驚いてるだけだから」

「……そうか？もしかしたら迷惑なんじゃねえか？」

「そうじゃなくて逆に良すぎて私に会わないんじゃないかと思った
だけだよ」

「そっか……」

佑樹くんは私の言葉にほっとしたような

私はしばらく佑樹くんのプレゼントを見ていたがふと疑問に思った
ことを聞いてみる。

「これ、佑樹くんが買ったの？」

「だったらどうだってんだよ」

佑樹くんは何か嫌なことでもあったのかぶっきらぼうに答えた。

「なんか……」

「あ？」

「佑樹くんがそういう所で買ってるのって、想像出来ないんだけど・
……」

「……悪かったな。どうせ想像できねえよ俺は。つかした

くねえ」

私の思いついたことを口に出した言葉に佑樹くんはふてくされたように言いながらそっぽを向いた。

そんな状況の中で次に声を上げたのは・・・

「・・・・・・・・ぷっ」

少し顔を横に背けて口元に手をやり、必死に笑いを抑えているかがみだった。

それが佑樹くんが女の人に混じって女物の服やネックレスを真剣な表情で選ぶ姿を想像してしまったのかあるいは今の佑樹くんの顔がよほどツボにはまるほど面白かったのかは分からないけど・・・・・・・・・というよりまあ両方だとは思うけど。
私もそうだしね。

「ぷっ・・・お姉ちゃん、笑っちゃダメだよ・・・アハハ」

「そ・・・そうですよ、かがみさん。あんまり笑っちゃ佑樹さんがかわいそうですよ・・・フフッ」

「だってえ・・・だってこんなの面白すぎるじゃない！・・・アハハッ」

もはや口元に手をやり笑いを抑えるという行為を忘れ、お腹を抱えて爆笑しているかがみと、その横でかがみが笑うのを止める役割のつかさとみゆきさんも笑っている。まあかくいう私も笑っているんだけどねっ！

「・・・・・・・・お前ら」

佑樹くんは体をプルプルと怒りに震わせ低い声を出している……
んだけど、残念ながら赤い顔をしていてせいで全然怖くは見えない。

私達はその顔を見てさらに爆笑するのであった……。

「ねえそろそろ機嫌直してよ」

「・・・・・・・・」

私は佑樹くんにもう何度目か分からない言葉をかける。
だけど佑樹くんは何も反応しない。

「……ダメですね」

「あはは……そうだねえ」

「・・・・・・・・」

一言も発しない佑樹くんにみゆきさんとつかさは苦笑いを浮かべている。

「まったく、アンタも頑固よね……」

「・・・・・・・・うっせえ」

一番後ろで様子を見ていたかがみが嘆息しながら言った言葉に佑樹くんは小さく返した。

結局私達はその後佑樹くんの機嫌を直すのに2時間かかったのだった。

こなたの誕生日会（前編）（後書き）

か「・・・あまり進まなかったわね」

佑「かがみそう言ってやるな。作者が泣く」

み「そうですよ。作者さんも『今回はそうじろうさんが暴走してしまった。いつもよりは書いたので勘弁してくれ』って言ってますしこ「みゆきさん！今回作者はこのサイトのブーチやらモン○ンやらの人気小説を読みあさってたから更新が遅れたんだよ！！」

つ「そうだねえ。本当は1週間前には完成してるはずだったみたいだし・・・」

佑「ダメ作者じゃねえか・・・」み「あはは・・・。か・・・かがみさん。どこに行くんですか？」

か「ん？ちよつと作者をシバいてくるだけよ♪」

佑「ありゃガチでキレてるな。作者が死なないよう祈るしかないな。では次回また会おう」

つ「またね♪」

こなたの誕生日会（中編）

昼の12時近くになり俺達は座って雑談をしていた。

しばらく笑われ続けて不機嫌だった俺もなんとか機嫌を取り戻した。一悶着あったもののようやく全員落ち着き、改めてこなたの誕生日を祝うことになったのだ。

ちなみにテーブルには様々なサンドイッチが置かれてある。

これは俺の機嫌をかがみとこなたが必死に直している間につかさとみゆきがキッチンに行って作ったものらしい。

俺はその1つを取って口に入れる。

シャキシヤキとしたレタスにピリ辛のソースが効いたカツがとてもよくマッチしてしてる。

ふむ、この味は・・・。

ふとそこで視線を感じて顔を上げると、つかさとみゆきがこつちを不安そうに見てくる。

俺はそれを一瞥しながら

「美味いぞ・・・」

「・・・ありがとうございます」

俺が呟くとみゆきが一拍置いてお礼を言うてくる。

つかさも安堵のため息をついて、料理の説明をしてくれる。

「そのサンドイッチのソースはね、ソースとケチャップを7..3の割合で混ぜたものに隠し味として食べるラー油を加えたものなんだ

よ♪」

「へえ・・・さすがだな、2人とも」

「いえ、これくらいなら・・・」

「えへへ・・・ありがとう、佑くん♪」

2人は照れながらこっちに笑顔を見せてくれた。

正直かわいい・・・。

俺が2人の笑顔を見ているとこなたが、

「いやあ、佑樹くんも役得だねえ！」

「なにがだ？」

「だってこんな美少女4人と仲良く出来てるんだよ？これを役得と言わなくてなんて言うんだろうねえ」

「・・・自分で自分のことを美少女とか言ってんじゃないよ。つかなんつーかなんて知らねえしな」

「・・・でもまあ確かに・・・。4人ともかわいいよな・・・。絶対4人ともモテるんだろうな・・・って俺は今なんてことを考えてるんだっ！？俺にはもうそんなのいらねえって決めたら！！」

俺のその様子をどう読み取ったのか、こなたはニヤニヤしながら

「おやおやく？もしかしてこの中に意中の人でもいるのかな？」

「なっ!？」

「「「・・・っ!？」」」

「な・・・何を言い出すんだお前はっ!？」 「えゝ、だってそういう風に思ってるんじゃないのかな？」

「ち・・・違えよ! ちょっと黙ってただけで、なんでそういう考えになるんだ!!!・・・っていうかお前らもなんか言え・・・っておい! 大丈夫か!？」

こなたの質問をかわすためにかがみ達3人に助けを求めようとして、かがみ達のいる方向に向いた俺はそれどころではない事態を目撃した。

俺の目の先には3人が映っているのだがいつもの様子ではない。

かがみは顔を赤くして下に俯き、みゆきは何を考えているのかは分からないが同じく顔を赤くして放心している。

そしてつかさにいたっては顔を朱に染め目を回し、後ろに倒れて気絶している。

「あちゃゝこれはやりすぎたかなあ」

「やりすぎたどころじゃねえよ・・・。どうすんだよ・・・こいつら」

こなたも3人の様子を見ていたが、頭を掻いて悪びれた様子もなくそう言っただけだ。

俺はそのこなたと3人を交互に見較べて、うなだれながらため息を吐いた。

「見苦しいところをお見せしました・・・」

「・・・大袈裟過ぎるぞ」

「あう・・・恥ずかしいよお・・・」

「・・・つかさ。お前も大袈裟だ」

3人が復活してからというもののこの会話の繰り返しだ。

30分弱で復活した3人だが、それよりもこの会話を繰り返すこと1時間にもなる。さすがに疲れてきたぞ・・・。
ちなみにかがみはというと・・・

「アンタは少しは控えなさい!」

「はい・・・」

「ちゃんと分かってるの!??」

「・・・」

「だいたいアンタは自分の誕生日だからって調子乗りすぎなのよ!」

「・・・すみません」

「少しは自重しなさい!!」

「・・・ハイ、分かりました」

・・・この通りである。最初こそつかさとみゆきと同じ状態だったのだが、段々と怒りにかわってきたようだ。まあこなたの自業自得ということではスルーしておこう。

とりあえず今の俺の仕事は、この2人をどうにかすることだろう・・・。

「別になんも気にしてないから大丈夫だぞ?」

「・・・・・・・・」

「大丈夫だって・・・誰にも言わねえよ」

「・・・・・・・・^{ですか}本当?」

「ああ・・・言わねえよ」

つかぶっちゃけ言えるわけがない。いや話す人が居ないと言うべきか。友達と言えるのはこの4人だけ。我ながら交友関係が狭い。そう考えると若干の自嘲的な笑いを浮かべる。

それに仮にもし居たとしても、一度手に入れた繋ぎ目を潰しかねないことはしないだろう。

・・・分かってる。こんな考えする自分に吐き気がする。

「どうしたの? 佑くん、大丈夫?」

俺の様子を見てつかさが心配そうに声をかけてくる。

ふとつかさの後ろの方に目を向けると、いつの間にかこなたとかが
みもこつちを見ていた。

「いや・・・何でもない。」

「・・・本当？」

「ああ・・・大丈夫だ。・・・ちょっとトイレ行ってくるわ」

「あ、うん・・・」

心配そうな表情の4人を無視して部屋に来る前にあらかじめ確認し
ておいたトイレに駆け込む。トイレに入るとすぐ気持ち悪さによっ
て先程食べたサンドイッチを吐いてしまった。

全てを吐き終わったあと、トイレの壁にもたれ掛かる。

「かはっ・・・最低最悪じゃねえか・・・俺」

思わず出た言葉に罪悪感が深くなっていく。

俺はこなた達を友達として見てないわけじゃない・・・。ただ自信
が100%あるわけじゃないんだ・・・。もしかしたら・・・俺は
“友達”としてではなく、今を生きるためだけの“繋ぎ目”もしく
はあいづらの“身代わり”として見ているのかもしれない。

それは最低な考えで一瞬でもそんな考え方をした自分に吐き気がす
る。でもそれは紛れも無い事実で・・・。謝ってどうにか出来る問
題ではないのに謝ることしか出来ない・・・。謝ることしか浮かばな
い自分にイライラする。同時に最低な考えをした自分の記憶を打ち
消せない自分にさらにイライラが募る。

「少し気を落ち着かせてから戻ろう・・・」

俺の1人ごとはトイレの中で寂しく響いて消えていった。

俺がしばらくして部屋に戻ると4人は一斉にこっちを向き、よほど心配だったのか何回も声を掛けてきたのだが、俺が大丈夫だと笑顔で言うのと素直に引いてくれた。

気使わしちまったかな……。それだけで少し心をえぐられるような気持ちでしたが、そのまま無視して4人の会話に加わることにする。

「アンタ、そういえば17歳なのよねー……」

机に肘をつきながらこなたを見て言うかがみ。

「むー？それはどういう意味かなー、かがみ？」

こなたはそれを見て、身を乗り出しながらかがみの方を向く。

「どういう意味ってアンタのその見た目じゃ17歳には見れないじゃないってどういう意味よ」

「この中では1番のおねーさんに向かって失礼な!？」

「そうやってすぐ反応するところが子供っぽいのよ……」

あとはいつも通りに漫才が始まったのでスルーしておく。

放つといても自分達で自然に終了するから敢えて干渉する必要もないしな……。

そんな2人を見ていたみゆきが

聞いてくる。

「そういえば佑樹さんって誕生日っていつ何ですか？」

「そっか・・・佑くんの誕生日って聞いたことなかったね」

「そう言われればそうよねえ。ちなみに私達は七夕でみゆきは10月28日なのよ」

かがみとつかさがみゆきの問いに便乗してくる。

へえ・・・かがみとつかさは七夕生まれなのか・・・。

んでみゆきは10月28日生まれ・・・と。誕生日ちゃんと覚えとかなきゃいけねえな。

「俺は11月11日だ」

「うっわ・・・1多いわね・・・」

「知るかよ・・・んなもん。つーかそれ言ったら、お前ら2人も同じだろーが」

「同じじゃないわよ！アンタは4つ、私とつかさは2つだけだもん。どこが同じだって言うのよ？」

「いや、それあんま関係ねえし」

そもそも自分が生まれた日にちのことを俺に言われても困る。好きで11月11日に生まれてきたわけじゃない・・・というより自分の意思で生まれたわけじゃないしな。

「まあまあ、2人とも落ち着いてください」

そんな様子を見兼ねたみゆきが静止を促す。

しかしまあそんな中でも相変わらず爆弾を投下する奴がいる。ぶっちゃけ言ってしまうばこなたなのだが・・・。

「でも、さすがなんでも1番じゃなきゃすまない佑樹くんらしい日にちだねえ」

「おいこら、勝手に俺のキャラ捏造して追加すんじゃねえよ」

俺は内心やっぱりな、と呟きながらこなたの言葉に反応する。

「じゃあ佑くんはの中で1番年下なんだねえ」

そこへ今の今まで傍観者の立場に居たつかさが話に入ってくる。

その言葉に言った本人も含めて4人が同時に視線を合わせて、再び俺の方に向き直る。

俺はその一連の動作に首を傾げる。

「つまり・・・佑樹さんは」

「この中で1番年下ってことよね？」

「ああ・・・そうだが？それがどうした？」

「じゃあ私達の弟みたいなものだよね♪」

「・・・・・・・・・・は？」

もうこの時点で嫌な予感しかしねえな・・・この状況。

「私達のことをお姉ちゃんと呼びたまへ☆」

「・・・・・・・・断る」

なにかと思ったら、んなくだらねーことかよ・・・。

「ぶー、なんで？いいじゃん！」

「いいわきゃねえだろーが！誰が呼ぶか！」

そもそも素直に頷いてもらえと思ってんのが不思議でしやあねえ・・・。

「呼ばなかったらあのこと言っちゃうよ？」

「こんな小さなことにんなもん引っ張り込んで来るんじゃねえよ・・・」

「へえ・・・そーかそーか。言われても良いんだね？」

「いや・・・ダメだ。ぜってえダメだ。それだけは困る」

「じゃあ呼んで♪」

「・・・・・・・・」

「・・・ダメですか？」

じーっと4人の期待と不安が入り混じった視線が俺に突き刺さる。
なんでだ……。なんで俺はこんな視線を受けねばならんのだ。
俺は視線をさまよわせながら、少しの間逡巡してからあきらめて呟いた。

「……分かった、呼ぶ」

その直後パアツと明るくなった4人の顔に苦笑いしながら頭を搔く。

「えーっと……みゆ姉……つか姉……かが姉……こな姉……」

一々反応を見ながら1人ずつ呼ぶのは流石に恥ずかしいからまとめて呼ばせてもらう。

呼ぶんだからこれぐらいはいいよな？

しかしそれにしてもなんでこんな恥ずかしい目にあわねばならねえんだ……。

「佑樹くんはそういう呼び方かぁ。……せっかくだからお姉ちゃんで呼んでみて？」

「……いやこら待てや」

「なに？　なんか問題でもあるの？」

「問題有りまくりだろうが。ちゃんと約束守って呼んだ。なのになんでお姉ちゃんでもう1回しなきゃなんねえんだよ」

「いいじゃない。別に言って減るもんじゃないでしょ？あと1回呼んだって変わらないわよね？佑樹くん」

「変わるしな。俺にとっちゃすげえ変わってくるしな。・・・つかお前も呼んで欲しいのかよ？かがみ」

「わ・・・私は別にどっちでもいいのよ！・・・まあ呼んでもらえるのならそっちの方がいいけど」

「・・・？」

かがみのやつ、最後なんて言ったんだ？声小さすぎて聞こえなかったぞ。

かがみの隣にいたこなたは聞こえていたらしくニヤニヤしながら、

「かがみん、相変わらずツンデレだねえ」

「う・・・うつさい！ツンデレじゃないわよ！しかもかがみん言うな！！」

からかうこなたを一喝するところらを向き、

「・・・と、とにかく1回だけ！1回だけでいいからさっさと呼びなさい！！」

「お、おう・・・」

なんで俺逆ギレされてんだ？

俺は少し不満に思いながらも皆の方に向いて、

「……みゆきお姉ちゃん……つかさお姉ちゃん……かがみお姉ちゃん……こなたお姉ちゃん」

……終わった。一瞬のようで長かった。地獄が漸く終わった……。
ふと4人を見ると、

「これ……意外と恥ずかしい……ですね」

「私は従姉妹に何度か呼ばれてるから耐性がついていると思ったんだけど……」

「私もつかさが居るから大丈夫だと思ったけど男の子にそう呼ばれるとやっぱり違うわね……」

「あう……初めて呼ばれたからなれないよう……。恥ずかしいよ……」

4人はそれぞれ顔を赤くし、俯いている。……やばい。なんだかデジャヴが見えるぞ。

早くこの状態をなんとかしなきゃ先程の二の舞になる。

「そ、そういえば誕生日なのにケーキとかないよな？どっかにあるのか？」

とりあえず適当に話題をそらすことにしよう。

「あ、1階にあるから私取ってくるよ」

「こなちゃん、私も手伝うよ！」

こなたとつかさが俺の逸らした話題に乗っかって部屋を出ていく。
残ったみゆきとかがみに別の話題を振っていく。

「そーいやこの前集会で校長なに言ってたっけ？」

「アンタ、集会でなに聞いてんのよ。まさか寝てるんじゃないでしょうね？」

「・・・しょうがねえだろ。あの校長の話自慢ばっかでつまんねえんだしよ。眠くもなんだろ」

「・・・ほんとと呆れるぐらいの反論ね。そんなのじゃ将来苦労するわよ？」

「悪かったな。・・・でなに言ってたっけ？」

「確か、体育祭について話していましたよ」

「ケガのないように気をつけなさいとかなんとか言ってたわね」

「めんどくせえな・・・。っていうかもう体育祭の季節なんだな・・・」

「もう5月も終わりますしね」

こうしてみると時間過ぎんの早いよな・・・。まあこいつらと居る

と飽きないし。

「つーかお前もあんまし聞いてねえんだろ、かがみ。内容が曖昧じゃねえか」

「どっかの誰かさんみたいに寝てるよりはマシだと思うけど？」

その後ケーキを運んできたこなたとつかさが帰ってくるまで些細な言い争いは続き、みゆきが苦労したのはまた別の話だ。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

なんだこの状況は？なぜこんな状況になったんだ？

今、現在の状況を説明すると夕食を食べようと女子4人組が準備することになった。その時に泉父と一緒に食べようと煩いので泉家の居間で食べることになったのだが・・・。

なぜか俺の前には泉父がにらみつけながら座っている。どうやらまだ怪しまれているらしい・・・。

おかしいな……。さっきまで和やかに雑談してたはずなのに、こんな危機的な状況に陥ってるんだ……。

俺は泉父から視線を逸らし、居間の端っこに置いてあった本棚に目を向ける。

そこには昔知り合いの文庫編集部の人に紹介されたことのある小説が泉父の名前入りで置かれていた。

「あの・・・ちょっと聞いていいっすか？」

「・・・なんだね？」

泉父はいきなり声を発した俺に驚きつつも返事を返してきた。

「長谷川さんってご存じですか？」

「ああ、知っているよ」

「やっぱり！俺パソコンで小説書いてるんですけど、その時長谷川さんに泉さんの小説を紹介してもらったんですよ！」

「ん？もしかして侑って名前で投稿してるのかい？」

「はい！」

「おお！それなら読んだよ。奨に言われてね。中々面白い話を書くと思っていたんだがまさか君だったのか！」

「ありがとうございます！！」

その後夕食が出来るまで2人で小説について熱く語りあい、とても仲良くなった俺と泉父であった。

こなたの誕生日会（中編）（後書き）

悪霊（以下悪）「・・・・・・・・」佑「・・・・なんで作者がここにいらんだよ」

悪「しょうがないよ・・・・。好きで来た訳じゃないし。連れてきたあの怖い（・・・・）かがみに聞いてよ・・・・」

か「なによ！私のせいだって言うの！？」

悪「いえ、滅相ありません・・・・」

み「とりあえず話進めましょう」悪「あゝ・・・・まあ次でこなたの誕生日の話は終わりになります。次話の後半は誕生日関係ない感じになると思いますが・・・・」

こ「次に今回なぜ2月中に投稿出来なかったかお願いしまゝす」

悪「えゝと・・・・基本作者は原稿は書かないのでパソコンの前で打ちながら考えてやるわけなんですが・・・・ぶっちゃけ調子悪い時はまったくはかどりません。今月はそういう日が多かったのでこのような結果になりました・・・・」

み「でもなんで原稿書かないんですか？」

悪「だってぶっつけ本番とかかっこいいじゃん」

か「ろくな本文も書けないくせに調子乗んな！」ドカッ

悪「ぐはっ・・・・。だ、だって漫画家の中でも原稿書かない人いるじや・・・・」

か「素人の癖にプロ引き合いに出してんじゃないわよ！」バキッ悪

「あぐう！？じ・・・・次回はきちんと3月以内に投稿します・・・・

・・・・多分」

か「自信もってはっきり言いなさい！ただでさえ意味不明な小説なんだからっ」ドゴッ

悪「・・・・・・・・」

佑「おい！？作者大丈夫か！？・・・・やばいな。みゆき、救急車だ！」

み「は、はい！・・・ってかがみさんはどちらに・・・？」

こ「作者が気絶した瞬間、逃げてったよ。すんごいスピードで（爆笑）」

つ「笑いごとじゃないよ、こなちゃん・・・。・・・ということ
作者が気絶して意識不明なので今回はこれで終わりだよ！こなちゃん
んの誕生日の後は体育祭の話しに入るのでよろしくお願いします♪」

こなたの誕生日会（後編）（前書き）

ネタバレ追記…後々重要

かがみに話しかけた人物と佑樹に話しかけようとした人物は同一人物ではありません。

あらかじめご了承ください

追記前に読んだ方は惑わせてしまつてすみませんでした。

こなたの誕生日会（後編）

泉父と意気投合した俺は食事が終わった後に仕事に関わるものと実際の作品の原稿を見せてもらうことになった。

「へえ！これがプロの小説家の原稿なんっすね！！」

「プロって言ったって大したものじゃないよ」

「いえいえ、そんなこと無いっすよ！泉さんは天才っすよ！」

「そ・・・そうかい？いやゝそう言ってもらえて嬉しいなあ」

「でも本当参考になるっすね・・・あ、ここってどうしてこうなってるんすか？」

「ん？ああ、そこね・・・。そこは主人公の心情を表現したいから敢えて・・・という風にしてるんだよ」

「へえ・・・。なるほどなあ。そういう表現の仕方があるのか・・・」

「良かったら今度原稿を見てあげようか？」

「本当ですかっ！？」

「おお・・・意外と反応が良いね。あくまでも君が良ければだけだね。いつが良いかな？」

「いつでも良いっすよ！俺は見てもらえるだけで光栄なことっすから！」

「じゃあ好きな時に来てくれてかまわないよ。事前に電話さえしてくれば時間を取っておくしね」

「分かりました！納得のいく原稿が出来上がったら必ず見せに来ます！」

「ははっ・・・待ってるよ」

そんな2人を遠くから見ていたこなた達4人組が近付いてきた。

<かがみ視点>

「すっかり意気投合しちゃったみたいだね」

「まったく本当よね。しかもなんか楽しそうだしね」

つかさが笑いながら感想を言い、かくいう私も両手を腰にやって、笑顔を浮かべている。そんな中こなたが珍しく何かを考えているような素振りを見せている。こなたの隣に居るみゆきが心配したのか声をかける。

「泉さん、どうかしましたか？なにか考えてるみたいですけど・・・」

「んゝ．．．いやまあ今まで疑問だったんだけど、かがみが笑つてるとちよつと怖いな．．．と」

「．．．．．それは私にケンカを売つてると見て間違いはないのか？」

つていうか笑顔が怖いとか初めて言われたんだけど！若干．．．いやかなり失礼だと思っただけど！いくら私でも傷付くんだけど！冗談だつていうのは分かつてるけど、むしろ冗談で言つてるからこそまだ助かつてるけど結構傷付いてるんだけど！？と心の中で思いつつも敢えて口には出さない。言つたら言つたでまたからかわれるに決まつてるしね．．．。

「．．．．．という冗談は置いて．．．。今回は面白いかがみんの話じゃないしねゝ。．．．．．私、おとーさんが人に原稿とか仕事関係のものを見せてるの初めて見るなゝって思つてたんだよねゝ．．．．．」

前半の言葉はムカつくけどこの際無視しておこうかしら。．．．いややっぱりムカつくから後で一発殴ろう．．．うん、そうしよう。それよりも、後半の言葉の方が気になる。

もしこなたの証言通りだとするならば、佑樹くんがそれ程までにそうじろうさんに心を許されたことになる。心を許されたということとは自らの定めた境界線の内側――つまり自分の心という特別な部屋に上がらせ、自分の身を曝すしんということだ。そうじろうさんで言えば自身の小説の原稿のことだ。

しかし、自分の身を曝すのは並大抵のことではない。それがたとえどんなに信頼出来る人だとしてもだ。だからある意味そうじろうさんはすごいと思う。

私はそう考えながら、仲良く話す2人を――・・・いや正確に言えば佑樹くん1人を見てみる。

佑樹くんが心を許してくれるのはいつなんだろう・・・。いつも思っていた・・・。あの笑顔が心からの笑顔ではないということ。確かに初めて会った時よりは笑うようになったし、喋ってくれるようになった。だけど、未だに他人行儀な扱いを受けている気がしてならないのも事実だ。

「・・・一体いつになったら心開いてくれるのかなあ・・・。」

思わずそんな呟きが出てしまう・・・。

私の近くに居たつかさだけが私をチラッと見たが、すぐ視線を逸らした。

『心配しなくてもいいわ・・・』

「・・・？」

誰かが私に喋りかけた気がした。

私が周りを見回していると、

『彼は貴女達を信頼してる。だけど今はまだ心の整理が出来てないの。だから今はただ信じてあげて？いつか必ず待望の時はやってくる。それまでは信じて、傍に居てあげてね・・・』

今度ははっきりと聴こえた。

私はその問いかけに力強く頷いた。

・・・そうだ、今傍に居る私達が信じなくてどうするんだ。信じよう・・・そして待とう、いつかその日が来るまで。

<佑樹視点>

すっかり泉さんと仲良くなった俺は若干呆れ気味だったこなた達と一緒に一旦部屋に戻り、今日泊まる部屋割りを決める。

「2階の部屋はおとーさんと私の部屋以外に2部屋あるよ」

「じゃあ泉さんの部屋に1人、空いている2つの部屋に2人と1人で分けることにしましょう」

こなたが部屋どりを説明し、みゆきが部屋割人数を決定している。ちなみに俺はと言うと無関係な話なので壁に背中をつけて目を閉じている。

正直、俺は1人部屋だろうしな。あまり関係のない話だ。

そんなことを暢気に考えてすらいた。差し詰め傍観者のように・・・。

・・・しかし、そう上手くいくほど世界は容易ではない。特に俺の場合で言えば1番ちっちゃい奴が空気を乱す要因だった。

「んーじゃあ佑樹くんは私の部屋で寝る？」

「・・・・・・・・・・は？」

俺から1番奥の机の椅子に座っていたこなたの言葉が俺の耳に届いた。

「今なんて言った？こなた」

「だから、私の部屋で寝るって聞いた」

「・・・・・・・・意味が分からん」

「私のあともう1人のところを佑樹くんにしようってことだよ」

「んなことあ分かってんだよ。俺が言ってるのはなぜ俺がお前と寝るんだって話だっつーの」

「えっ、もしかしてダメだった？」

「当たり前だろーが！むしろ断られないとか思ってるような、今の返事の方が意味分かんねえし」

「そうよ！あんまり変なこと言うのやめなさいよ！」

「あれゝもしかしてかがみんも佑樹くんと一緒に寝たいの？」

「なっ！？違うわよ！な、なななんで私がコイツと寝なきゃなんないのよ!?!？」

「・・・・・・・・落ち着けかがみ。そんな動揺してちゃこなたの思う壺だ」

俺は事態收拾の為、一旦2人を落ち着かせようとする。

・・・が、それも問屋は卸さなかった。なぜなら今まで蚊帳の外だったつかさとみゆきの2人が突然乱入してきたのだ。

「そういうことなら私も佑くんと寝てみたいな」

「私も興味ありますよ」

なんで一緒に寝る方向で話進めようとしてんだよ・・・。

「いや、だから俺は1人部屋でいいんだって」

「じゃあ誰が佑樹くんと寝るかジャンケンで決めない？」

「・・・お前ら、少しは俺の話を聞けってーの。つーか俺の意思はねえのかよ」

「いいわね、それ。真剣勝負よ」

「勝っても負けても、皆さん恨みっこ無しですよ」

「正々堂々とやろうね」

「・・・・・・・・・・」

こいつら・・・態とやってんじゃねえだろうな？ いや、絶対態とやってやる。

目の前にははしゃぎながらジャンケンをしている4人の姿。

はぁ・・・これで俺が嫌だなんて言ったらボコボコにされる（主

にかがみだが）んだろうな・・・。

俺は深く溜息を吐き、己の運命に対し現実逃避するのだった。

「そこまで緊張することはねえだろう？ なにもするわけじゃねえ・・・
ただ寝るだけだぜ？」

「は、はい・・・」

隣に寝ているみゆきの緊張はジャンケンで勝った直後からこのままだ。

「本当に大丈夫か？」

身体はブルブルと震え、愛想笑いさえもままならないみゆきに本気で心配になってくる。

「ただ・・・大丈夫ですよ。私は何の問題ありませんから、佑樹さんは先に寝てください」

「・・・・・・・・分かった」

その言葉に渋々返事をして、みゆきに背を向け、目を瞑る。

そんな俺にみゆきが後ろから抱き着いてきた。

「・・・・・・・・みゆき!？」

思わず小さく叫び声を上げ、振り返った俺にみゆきは口許に人差し指を当て静かにと合図をするだけだった。

<みゆき視点>

「だだ・・・大丈夫ですよ。私は何の問題もありませんから、佑樹さんは先に寝てください」

私の自分でも不安に思う言葉に佑樹さんは少し納得のいかない様子ながらも、分かったと言葉を返し、私に背を向けた。そんな行動に寂しさを感じたのかは分からないけど、気付けば私は佑樹さんの背中に抱き着いていた。

「・・・・・・・・みゆき!？」

いきなりの行動に自分に自分で驚きながらも、それより驚き慌てている佑樹さんに向かって、口許に人差し指を当て静かにと合図をする。

佑樹さんはむう・・・と少し不満そうに声を出し、こちらを睨み、

「なに、笑ってんだよ・・・」

そんな姿に声を押し殺して笑っていた私にふて腐れた様子で低く呟いた。コロコロと変わる声と表情に我慢出来なくなり声を出して笑いが洩れる。

「まったく、さっさと寝ねえと起きられねえだろうが。明日だって遊びに行くんだしよ」

「そうですね♪」

抱き着いていることに触れず、そのまま流してくれていることに嬉しさを覚え、抱きしめる腕に力が入る。心地好い感覚にもう1度、

「佑樹さん・・・？」

「・・・・・・・・なんだよ」

「なんでもないです♪」

私の言葉をどう取ったのか分からないけどそのまま黙って反対側に向き直した。

どうやらこのまま寝るらしい。しばらくすると吐息が洩れる音が響き渡った。

「寝れない・・・なあ。今日中に寝られるかな・・・」

私は佑樹さんにさらに密着して一言呟く。

「おやすみなさい、佑樹さん」

願わくばこの時間がもう少し続きますように。

この手が一生離れませんように。

私の意識はそこで深い眠りの中に落ちた・・・。

<佑樹視点>

「やっと寝たか・・・」

みゆきが眠って、俺は腕から離れて身体を起こす。

「まったく・・・誰が寝られないかもだよ。きっちり寝てんじゃねえか。眠れねえのはこっちだってんだよ・・・」

俺は頭を掻きながら寝ているみゆきに目を向ける。

「それにしてもみゆきが敬語使ってねえところを見れるとはなあ。面白れえもん見ちまったなあ・・・」

自然と笑いが出る感覚を感じながら、再び頭を掻く。

「さあてどうすつかねえ・・・。まったく眠れそうにもねえしな・・・。ま、横になってりゃそのうち寝れるか」

みゆきの髪を触りながら、小さく微笑むと

「おやすみ、みゆき」

静かに呟いて横になり、目を瞑った。

「佑樹くん、本当に大丈夫？」

「・・・ああ」

朝の食卓で案の定一睡も出来なかった俺はかなり心配されているが、残念ながら多量の疲労感によって思考の回復してない頭では返事もままならない。

さらに言えば、朝みゆきが起きた時に一悶着あったのも影響している。

「あの・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

あゝ眠い・・・・・・・・。

「あの・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

今日1日持つのか？俺の体・・・。

「あの・・・！！」

「うおわ・・・！？」

寝ぼけた頭で考え事をしていた俺の眼前に突如みゆきの顔が現れた。

「な・・・なんだよみゆき。なにかあったのか？」

「いえ、佑樹さんに声をかけたんですが返事が無かったのデ」

「あゝ、悪かったな。ちよつと寝ぼけてたわ。んで何か用か？」

「えっとあの・・・すみません」

「あ？なんでみゆきが謝ってんだよ」

「昨日、私があんなことしたから、佑樹さんは寝不足だからです」

「違いよ。俺の寝付きが悪かったんだ」

「しかし・・・」

「もういい、この話は終わりだ。もう気にしないでいい」

「はぁ・・・分かりました」

みゆきは渋々といった様子ながらも引き下がってくれた。

ふう・・・眠れなかったが意外な一面も見れたし、よしとすつか・・・。

あんまり暗えと心配かけるからな。気分変えてくか。朝食を食べ終わったあと、しばらくこなたの部屋でゲームなどをしていた俺達だったが、休暇をとり1日遅れでこなたの誕生日を親戚の人が祝いに来ると聞かされて、昼前に解散することになったのである。

「それではありがとうございました」

かがみが泉さんに向かって、礼を言う。

「わざわざいいよ。それよりもこなたの誕生日に来てくれてありがとう」

「そんな大したことではありませんよ」

「私達がこначьяんの誕生日、祝いたかったただけだもんね」

みゆきとつかさが気にするなと言うように手を振っている。

「いやいや、とにかくありがとう……。佑樹くんも小説頑張つてな。私がいつでも見るよ」

「はい、今度見せにきます。泉さん」

「泉さんはやめて欲しいなあ。これからも交流があるんだ。そうじろうでいいよ」

「あ、はい……。分かりました、そうじろうさん」

「ああ、それと佑樹くん。ちょっとこっちに」

「え？はあ……。なんですか？」

おもむろに俺をこなた達に声が聞こえないところまで連れていくそうじろうさん。

（一体なんなんだ？）

「さて、佑樹くん。君は一体誰を狙っているんだい？」

「はあ？」

「はあ？ じゃないよ！ 君は今私のこなたも含めて、あんなに可愛い女の子達と居るんだよ！ 誰を狙ってるんだい！？」

「いやいや、狙うもなにもただの友達ですし・・・」

というより自分の娘を可愛いと言うのはどうなんだろうか？

「バカかい君は！？ 今可愛い女の子達が君の周りに居るんだよ！ まさしくギャルゲの主人公じゃないか！？」

「そんな力説されても・・・俺そんな気ないですし」

というかそんなこと言うために連れてきたのか？ この人・・・。

「えっとお話し、それだけならもう戻ります」

俺がそう言って、そうじろうさんに背を向けた時、「佑樹くん」と声が聞こえた。

「なんすか」

「娘を・・・こなたをこれからも頼んだよ」

「はあ・・・？」

そうじろうさんは「言いたいことはそれだけだよ」と言って先に戻っていった。

俺は・・・いや、今の俺にはそうじろうさんの言葉の意味を理解出来ず、その意味を理解したのは取り返しのつかないことをした後だった。

「じゃ私達は買い物あるから」

「またねーゆきちゃん、佑くん♪」

「では、私もお暇させていただきます」

つかさとかがみは家から買い物のお願いをうけ、みゆきは知り合いが近くに車で来ていたらしく、車で帰っていった。

（まあ、今の俺にとっちゃ好都合だな）

俺は行く宛もなく、フラフラと歩き出した。

そしてどれだけ歩いただろうか・・・しばらくすると1つの神社に辿り着いた。

「鷹宮神社・・・か」

境内の中へ入り、周りを見渡すと何人かの人が居た。

俺はその光景を見ながら拝殿の前に行くと手を合わせ、スツと見据える。

「卒業だ・・・。高校卒業と同時に居なくなる。それまではあいつらと居させてくれ、あいつらは俺の大切な親友だ。人生の最後に思い出を作りたい。あんなことしておいて身勝手かもしれないが許してくれ」

俺はそう言い切り、神社をあとにしようとした。

『・・・・・・・・・・あの』

「・・・・・・・・ん？」

ふと何か聞こえ、後ろを振り返る。

「気のせいか・・・・？」

完璧寝不足が原因だな・・・・。早く帰って一眠りするか。

俺は今度こそ神社をあとにした。

佑樹の去った拝殿に2つの影が舞い降りた。

『・・・・・・・・まだ、私の声は届きませんか・・・・』

突然現れた人影たちは一言そう呟き、再び姿を消した。

運命を諦めた者、運命を傍観する者、両者の邂逅は未だ遠い。

こなたの誕生日会（後編）（後書き）

悪「はい、お久しぶりです。悪霊です！」

佑「今回再び遅れたことをお詫びします」

か「遅れた理由はえっと地震ってのがありますが、身の回りの問題等もあって大変でした」

つ「これからしばらくまだ大変ですが更新はきちんとしていこうと思います」

み「なのでこれからも温かく見守ってやってください」

こ「どうでもいいけど今回の話、グダグダじゃない？」

悪「ちょっ・・・空気読んでよ！今、そんな話じゃなかったでしょ」

こ「だってさゝ遅れたことって自業自得だよね？文もグダグダだし」

悪「仕方ないじゃん、急いで書いて見直す時間なかったんだし・・・

。っていうか自業自得言うな！」こ「開き直りだ」

佑「開き直りだな」か「開き直りね」

つ「開き直りだねえ」

み「開き直りですね」

悪「うっさい！うっさい！うっさい！なんだこれ、遅れたの取り戻そうと考えてんのになんでこんな目にあってんだよ——！！！」か

「あ、逃げた・・・」

佑「やれやれ・・・。さて読者の皆さん、今回の話で誤字脱字や変などこを見つけた場合、作者を探して教えてやってくれ。もし万が一、作者を見つけれなかったり、探すのめんどくせと言われる方は、俺達に連絡ください。きちんと直しておきます」

体育祭開幕!!

「おゝす、佑樹くん！」

「おはよう、佑くん♪」

「おはよー、佑樹くん」

「おはようございます、佑樹さん」

「おはよう、みんな」

今日は体育祭当日。数日前にそうじろうさんが別の学校の体育祭に侵入し、つまみ出されるというニュースを見た記憶はまだ新しい。

「にしても体育祭ってダルいな・・・」

「本当だよね」

何が悲しくて休日の朝っぱらから学校に来なきゃならねんだか・・・。

こなたも欠伸をしながら俺の言葉を否定する。

「佑樹さんも泉さんもそんなこと言わずに頑張ってください」

「そーよ？もうちょっとシャキツとしなさいよ。っていうかこなた！アンタはただ徹夜して眠いだけじゃない！」

「うるさいな、昨日

は敵の沸きがよかったんだもん」

「そりゃ言い訳になってねえよ、こなた」

「そうだよ。そもそも佑くんとこなちゃんは運動出来るからいいでしょ。私なんか緊張しすぎて大変だよ」

遂にはつかさが弱音を吐いて、落ち込む始末だ。

ちなみに言っちゃあなんだが登校中の生徒がたくさんいるわけなんだが……。

ぶっちゃけ、日曜日ってこともあって眠たそうにしているメンバーが大半の中で、騒いでる俺達はかなり目立ちまくりだ。まあ、あれだ……正直視線がうつとうしい。

「まったく、アンタ達はもうちょっとやる気出なさいよ！」

周りの視線に気付いてか、かがみがかさを慰めながらこちらを睨んできた。

その言葉にこなたが呆れた様な顔をして反論する。

「だってさー、黒井先生テンション高すぎるんだもん。しかもこっちが引くぐらいだし、もう本当にメンドクさすぎるよ……」

こなた曰く、昨日ネットゲをやっていた時、黒井先生に早く寝ろと連呼されたらしい。

まあ、夜遅くまでネットゲをやってるこなたもどうかとは思うがな……。

それは黒井先生にも当て嵌まるのだが、まああれだけテンション高かったし大丈夫か。

「でも確かに黒井先生のテンション高かったよね」

「ああ・・・迷惑極まりないぐらい高かったな」

「そこまでではなかったと思いますけど・・・」

「へえ・・・アンタ達も大変ねえ・・・」

かがみが哀れみの視線を向ける。

「ちよつ、哀れみの視線を向けないでよ！かがみ」

「別に？私はなんにもしてないけど？」

しれっとした顔であなたの抗議を流すのが若干腹立たしい。
ふとそこで俺はある疑問が浮かんだ。

「そーいやかがみって何の種目に出るんだ？」

先ほどのやり取りからいつもの如く、じゃれあいに発展した光景を見ながら、思い浮かんだ疑問を口にした。

おっと、ちなみに言えば俺達の出る種目は、俺が100mと男子団体リレー、男女混同リレーの3種目。

女子3人組と白石らの推薦によって、予定以上の種目に出ることになった。ぶっちゃけ周りの人間や白石は俺に面倒な種目を押し付けただけだろうがな・・・。まあ、まったくかまわんが。

そしてこなたが100m、つかさがハードル走に男女混同リレー、みゆきが走り高跳び、男女混同リレー。

こなたは面倒という理由で、みゆきはこなたの「みゆきさんはみんなのアイドルなんだからあまり出ちゃだめだよ!」とかいう意味不明な猛抗議により2種目に決定した。つかさはまあ・・・あれだ。俺と同じだ。女子が押し付けた。そのせいで超緊張しているのだが。

・・・説明が長くなったな。本題に戻ろう。

「えっと・・・私はあの・・・その・・・」

先ほどの余裕はどこへやら、一気にしどろもどろになったかがみ。心なしか顔は朱に染まり、体はぶるぶると震えている。

さらにその隣にいるこなたは意地の悪い顔で笑っているのだが、つかさの方は苦笑いをしているのでよく分からずに首を傾げる。

見る限りは、こなたとつかさはかがみの出る競技種目を知ってるみたいだな・・・。

俺と同じく首を傾げているみゆきは知らないみたいだが。

「えっと・・・笑わないでね?」

「は?」

意味不明だ。なんの競技だか知らんが笑えるものなどあるわけがないだろうに。

「えっと走り幅跳びとパン食い競争・・・」

「・・・あ?それだけか?」

「そ、それだっけて・・・」

「ああ。もしやとは思うがパン食い競争で食い意地張ってると思われるのが嫌とかか？」

「う・・・それは」

その反応に笑いが込み上げる。

「・・・やっぱりおかしいかな？」

おっとっと、俺の笑いをマイナスの方向に捕らえたか。相当からかわれたようだな。

「安心しろ、別段気にしてない。俺は食べない人よりたくさん食べる人の方が個人的に好きなんだな」

「え？そ、そう？・・・よかった」

かがみが安堵のため息をつき、少し照れたように笑う姿を見て、俺も笑みがこぼれる。

「おゝアツアツですな」

「よかったですね、かがみさん」

「うゝ・・・お姉ちゃんだけずるゝい・・・」

それを外から茶化す外野。つかさだけは違う反応だが・・・。

ほのぼのとして心地よいこのメンバーとの日々。これが永遠に続く。そんな気がする。

とそこへ突然来訪者が現れた。

「おーい、柊さーん」

校舎から走り寄る男子に俺は目を向け、思わず凝視してしまう。その様子を尻目に男子がかがみに近寄る。

「あれ？桜庭くん？」

「やっと見つけたよ。柊さん」

「え？もしかして結構探してた？」

「いや、そんなでもないよ」

どうやらかがみを探していたようだが。何の用だろうか。

一言二言話を交わしていた、2人の空間を破る1人の女子が現れた。

「なになに、もしかしてかがみの想い人？」

まあ言うまでもなくこなたの奴なのだが・・・。
ってかこいつ、今聞く質問じゃねえだろどう見ても。

「なっ、違うわよ!?!?なんで私が桜庭くんと付き合わなきゃならないのよ!」

「それ、結構僕も傷付くんだけど・・・」

必死に否定するかがみだが、遠回しに相手を傷付けていることに気付いていない。

「お姉ちゃん、なんで私に教えてくれなかったの!?!?」

「だから違うってば、つかさ!・・・みゆきからもなんとか言ってる!」

「私、かがみさんが遠い人に見えてきました・・・」

「みゆきまで何言ってるのよ!」

天然2人の発言でさらに慌て始めたかがみ。

仕方ない・・・。俺的にはこの光景は非常に面白いのだが、そろそろかわいそうに見えてきたので助け舟を出してやるか。

今まで会話に入れず、すっかり傍観者と化していた俺は同じくあまりにもバカっぽいやり取りをしている4人から1歩引いて、見えた顔馴染みに4人を宥めつつ声をかけた。

「おう、優斗。久しぶりだな」

「久しぶりだね、佑樹。まさか君から声を掛けてくるとは思わなかったよ」

「んだよ、それ。俺が声を掛けちゃダメだとしても言うのかよ？」

「違うよ。別にそういうことじゃない」

「だったらなんだってんだよ？」

「だって僕ら、あんまり面識ないじゃん？」

「面識なきや声掛けちゃダメってか」

「うん、だって面識ない奴に声掛けられても怖いだけだしさ。正直不気味だよ」

コイツ……。せっかくアイサツしてやってんのに、なんて薄情な奴なんだ

・・・ニヤニヤしてるとこみてる俺の反応を見て楽しんでるってことなんだろうが。

まあ、俺も面識のない奴にアイサツされたら同じこと言うだろうし。

案外優斗と俺ってそういうところでは似てんだよな、面倒なことに。

ふと横に視線を向けると、若干戸惑い気味の4人の姿が映る。思わず笑みが零れる。

「お前、ほんっとひでえやつだな」

「何が？僕はただ事実を述べているだけだよ？」

「たとえ面識なくてもよ、小学校の頃から一緒なんだから話しかけても別に不思議なことじゃねえだろ。」

同じクラスには1度しかなかったことないけどな」

「・・・君は本当にそう思ってるの？」

「俺が嘘付く理由があんのかよ」

「だって君は―――・・・いやなんでもない」

「あ？何だよ？言いてえことがあるならはつきり言えよ」

「別に？なんでもないよ」

「・・・・・・・・」

ちっ・・・なんなんだ。ムカつく奴だな。

こなた達のほうをチラチラと見ながら顔はニヤニヤしてやがる。

そこできかがみが会話に入ってきた。

「もしかして2人とも知り合い？」

「うん、小学校からの付き合いだよ、柊さん」

「・・・そうだったか？」

「ちょ・・・自分でさっき言ってた奴が何言ってるんだよ！」

「うるせえな。・・・つかお前何しに来たんだよ？」

「あ！そうだ！柊さん、桜庭先生が呼んでたよ！作戦会議だって」

「え!?! 本当? じゃまた後でねっ!」

かがみはそう言って優斗を引き連れ一足先に教室へ向かった。

ふむ、それにしてもあいつがこの学校だったとはな・・・。

いずれ過去の清算としてこなた達と別れなければならぬと決意した次の日に過去を知る者と会うとは・・・なんとも皮肉なものだな。まるで俺が直前になって考えを改められないように釘でも刺しているつもりか。そんなことせずとも離れるというのに、むしろ俺の過去を知ったならこいつらの方から離れていくかもしれないというのに。まったくホントに滑稽だな。くだらん期待するのはもう飽きた・・・。もう誰も信じない・・・こいつらを最後に。

そこでふと上を見上げる。

今日の空も暗く、荒れていた。

<優斗視点>

「ねえ、聞いているの?」

「・・・え? なに?」

「もう桜庭くん、やっぱり聞いてなかったのね!?!」

「ごめんごめん・・・ちょっと考え事してて、で、なに?」

「なんで桜庭くんが呼びに来たの?」

「なにもしかして僕じゃダメだった?・・・それともまだ佑樹と居たかったとか?」

「な、なな、違うわよ!?!」

バレバレだなあ・・・。

「そうかなあ・・・、強く否定する所とか怪しいけれど」

「・・・ツ、ていうか話をすりかえないで」

「あはは、ごめん。答えて言ってもただ先生の近くに居たからってだけなんだけどね」

「ふうん・・・」

「まあ佑樹と一緒にいるとは思ってたからね」

小声で呟く。

「え? なにか言った?」

最後の呟きは聞こえなかったようだ。

「ううん、なんでもないよ」

そこでふと空を見上げる。

今日の空も青く、穏やかだった。

・・・佑樹、早まるなよ。

心の眩きはどこまでも青い空に吸い込まれた。

<つかさ視点>

こなちゃん達が体育祭の話をしていた時、私は先ほどの光景を思い出していた。

あの桜庭くんが言いかけた言葉。

何を言おうとしたかは分からないけど、私にも分かることはある。あれは間違いなく、佑くんの過去に関係あることだ。

それを証拠に桜庭くんの視線は、常に佑くんを捕らえながらも私達の反応を確認していた。

佑くんも桜庭くんに会ってから、顔がすごく寂しそうな表情を作るようになった。

いったい佑くんに何があったんだろう？

そこで私の思考は止まった。

佑くんの手が頭に置かれ、顔が目の前に現れたからだ。

「ふえ!？」

「なにしてんだつかさ」

驚きで変な声が出た私に、佑くんが怪訝そうに声を出す。

「な、なにが!？」

「なにがじゃねえっての。いきなり立ち止まってんじゃねえよ。こなたとみゆきもう行ったぞ？」

佑くんは心底呆れたようなため息を吐く。

「まさか具合悪いってわけじゃねえよな？」

「大丈夫だよ、熱なん——！！？」

大丈夫とアピールしようとした次の瞬間、佑くんのおでこが私のおでこにつけられた。

「……ん。熱はねえみたいだな」

「だから大丈夫だよ！」

「まさか緊張してんのか？」

私の必死の叫びをスルーし話を進める佑くん。

確かに！確かにそれもあるけど！今はそういう話を考えてたわけじゃないよ！！

心の中で慌てふためく私の頭を佑くんは撫ではじめた。

「大丈夫、つかさならやれるさ」

その一言で私の不安は取れた気がした。

佑くんが傍に居れば私に怖いことは何もないと思える。

「……ありがとう」

見上げた先には優しい顔をした佑くんがいる。

「私、頑張るよ。自分の全力で」

そう言って、ふと空を見上げる。
今日の空も青く、穏やかだった。

体育祭開幕！！（後書き）

佑「ども、久しぶりだ。今日は俺一人なのでゲストを呼んだ」

優斗（以下優）「初めまして、桜庭優斗です」

佑「ふむ、お互い色々作者に対し愚痴もあるが先に告知をするぞ」

優「分かったよ。僕も色々溜まってね、早めに終わらせて殴りに行きたいんだ」

佑「……。では告知だ。見ての通り優斗はオリキャラだ。だが分かってもらえるとは思うがうちのダメ作者がそんなことをやる確立などほとんどないのでな」

優「そこで僕の生みの親である神代七夜様が悪霊様にオリキャラとして僕を作ってくれたんだ」

佑「だがしかし、もう少し俺の過去を知るものが必要だし、中学時代のトラウマとなる事件に直接的な関係するキャラもまだ固まってないので、他の読者の方にその製作をお願いしたいのだ」

優「直接的な関係するものはなんとかするとは言っていたけど、少々不安なので一応製作してもらえると嬉しいです」

佑「本来はだいぶ前の後書きで告知はしてあったんだが、神代七夜様に問われるまでうちのダメ作者も忘れていてな。まったく申し訳ない」

優「佑樹の過去を知るものは小中学校から同じ学校の生徒って言うのが条件な以外はどんな設定でも構わないのでよろしく願います」

佑「この通り、ろくに通常の投稿さえこなせない作者なので、そんな暇はない。今も次の話を書いている。最近は講義の合間もやって補ってはいたが、あれはあれで忙しいので、ちょっと投稿遅れるのは勘弁してもらいたい」

優「でもさ、悪霊様って偽善者？約束守らないし……」

佑「こら、ここは読者の皆様も見られる場所だ。そういう愚痴は作

者の目の前でじっくりゆっくり言ってやればいい」

優「そうだねえ、今から楽しみだよ」

佑「では、今回はこの辺で失礼します。どうか次会うときはもう少し早く会えることを望んでいます」

体育祭 前編!!

<佑樹視点>

「さて、早速100mだな」

「朝一番に走るのはつらいよ・・・」

「んゝこなたさんの言う通りかもねえ・・・朝はつらいよ」

「・・・お前がその言葉を言うんじゃないよ」

「えゝ？ いいじゃん、つらいんだから」

「だからお前は全然平気そうな顔しといてなに言ってるんだ」

同じ100m同士こなたと話していたら優斗も100mだったらしい。朝の一件で仲良くなれそうだとは思っていたがやはり思ったとおりだったようだ。

もうすでにお互い名前呼び合うようになっていた。しかもつかさやみゆきとまで仲良くなっていると言うから驚きだ。

応援する場所が隣同士だということも関係はしているのだろうか？ それを差し引いても異常だ。

こいつらには警戒心というものはないのだろうか・・・。

佑樹自身は気付いていないがこの問題にはもちろん佑樹が関係している。

元々警戒心の強い佑樹が気を許せる仲間だと認めた人物だからこそそれを信じ、仲良くなれているのだ。

だが悲しいかな、佑樹自身にそういった自覚がないため相手に信頼されていることに気付いていないのだが……。

たわいもない会話をしていると100mの出番がやってくる。対戦する列ごとに並んで歩くがどうにもだるくてやる気が起きない。

「佑樹だるそうだねえ……」

「ああ、つか眠いわ」

「大変だね」

「ああ……ってうお!? なんでお前、俺の横に居んだよ!」

「佑樹うるさいよ?」

「おお……悪い、じゃなくて! だからなんで隣に居んだよ!」

「もううるさいなあ。そんなの僕が君と同じ列だからに決まってんじゃない」

「そうなのか? ってお前と同じなのかよ」

知らされた事実 zu うんざりな気分で優斗を見る。

「うわっひっど。なにそのいかにも嫌そうな目は」

「だってお前と競争するとかマジで嫌だ」

優斗は中学校の中でも運動能力トップクラスの連中の上位に入っていたほどだ。

基本的な運動能力で勝てる奴などほとんどいない。そんな優斗と対決するなど勘弁願いたい。

だがまあ所詮トッ・プ・ク・ラ・スというだけ。真のトップはこの佑樹なのだが、いかんせん本人にその自覚がないため、まったく気付いていなかった。

「相変わらず言い方ストレートだねえ・・・」

さも気にしたような素振りは見せず、逆に何が面白いのかクスクスと笑っている。

「お前みたいのにのりくらりとかわすようなしゃべり方は得意じゃねえもんでな」

「そうだねえ僕も君みたいにストレートな言い方は出来ないよ・・・君がトラウマを乗り越えるまではね」

「あ？今最後なんか言ったか？」

「なんでもないよ？」

「・・・ちっ」

ムカつく言い方に殴ってやろうかとも思ったが、ちょうどその時こなたの順番が来たのでおとなしく黙って見守ることとしよう。

<こなた視点>

いよいよ私の順番が来た。若干緊張しながら自分のレーンに進む。
とそこで、

「泉さん、頑張ってください」

「こなちゃん、ファイトー！」

「こなた、負けんじゃないわよー！」

それは応援席から声援を送る、3人の声。それを見て思わず顔を俯
いてしまった。

うわあ、恥ずかしいからやめて欲しいヨ……。声援を受けるほど
恥ずかしいものってない。

あゝ余計に緊張してきたし……。やばいなあ。

とさらに、今度は横から声が飛んできた。

「こなたさん、頑張ってください」

にっこりした顔で、優斗くんはこちらを見てくる。

他の選手から視線を浴びて、さらに縮こまる。居心地悪いったらな
いよ……。

そんなことも露知らず、優斗くんは私に声を掛けた後、隣の佑樹く
んを肘で突いた。

どうやら佑樹くんにも応援するように促しているらしい。佑樹くんは隣の優斗くんを嫌そうに睨みながら、私のほうに向き直って

「こなた、応援してるぞ」

と一言言っただけで顔を背けた。隣の優斗くんは先ほどにもまして一層ニヤニヤしながら佑樹くんをからかっている。

だけど私は、そんなどころじゃなかった。どの声援よりも1番声が小さかったのに心に響いた気がした。

1番恥ずかしくて、1番緊張を解いてくれる言葉だった。先ほどまで緊張と恥ずかしさでざわついていた心がすっかり落ち着いていた。程よい緊張を残し、余計な力みが抜けてくれた。

先生がスタートの合図を知らせるスターターピストルを構える。今もなお、応援席からはかがみ達の、そして真横からは優斗くんの声援が聞こえる。

その声援を背に、スタートの合図とともに走り出した。

<佑樹視点>

「おお、こなたさん速いね」

見事1着をとったこなた。それを賞賛する相変わらずうるせえ優斗。

「・・・ああ」

「なんでこなたさんって部活してないのかなあ」

「・・・俺が知るか」

「もったいないと思うんだよなあ。こなたさんならどの部活入ってもそれなりの成績取れそうなんなんだけどね」

「・・・そうだろうな」

「僕、どっかの部活に推薦してあげたいよ」

「・・・勝手にしとけ」

「佑樹はどの部活に入ったら、活躍すると思う？」

「・・・興味ねえよ」

「もうやる気なさすぎにも程があるよ、佑樹。テンション上げてこよ」

「これからお前と競争しなきゃなんねえっーのにテンションなんて上がるわけもねえだろうが、くだらねえ」

「えー僕は結構佑樹と対決するの楽しみんだけどな」

「むしろお前がなんでテンション上がってんのが不思議だってーの
第一隣でうるせえやつがずっと話しかけてきて、かなりうつとしい
上に、なぜにこんな陸上競技でテンション上がってんのかが本当に
意味が分からん。まあ知りたいという興味もねえがな。」

「分かったよ、佑樹」

「なにがだ？ 一生自分は黙って口を開かねえようにしとく方が身のためだってことが分かったのか？」

「本当は僕と競争して負けるのが嫌なんでしょ？」

「・・・なんだと？」

優斗に言われた言葉に声が低くなる。

「こなたさん達に負ける無様な姿は見せたくないもんねえ。だからやる気なかったっていうのを負けた時の言い訳にしようとしてるんでしょ？」

「違えよ、バカ」

「隠してもムダだってば、いーよ気にしなくても。他の人にもあるってそれぐらい」

「違えつつてんだろ」

「そんなに負けるのが嫌ならさ」

「おい、俺の話聞けやこら」

「僕がわざと負けてあげよーか？」

今の言葉は俺の怒りを頂点まで引き上げるものだった。

「・・・てめえ、良い度胸だ。さっきから言わせておけば調子に乗りやがって」

「へえ、じゃあ勝負でもしてみろ?」

「上等だ! 勝負でも何でもやってやろうじゃねえか」

「いいね、そうこなくっちゃ」

「余裕でいられんのも今の内だぜ。絶対え後悔させてやらあ」

睨みあいながらも、優斗は笑っていた。少々気に入らないがまあそれは競争に勝つことで怒りを収めるとしよう。

俺はこの時、自分で気付いていなかった。優斗が笑っていた理由は、俺も笑みを浮かべていたからだということを・・・この状況を楽しんでいたということ。

<優斗視点>

佑樹と本気で勝負したかった。そのために挑発してみると、まんまと乗ってくれた。相変わらずそういうところだけは単純で素直な反応をする。

自分達の順番が回ってきて、自分のレーンへと進めば、御誂え向きに佑樹が隣のレーンにいた。

先生がスターターピストルを構え、一瞬の静寂の後、スタートの合図が鳴り響いた。

最初に飛び出したのは僕。自身の瞬発力を活かしスタートダッシュ

に成功すると、一気にトップスピードにのる。

半分過ぎで次に仕掛けたのは佑樹。2着にいた佑樹はトップスピードにのると、一気に僕との差を縮めていく。

残り20m地点で僕は佑樹に並ばれていた。お互い力は全力で出してる。後はお互いの勝ちたいという気力に賭けるだけだった。

そして1着でゴールしたのは……佑樹。

後からこなたさんにタイムを聞けば、佑樹が10秒60、僕が10秒61だったらしい。だいたい男子高校生の全国トップの記録が10秒24なので僕も佑樹もかなりの好タイムなんだけど。0.01秒の差で負けたってのが惜しい限りだった。

「ちえっ、惜しかったなあ」

「あゝマジ負けるかと思った」

佑樹は勝ったというのに、微妙な表情をしていた。

「勝者がなに言ってんだか……。それは僕への当てつけかい？」

「ふん、そんなんじゃないよ。その瞬発力からのスタートダッシュとトップスピードにのるまでの速さはダントツだからな。俺にはねえ才能だ」

「そういう君こそ、トップスピードの維持時間は誰よりも勝ってるでしょ？・・・その維持時間が勝敗を分けた形になったんだし」

「どうだか、結局危なかったし。第一あん時は勝てるって言ったが、実際に俺でさえ勝てるなんざ思ってたよ」

「よく言うよ、勝ったんだからいいでしょ？」

「そういうお前からも悔しそうな感じがしねえんだけど」

「そうだ、惜しいと思う。だけど悔しいという気持ちはない。むしろ心に残る気持ちは楽しかったという思い。競争できて満足だという気持ちで心を包んでいる。」

「まあ、楽しかったしね」

「ふん、暢気なもんだ。勝負とおきながら楽しかったと言うのか」

「ん、でも事実だしさ」

佑樹は僕を一瞥すると、1位の旗のところへ歩いていった。

<みゆき視点>

佑樹さんと桜庭さんが競争していた同時刻、私は自分の走り高跳びの場にいた。その前方ではかがみさんが走り幅跳びを行っている。

「次、高良みゆき！」

私の順番が回ってくる。もうかなり高さを吊り上げているので脱落者も多い。

私も落ちてしまうかもしれないですね。

「ゆきちゃん、頑張って〜!」

「みゆきさんなら出来るよ!」

「みゆき〜頑張るなさいよ〜!」

「みゆき、頑張れよ〜」

「みゆきさん、ガンバ〜!」

佑樹さん達の声援が私の耳に届く。声のした方に顔を向ければ泉さん達が手を振っている光景が見える。

相変わらず佑樹さんは先ほどと同じように恥ずかしそうに俯いているみたいですね。応援をした他の4人とは違い、まるで声を出したことを後悔しているように見えるんですけど……。そんなに恥ずかしいのでしょうか？

まあ、今はそんなことはどうでもいい。だって自分は自分を応援している人達に応えて飛び越えなければならぬのだから。

私は一つ深呼吸して、十分な助走からバーを思いっきり飛んだ。

結果は・・・成功。

バーを飛び越えた後、見えたのは周りの驚いた顔と佑樹さんたちの笑顔と盛大な拍手だった。

体育祭 前編!! (後書き)

悪「どうも、こんにちわ」

佑「・・・暢気に挨拶してる場合かよ」

悪「いうことで今回は少し早めに投稿できました!」

佑「・・・こいつ、スルーしやがった」

み「でもなんで早めに投稿できたんですか?」

悪「ん〜?それは講義中及び講義ないときの時間に原稿をずっと書いてたから」

佑「講義無いときってのは分かるが講義中ってなんだよ」

悪「講義聞いているときやった」

こ「ダメ作者じゃん。成績やばいんじゃない?」

悪「あんなもん、兄貴のレポート写せば、大抵良つくしいんだって」

佑「やれやれ。・・・っていうかかがみとつかさどうした?」

悪「あゝ。今回ほとんど出番なかったからキレられてね〜・・・」

み「確かに出番がなかったですよねお2人共」

悪「次の話と体育祭終わったときの話で出番はたくさんあるって言ったのに」

こ「そうなの?」

悪「うんまあ・・・。暗い話だしあまりやりたくはないんだけどね。でも最初にこの小説書く時に全体的な流れを書いた原稿には結構重要な話組み込んで書くことにしてるし・・・」

佑「へえ、初耳だな」

悪「ん〜・・・でも今になってだけ正直その重要さを書き伝えられるか心配なんだよねえ。んでも次の話で書かなきゃどこで組み込めるかわかんないし・・・」

み「まだ迷ってるんですか?」

悪「まあ最終的にはやるんだろうけど。この体育祭の次の話ってら

きすたの他の先生の作品でもやってるの読んだんだけど・・・ちょっと重すぎかな。そういう話嫌いだし」

佑「大変なんだな」

悪「意外とね。まあ今日からは夏休みだし、なるべく覚悟決めて早めに投稿するんでよろしくお願いします」

体育祭 後編!!

時刻は過ぎて、昼休み。

クラス対抗で争う姿は霧散し、各々が今の今まで対戦相手であった別のクラスの友人と仲良く昼ご飯を食べている。

まあ敵という概念がない俺達にはあまりこの体育祭の争いは関係ないが、やはりどちらがより優れているのかというのは気になるらしく、友人同士で対決している姿が午前中の競技で見られた。

・・・本当に無駄なことをしているな。

俺は辺りを見回し、最後に目の前に広がる光景を目に写す。

「うおっ!? 佑樹くんこれ全部作ったの?」

「弁当を重箱で何段も作ってきてるやつなんて見たことないわよ・・・」

「どれもおいしそうだね♪」

「さすが佑樹さんですね」

「佑樹って昔から料理美味かったもんねえ」

それに比べてこいつらの平和さといったら・・・。なんか気が抜けるよな。

「弁当作って来たっていったのはお前らだろーが」

「それにしても作りすぎなのよ」

「どれだけ作ろーが俺の勝手だろ」

「っていうか絶対残るよね」

「残ったら残ったらで俺の夕飯になんだからいいんだよ」

「ふーん、そうなんだ。っていうかそれが目的なんじゃないの?」

「違えよ。・・・ああそれとつかさとみゆきはあんま食べるんじゃないかねえぞ」

「え?なんで?」

つかさがから揚げを頬張りながら質問をしてくる。

「そんなの当たり前だろーが。午後からリレーなんだからあんま食べすぎっと走れなくなんぞ」

午前中の競技もすべて終了し、残るは午後からの団体リレーのみになった。

こなた、かがみについては体育祭のでの競技は全部終わり、残るは俺とつかさとみゆきが出る団体リレーだけだ。

ちなみにかがみは2種目でちよいとひどい目にあってしたが・・・まあそれについて触れたら俺の命が危ないのでやめることにする。

それにひどさについてはつかさのハードル走も似たり寄ったりだったしな。

「そっかあ、昼からもリレーあるんだもんね」

「それでわざわざ指摘してくれたんですか？」

「ああ、ちゃんとやっとかねーと心配だったんでな」

「へー優しいんだね・・・佑樹くん」

「昔から世話焼きだからね」

こなたと優斗がニヤニヤ顔でこちらを見てくる。

「勘違いすんじゃないよ、俺は万一にも負けないようにしてえだけだ」

「またまたあ、そんな嘘言わなくてもいいんだよ？佑樹」

「っていうかツンデレ？」

「違えし、嘘も吐いてねえ！・・・つーか優斗、お前なんでここに居んだよ」

「いいじゃん、こなたさん達と一緒に居ると面白いことが絶えないからさ」

「ったく、いい加減にしろよ。なんでお前と一緒に飯なんか・・・」

「あはは、相変わらずひどいなあ・・・あ、一応言っておくけど」

「なんだよ？」

「午後からの男子リレーと男女混同リレー、あれ僕も出るからよろしく」

「ふうん・・・ってマジかよ。まさか第4走者だとか言わねえよな？」

「うん、どっちのリレーも第4走者だよ、もしかして佑樹も第4走者？」

「ほんと、今日は厄日だ・・・。こいつと3回も対戦することになるなんて・・・」

「厄日だなんてひどいなあ・・・。僕は君と対決できて楽しいけどね」

「黙ってろ」

はあと一つため息を吐き、立ち上がる。

「どこか行くんですか？佑樹さん」

「ん・・・ちょっと小便に行ってくる。すぐ戻るから心配はいらない」

むろん小便のため立ったわけではない。

校舎内には入らず、ぐるっと校舎の外を回って、体育館の裏側の倉庫の所まで歩いて倉庫の壁に背をつける。

そしてポケットからタバコを取り出して1本咥え、慣れた手つきでライターを取り出し火をつける。

白い煙が出て、独特な匂いが辺りを満たしていく。

「最近タバコなんてまったく吸ってなかったのにな・・・」

もう1年以上上手にしたことのなかったタバコは湿気って吸うに値しないものになっていたが、そうなったものでも捨てずにずっと持ち歩いていたのはこの時のためだったのかもしれない。

・・・そう、これはかなりイライラした時しかない行動だった。ではそれは誰に対してなのか・・・優斗だろうか。それもある。だが、今回ののは自分に対してのイライラが8割を占めていた。

不覚にも優斗と2回も対決できると知った時に持ってしまった自分の感情。

楽しみだと・・・優斗とまた対決することが出来ることに対して楽しみだと感じた自分にイライラが募った。まったくなんて意思の弱いことか・・・。

自嘲的な笑いが出た後で、ふうと息を吐く。
さてそろそろ戻らねば、あいつらが心配する・・・か。面倒事に発展する前に戻ろうか。

幸いタバコを2本矢継ぎ早に吸ったことでイライラをだいぶ抑えられるようになった。

俺は吸殻を壁際に追いやり、砂で隠すとその場を立ち去ろうとした。
・・・がその時、進行方向より声が聞こえてきた。

咄嗟に倉庫の壁際に寄り、進行方向から見えないように隠れる。

「ちっ、先生じゃねえだろうな？」

嫌な感じがしたがしかし、進行方向から来たのは先生ではなく一般生徒だった。

よく見れば見覚えがある。同じクラスの男女4人グループだ。クラスの中でもリーダー格に位置するやつらだ。めんどくさいので名前は覚えてないが。

しかし、今出て行って見つかったも面倒だな。

基本こなた達以外と会話をするのなくなった俺を、良く思っていない。

まあこちらとしては一向に構わないのだが関わるのもだるいので隠れてやり過ごそうと決めたその時、耳を疑う言葉が聞こえてきた。

「それよりあの柊さんのハードル走見た？」

「あゝあれな。すごいよな、全部倒すとか。運動神経なさすぎじゃん」

「D組のお姉さんは運動神経良いのにね」

「でも、今日の姉の方もひどくねーか？」

「それでもまだマシな方だって。だってお姉さんの方は勉強も出来るし、運動も妹より出来そうだし」

「だよな」

それは明らかにつかさに対しての悪口だった。しばらく4人は耳を塞ぎたくなるほどの罵詈雑言ばりぞうごんを言った後、その場を立ち去っていた。

「・・・」

どう表現すればいいのか分からない状況に頭が混乱しているが、一瞬でも早く皆の所へ戻ろうと心が叫んでいる。

急いで、皆のところへ走って戻る。皆のところまであと少しというところで横から人影が現れた。

「あ！ 佑くん、どこに居たの？」

「・・・つかさ」

それはつかさだった。

「どうしたの？ そんなに急いで来てたみたいだけど」

キョトンとした顔で俺を見上げる顔を見れば、まだあの悪口が本人に向けられた形跡はなかった。

どうやら無事だったようだな・・・。

「ああ、意外とトイレが混んでいてな。あんまり飯食べてないから、帰ってきて弁当残ってなかったら嫌だなと思って急いで戻ってきただけだ」

無事な様子は確認できたので、適当に話を作って、ごまかす。

「・・・そんなことで？」

「良いだろ、結構大事なことだぞ？」

「佑くんってば食いしん坊さんだね！」

「んじゃ行くぞ」

「ラジャー♪」

屈託ない笑顔を浮かべ、俺の後ろをついてくる、つかさ。俺は前を向いて心に誓いを立てた。

潰させねえぞ、この笑顔だけは。もう失うのはうんざりだからな。

<こなた視点>

いよいよ、体育祭最後の競技、男女混同リレーの順番が来た。ルールは簡単、男女交互に100mを走り、タイムを競う。男女共に2人ずつの4人構成で行われる。

それにこの競技の順番で総合優勝が決定する。私達は優勝するために必ず1位をとることが絶対条件だった。

そんな大事なリレーに私のクラスからは、佑樹くんとつかさ、それにみゆきさんの3人が名を連ねた。

またかがみ達のクラスからは優斗くんが選ばれている。

その佑樹くんと優斗くんは第4走者の待機場所で睨みあいをしている。

男子リレーでも同じ組で対戦した2人は1勝1敗で五分五分の結果となっていた。

このリレーで体育祭は終了なので文字通り最終決戦という感じなのだろう・・・2人にとっては。

もっともりレーは個人競技ではないので勝負とは言い難いものなんだけど・・・。

本人達がまったく気にしてないのでよしとしよう。

「まったく、あいつらまたケンカしてるの？」

私の隣に座っていたかがみが呆れたように呟く。

「そうだねーそれも尤もだけど、かがみんも寂しがり屋だよねえ」

「なっ、誰が寂しがり屋よ！？っていうかかがみんゆーな！」

「だってかがみずっとこっちに居るじゃん？クラス違うのに」

「うぐっ・・・そ、それは佑樹くん達がここに居たからよっ！でも佑樹くん達リレーで居なくなっちゃったし、私まで居なくなったら

こなたが1人に———ってなに笑ってんのよ、こなた！」

「いやゝナイスツンデレだね」

「ツンデレじゃないわよ！」

ゴツンッ

「うう・・・痛ぁ。暴力反対！」

「・・・もう1回くらっとく？」

「イエ、ナンデモアリマセン」

正直、笑顔を浮かべ拳を前に突き出しているかがみに恐怖を感じた。

そんなやり取りをしている内に、男女混同リレーの準備が済み、いよいよ始まろうとしていた。

それを見て、私もかがみもリレー観戦に集中する。

頑張れ、佑樹くん！

頑張れ、みゆきさん！

頑張れ、つかさ！！

<つかさ視点>

いよいよ始まる。

私の待機場所である第3走者の場所で深呼吸して集中する。

でもいくら集中力を高めても、思い浮かぶのは失敗する光景ばかり。

いや、弱気になっちゃダメだ、佑くんだって言ってた。やれば出来るんだ！

強い気持ちを持っていこう。

第1走者が位置につき、先生が構えたスターターピストルの引き金を引いた。

第1走者のゆきちゃんが飛び出す。素早い飛び出しでトップに立つと、リードを維持して第2走者に渡す。

第2走者は後続との差を縮められながらもなんとかトップを維持して、受け渡し地点までやってくる。

ここまでは順調だった。そう、ここまでは。

バトンを受け取り、走り出そうとしたその時バトンが手から滑り落ちた。

「うわわっ!？」

そしてそれに気付いた私は止まろうとしたが急には止まられず転んでしまった。

その瞬間に周りがザワザワし始める。

「うわぁ、やばくね？」

「あの子、ダサすぎなんだけど！」

「ドジにも程があんだろ」

周りから嘲笑が聞こえてくる。

後続に居たメンバーも追いついてきた。

もう、ヤダ。ここから動きたくない……。誰か助けて。

「まだリレーは終わってねえぞ、つかさ!!」

「・・・佑くん」

「あきらめんな! あきらめんじゃねえ！」

佑くんは必死の表情でこちらを見て、私を奮い立たせようとしている。

「なにあれ、いきなり大声出しちゃって」

「必死すぎんだろ」

「だよねー。どんだけ優勝したいんだって感じ？」

今度は佑くんを罵倒する声が聞こえる。

なんで？何で佑くんが笑われているの？佑くんはなににも悪くない。悪くないよ……。

……そっか、私がこんなところで動かないから悪いんだ。佑くんは私を心配して声を出しただけ。

バトンを落とした、1人で転んだ、転んで動かなかった私が悪いんだ。

佑くんは悪くない、佑くんを悪く言わないで！

私はバトンを拾い上げ、立ち上がるとよろよろと走り始める。

私が頑張るんだ。佑くん……周りに迷惑をかけないために。

<佑樹視点>

「悪いな、優斗」

「んゝ、なにが？」

「お前との勝負の決着をつける場合ではないようなのでな。このリレー絶対勝たせてもらう」

「……」

「つかさへの罵倒を減らすため、絶対的1位が必要になった。個人的に優勝は興味はないが、今はそんなことを言ってる場合じゃない」

「確かに、僕もあの罵倒には腹が立ってるよ。許されるならこの手で全員潰してやりたいぐらいだよ。・・・でも、だからって勝ちを譲る気はないねえ」

「ふん、そう言うとは思ってたよ」

「どうしても勝ちたいのなら・・・」

優斗のクラスの第3走者が先に到着し、バトンを受け渡す。

「この状況から僕を抜いてみなよ！」

「・・・ああ、そうさせてもらうぜ」

一足遅れてつかさが到着する。

「「佑くん！／つかさ」」

互いの名を呼ぶ声が重なったと同時に、バトンを受け取り走り出す。

最後の競技だ。後も先もねえ、最初から全力だ！
数m前を走る優斗に向かって走る。

俺も優斗もトップスピードで走りぬけた。

そして結果は・・・

優斗1位、俺が2位という結果だった。

「ちっ、負けた・・・か」

「あゝあ、何か消化不良だ。完全に楽しめなかったなあ・・・」

「・・・よく言うぜ」

「納得いかないんだよ・・・勝ったけど喜べる気分じゃない」

「・・・。ちっとかさの所に行ってくるわ」

そのまま俺はつかさと合流し、落ち込むつかさを慰めつつ、閉会式の間ずっと傍を離れなかった。

結局俺達は総合2位という結果に終わった。

閉会式が終わった後は後片付けがあり、その片付けのときもずっとつかさの横に居た。

「つかささん、このビニールシートを倉庫に置いてきてくれませんか？」

「うん、分かったよ！今行ってくるね」

落ち込んで俯くことは無くなり、笑顔を浮かべるようになったが無視してるのは一目瞭然だ。

「つかさ、俺も着いていくよ」

「うん、よろしくね」

倉庫までの道程をつかさの速度に合わせゆっくり歩く。

「佑くん、最後惜しかったね」

「まったくだ、しかしまさか優斗に負け越すとは・・・」

「1勝2敗だっけ？」

「ああ、次勝負する機会があれば絶対完璧に勝ってやる」

「その意気だ」

とその時、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「何なんだよっ！あいつ、途中で転びやがって」

「あゝあ、お姉さんの方がうちのクラスだったなら良かったのに」

「あんなトロイ奴がなんで同じクラスなんだろうな」

「これで勝てたら、一生の思い出になったのにね」

「ほんと、余計なことしてくれたわ」

・・・なんだ、これは。こいつらは何を言っている。

俺はその声を聞きながら、つかさの方を見る。

つかさは顔を下に俯き、微かにだが体が震えていた。

「・・・つかさ」

「行こっ、早く置きに言って戻らなきゃ」

「・・・おう」

若干の不安は覚えるが、まあいざとなれば・・・。

俺達はその声のする方向にある倉庫へとまた歩き出した。角を曲がると同じクラスだと思われる5人のメンバーが話をしていたが向こうもこちらに気付いたようだ。

「出たよ、噂の元凶が」

「えゝまさかのお守りつき？」

「1人じゃなんにも出来ないってか？」

「ありえるゝだってドジだから片付けも出来なさそゝだもん」

「少しは自分の足で動けって話じゃね？」

俺はなんとか我慢してビニールシートを置くと来た道に戻る。

「俺らのことは無視かよ？」

「自分のせいで負けてしまっでごめんなさいとか言って欲しいよねえ」

「姫神も大変だよなゝ、こんなドジのお守りとか」

「だね。でも姫神くん、仕事できるし柊さんと居たら五分五分になるんじゃない？」

拳を硬く握り、我慢する。

まずいな・・・そろそろ我慢の限界がきそうだ。こんなやつらに手を出すのは癪だが。

そう思ったとき、5人のうちの1人がつかさの肩を掴んで思いっきり引っ張った。

つかさはいきなり引っ張られた力により仰向けに転んでしまう。

俺は反射的にしゃがんでつかさを抱き起こす。

「大丈夫か、つかさ」

「・・・」

「あっはは、いい気味だね」

「つか受身もとれねえのかよ」

「しょーがないよ、だってドジだもん」

そこで俺の中の何かが外れるのが分かった。

俺はつかさを立たせると、1番手前に居た・・・つかさを転ばせた男子を校舎の壁に蹴りつける。

「がはっ・・・」

モロに背中から打ちつけたせいで男子は肺から一気に空気が吐き出される。

俺はそのまま咳き込む男子を壁に押し付け襟元を掴んで少し持ち上げる。

「姫神っ、てめえ！」

「姫神くん、放して！」

体が浮き上がり襟元を掴まれて首が絞まっていることで男子が苦しんでる姿を見て、他の仲間が慌てて助けに入ろうとする。

「てめえら、そこを動いたら………殺すぞ」

「……っ」

一睨みしてそう呟けば、仲間の動きが完全に停止する。

「やめて、佑くん！」

そんな俺を止めたのはつかさだった。つかさは動揺する俺に近づき、男子を持ち上げている腕に触れる。

「私なら……大丈夫だから。だから戻ろう？」

「……ああ」

俺は男子を降ろし、駆け寄ってきた、仲間も含めて見渡すと、

「命拾いしたな。次……はないぞ？」

そう脅して、つかさと共に歩いて戻る。

その場に残ったのは、未だに咳き込んで座り込む男子と恐怖で身を凍らせたように動かない4人だけだった。

しばらく来た道に戻りながら、お互い気まずくて黙っているとつかさが

「私、ちょっとトイレ寄ってから戻るよ」

「・・・しかし」

「大丈夫、すぐに戻るから・・・ね？」

「————・・・っ」

俺は思わず目を見開いて、絶句してしまう。

「・・・分かった、早めに戻ってこいよ？」

「うん、了解なのだ♪」

つかさは手を大きく振って校舎の中に入ってしまった。

あいつ・・・なんて目してやがる。なんでもかんでも1人で抱え込みやがって。

絶望的なまでの諦観の目。つかさがしていたのはそういう目だ。かつての俺もそうだったが自分が悪いんだと、自分がヘマをするか

ら悪いんだと自分1人抱え込んで悩んで周りになにも相談しなかったあのときの俺に似てる。

それに今のあいつには俺達の言葉は届かねえ……。だとしたらアレを待つしかねえか……。

こっからは我慢勝負だな。

俺は上を向いた。今日の空も暗く、荒れていた。

<つかさ視点>

私のせいだ、悪いのは私なんだ……。私がドジだから、皆に迷惑をかける。佑くん達に心配をかけるんだ……。

私さえ居なければ……。みんなは笑っていられるのに。

そうだ、私が変わればいいんだ……。なんでもして迷惑をかけないように出来る子に。

頑張ろう、きっとやれば出来るはずだから……。

私はそう決意して校舎の外へと出る。

そこでふと空を見上げる。

今日の空は暗く、荒れ始めていた。

体育祭 後編!! (後書き)

悪「どうも、今日は体育祭の後片付けでみんな居ないので私1人で後書きを進行します! とりあえずまあこの小説の中で最長のはなしだとおもわれるこの話。

周りから見ればかなり少ないほうかもしれませんが・・・自分からしてみれば長すぎかなあと思います。一応話をかなり入れましたがメインはつかさとなっています。佑樹も長かったけどまあ気にしてません。

次回からつかさの話となりますが・・・まずは佑樹。

次回より佑樹視点がなくなり、あくまで別視点での登場のみとなる予定です。

メインはつかさとかがみ。この2人の感情を表していければと思っています。

では次話は1週間後を予定しているので、これにて失礼します。

悪意の言葉（前書き）

予定より早く出来たので投稿します。

悪意の言葉

<かがみ視点>

おかしい・・・体育祭の後片付けを終えたときからつかさと佑樹くんの様子がおかしい。

悲壮感が浮かんだ顔をしたかと思えば、なにか覚悟を決めたような顔をするしそう見ていれば、

いきなり勉強し始めるし、朝早起きとかするし・・・。

いや、後半の2つはいいことだから別に気にしてないんだけど。

佑樹くんも佑樹くんでききなり「何か言ってなかったか」とか「今何してる」とか帰り道で分かれてすぐつかさのことについて電話が1回掛かってきてた。その1回きりだったが、明らかに不自然だった。

かと思えば、こちらからの電話には出なかったりするし、家に電話してみれば昨日から用事があるからと言って寝る以外は家に居ないという。

でも、一番気になるのはつかさの態度。

なんていうか・・・変。会話が少ないというより上の空の状態だ。

それは私だけではなく家族全員に対してだ。なにかあったのかと聞いても答えないし、というより大丈夫だと笑うから深く突っ込んで聞くことも出来ない。

仕方ないのでつかさではなく佑樹くんに聞こうと考えたが・・・朝の登校時の集合場所に佑樹くんは現れなかった。こなたによれば寝

坊したと連絡が来たらしいのだが・・・。

「佑樹さんが寝坊なんて珍しいですね」

「だよねー、どうしたんだろう？」

「そうよね・・・」

本当にどうしたんだろう佑樹くんもつかさも。
私はちらっと横に視線を向ける。

「つかささんは何か知っていませんか？」

「・・・」

「つかさ？」

「ふえ！？・・・なに？」

「どしたのつかさ？さっきから上の空だけど」

「あ、ううん、なんでもないよ・・・なんでもない」

「そう？」

「うん、大丈夫！で、なんだっけ？」

「あ・・・えっと、佑樹さんが寝坊なんて珍しいですからどうしたのかと気になったんです。ですのでつかささんが知ってるか聞いて

みたのですが・・・」

上靴に履き替えながら、つかさに説明するみゆきを見ながらため息を吐く。

ほんと・・・どうしたんだろうな、つかさのやつ。

ふとそこで何かの視線を感じ、そちらに視線を向ける。

向けた先に写るのは同学年と思わしき女子生徒。こちら側に視線を向け、ひそひそと何か喋っている。

さらにその視線を辿ると、先にいるのはどうやらつかさみたいだ。嫌な予感を抱えつつも、3人が上靴を履いたことを確認して教室に向かつて歩き出す。

しかし、その足取りは教室に近づくとびに重くなっていった。

至る所から奇異の視線が集められ、バカにしたような声が聞こえてきたからだ。

「おい、来たぜ。E組の役立たず」

「かわいそうになく、アイツ居なかったら優勝できてたのに」

「まあ、そのお陰でウチら優勝できたし？」

「だよねー、ほんととウチらのクラスに柊さん居なくて良かったよ」

つかさは聞こえてる声に顔を俯かせ、今にも泣きそうな表情をしている。

なるほど・・・こういうことか。一昨日からおかしかった理由は。私は拳を硬く握り締めながら、我慢する。

もしこれが一昨日からあったのだとしたら、つかさと佑樹くんは大分我慢したに違いない・・・。

その我慢を私が破るわけにいかない。ここは我慢しなくてはならない。

みゆきとこなたはつかさをなんとか励まそうとしているがあまり効果はないようだ。むしろ逆効果と良いかも知れない。私はつかさに一言二言声をかけ、自分のクラスへ向かうつかさ達を見送った。

<つかさ視点>

教室まで歩いてくる間に、思ったとおりの言葉を何度も言われた。

それについて何か感じることはほとんどない、やっぱりかという思いの方が多かった。多少悲しくはなるが一昨日同じようなことがあったからか少しは耐性がついているらしい。

それよりもこなちゃんとうきちゃんに慰められている時の方が悲しみは大きかった。

ああ、やっぱり私は誰かの頼りにはならないんだと。心配をかけるだけなんだと思い知らされた。

せっかく人に頼ることなく、1人でなんでもこなしていければきつといつかは頼りにしてくれるだろうと答えを出したのに・・・いきなりそれを打ち砕かれた気分だった。

憂鬱な気分になりながら、自分のクラスのドアを開ける。

瞬間、クラスの皆がざわめいた。私のことを確認すると私の後ろに

視線を向ける。

どうやら佑くんの姿を探しているらしい。一昨日のあの行動を聞けば、当然か……。

その場の状況だけではなく、行動だけで未来の状況にすら影響を及ぼす佑くんはすごい。

そう考えたとき、強烈な劣等感となって自分に降りかかる。

ダメ……一々考えてもしかたないんだ。今の私にできるのは一刻も早くみんなに追いつくことだけだから。そうすれば大丈夫、私も堂々と隣に立てるんだ。

「おいおい、よくもノコノコと来れたもんだなあ？」

「ほんと、自分が何したのか忘れたわけじゃないでしょうね」

佑くんが居ないことを確認して、私に愚痴を零す男女2人。

「つかさは何も……」

「こなちゃん……私は大丈夫だから」

「……」

こなちゃんは私の言葉に反応して、渋々といった感じだけど引き下がってくれた。

しかし、罵倒が止まることはない。

「俺らのクラスが“柊姉”だったら良かったのにな」

「あ、それ言えてる!“お姉さん”の方がまだマシじゃない？」

お姉ちゃんは・・・関係ないよ。関係ない・・・。

「双子でこんなに違うもんかね？」

「いやいや、もしかしたら双子だからこそじゃね？」

「どういうこと？」

「双子だし、“姉”にいい所全部取られたってことだよ」

「あゝ！なるほどね、そういうこと」

「それってつまり・・・出廻らしてこと？」

「あはははっ、それ的を得てる！」

「・・・っ」

「さっきから言わせておけばっ・・・」

ガラッ

「くあゝ・・・眠い」

こなちゃんが1歩踏み出したその時、教室のドアがいきなり開いて、そんな暢気な声がまわりに響く。

全員が全員ドアの方向に視線が向かう。その先に居たのは・・・

「ん？おい、お前らなんでこんなところに突っ立ってんだよ」

頭をガシガシと掻きながら、いかにも眠くてだるいと言う感じの佑くんだった。

佑くんは眠そうな目を教室中に向けた後、最後に私で視線を止める。

「よお、つかさ」

「お、おはよう・・・」

「こなたとみゆきもおはよう」

「おはようございます・・・」

「おはよう・・・」

挨拶された3人も含め、クラス全員が固まっていた。私達は虚を突かれて、悪口を言っていたメンバーは青ざめながら。

「つかさ、何かあったのか？」

未だに眠そうな様子を隠すことなく、そう聞いてきた佑くん。

そんなの・・・私の答えなんて決まっている。

「ううん、なんでもないよ？」

「・・・そっか」

佑くんは私の言葉を聞いて、そう返事するとそのまま自分の席に着く。

それと同時にチャイムがなり、黒い先生が教室に入ってくる。

「それじゃ朝の・・・ってお前らなにしてんねん、そんな突っ立ったままで。早く席に座りや？」

その言葉で皆が自分の席に座る。私達も一旦顔を合わせると自分の席に向かった。

<こなた視点>

その後、午前中は佑樹くんがずっと教室に居たのでなにも起こることはなかった。もつとも佑樹くんはずっと寝ていたんだけど・・・。昼休みになって、かがみと優斗くんは私達を屋上で食べようと誘いにやってきた。

すでに休み時間に遊びに来たかがみや優斗くんには朝の騒動については説明してあるので、その話し合いもかねてだと思われる。

なお佑樹くんは「弁当忘れた」と眠そうな目を擦りながら、購買に向かっていった。屋上で食べるからと告げれば、手をひらひらさせていたので一緒に食べる気はあるらしい・・・。

「で、なんて言ってたの？」

若干かがみが怒り気味で私達に詳しい説明を促す。隣の優斗くんも少々怒りのオーラを発していたが何も言うことなく、ただ黙々と私達の話聞き続けた。

「アイツラ！好き勝手なことを・・・」

「まあまあ、落ち着いてかがみさん。一時の感情で動いたら後悔することになるよ。まずはそのリーダー格をなんとかすることを考えなきゃいけないんだ」

かがみは怒りに体が震え、顔が強張っている。それを優斗くんが冷静に指摘して落ち着かせている。

「でも、どうすればいいのでしょうか・・・」

「なにか改めになるきっかけとかが欲しいね。このままじゃ埒があかないよ」

「そんなもん、さっさと謝らればいいのよ！言っていたことは事実なんでしょ!?!」

かがみも相当頭に血が上っている。つかさをどれだけ大切に思っているかが見える。

「そんなことをしても意味がないよ、かがみさん」

「なんでよ!?! こんな簡単なこと早くする方が良いに決まっているわ!」

「・・・力で抑え込むやり方でも堂々とした悪口は止まるだろうね」

「どういうことです?」

「陰からの悪口は減らないどころかむしろ増えるということさ」

「それでもっ!」

「いい加減、落ち着いてもらわないと困るね。僕だってこれは見逃せない事件だよ。一刻も早く解決することが大切だ。だけど人とは狡猾い生き物だ。そのやり方じゃ相手を特定されないやり方で同じようなことをされても追求できなくなる」

「・・・」

「いいかい？心配なのは君だけじゃない。僕らだって心配だ。そこは覚えたい欲しい」

「・・・分かったわよ」

「それで、当の本人はどうなのかな？」

こなたの一言で、今まで会話に入ることの無かったつかさに視線が向かう。

「わ、私は、別に大丈夫だし・・・悪いのは私だから」

「あんたねえ、自分で状況分かってんの！？」

「分かってるよ、お姉ちゃん。でもみんなの気持ちも分かるから・・・」

「つかさ！そんなこ「ちょっと、トイレ行って来るね」——・・・ちよ、こら待ちなさい！」

つかさはトイレに行くと言ってかがみの言葉をさえぎると、そのまま静止の言葉も聞かず出口のドアから出て行く。

そのかわりに佑樹くんが入ってくる。佑樹くんは金網に拠りかかるように座ると買ってきた購買のパンを取り出しムシヤムシヤと食べ始める。

その場に入ってきた佑樹くんは怒りと困惑でぴりぴりしたこの空間でも平然としていてなにか違和感を感じる。

無言でパンを食べながら、コーヒー牛乳を飲むその堂々とした姿に一同固まってしまう。

この姿を見ていると、つかさのいじめについて気付いているのか疑問に思うところだ。

やがて全てを食べ終わると、ゆっくりと腰を上げ屋上から立ち去ろうとする。

「佑樹くん、ちょっと待ちなさい！」

「あ？なんだよ」

かがみが声を出して佑樹くんを呼び止める。

「一昨日、電話かけてきたのはなんだったの？それに用事だって言ってたけどなにしてたの？今日の朝なんで遅刻したのか全部答えて」

「んな一遍に質問されても答えられねえよ」

質問の多さに苦笑いしていた佑樹くんだったけど、かがみの真剣な眼差しを見て、ふうと息を吐いて、質問の答えを返す。

「用事ってのはバイトだ。前に行ったカラオケの亜紀さんに無理な頼まれ事されて、1日バイトの休みの奴のかわりにやってたんだよ。んで疲れて帰ってきて速攻寝ただけで寝坊しちゃったんだ」

「電話は？」

「電話は朝の悪口の時と同じだ。後片付けのときにちっとやらかしちまった奴らが居たからな」

「なんでその電話のときに言わないのよ？」

「それは諸事情ってとこだ。俺だって心配はしてる、実際朝の一件は俺が遅刻さえしなきゃ起きなかっただろうしな。後悔もしてるし、これでも少しは責任感じてんだよ」

佑樹くんはそれだけ言い終えると、屋上から足早に立ち去った。私達はそんな佑樹くんをただ見送ることしかできなかった。

<つかさ視点>

トイレに行った私は、あの後屋上に戻る気が起きなかったから中庭のベンチに座って、時間を潰すことにした。

正直、あんなに激昂してるお姉ちゃんは見たことが無かった。それも私を大事に思っているからこそだとは分かっているけど、今の私にとっては余計なお世話だと思う。

私だって、この状況を切り抜けることぐらいできる……。私だって、私だって足手まといにはならないのに……。なんで。

「こんなとこに居たのか、つかさ」

「・・・佑くん」

私がそんなことを思っている時に佑くんは現れた。

「なんでここに居るの？」

「飯も食い終わったからな。食後の散歩だ」

嘘・・・いつもはそんなことしないのに・・・。

「お前・・・なんか言いたいことねえか？」

「言いたいこと？言いたいことなんて1つもないけど・・・」

「・・・そっか」

佑くんはその言葉を聞いて、満足したのか私の隣に座って大きく背伸びをした。

私はその姿を見て、率直な感想を口にする。

「なんだか今日は・・・」

「ん？」

「朝から眠そうだね？佑くん」

「ああ、昨日バイトでちよつと大変でなく。ちよいと寝不足だ」

「大変ってどれぐらい？」

「んゝかれこれ10時間ちよいかな？こき使いすぎなんだってマジ

で」

「10時間も！？・・・想像しただけで嫌だね」

「ああ、ほんっと大変だったわ」

しばらくは平凡な会話を交わしていたけど、自分の弁当箱が屋上に置きっぱなしだったのを思い出し、立ち上がる。いきなり立ち上がった私に佑くんは驚いた表情をして、

「ど、どうかしたのか？つかさ」

「屋上に弁当箱置いてきたから取りにいかなきや。佑くんはどうする？」

「んゝ・・・俺は先に教室に戻ってるわ」

「そっか・・・じゃあまた後でね！」

「おい、転ぶんじゃないぞ？」

「うん、大丈夫ゝ！」

駆け足で屋上へ向かう私を心配しながらも笑顔を見せて、手を振る佑くんにも大きく手を振って、その場を後にする。

私はこの時、間違いなく素の自分を出せてた。この素の姿こそ私のいい所だということをまだ気付けない。

・・・そして、私が中庭を立ち去った後、今まで振っていた手を下ろし少し悲しそうな顔で「まだ・・・ダメか」と呟いていたことも知らなかった。

<みゆき視点>

午後の時間も佑樹さんがつかささんに話しかけていたことでなんの問題も起こることなく、放課後になった。

しかし今日の佑樹さんは少し・・・いえ、大分おかしかった。

私達がつかささんのいじめについて協議していというのに参加せず、ただ同じく話に加わることもなかったつかささんと会話をしていただけだった。

そう、まるでいつも通り。普段の日常と変わらない行動をそれが義務だとも言わんばかりに実行しているようなそんな違和感を感じた。

さらにその違和感を確実にするように、校門の前までは一緒に歩いていたのに「用事あるからじゃあな」

と言って、いつもの帰り道とは反対方向の道へと歩いていってしまった。

「あいつ、つかさが心配じゃないのかしら!？」

「まあまあ、かがみさん落ち着いて・・・」

今日の昼から恒例化となった、かがみさんの激昂を止める役を優斗

さんは行っている。

あくまで落ち着かせるだけで、優斗さん自身もあまり良い気分ではないようですが……。

というより小学校から同じ学校だった優斗さんでも今回の佑樹さんの行動は理解の範疇を超えているようだった。一応いじめについては気付いているみたいなのですが、そのいじめに対してなんらかの抑制をさせるといった行動はまったくとらない佑樹さん。そんな佑樹さんに困惑していると優斗さんは言った。

「これまでの佑樹だったら、仲間がこんな状況に陥ったら行動を起こしてるんだ。でも今回はなにもない。僕にも佑樹が何を思って、何を感じているのかまったく分からない……」

「たしかに私達で対策について話していても会話にまったく入ってこないわね、アイツ」

「気付いていないというわけではないですしね……。屋上を出て行った時の口ぶりから察すると、明らかに気付いているようでしたし」

「それでいて、なにも行動を起こさないってどういうことかしら？」

「何もしなくてもただ居るだけで悪口を言う抑制にはなってるけどね。でも本当になにを考えてるんだろう？ 優斗くんが分からないんじゃないでしょうか……」

結局佑樹さんが何を考えているかという答えは出ず、いじめに対する具体的な対策についてもはっきりしないまま、駅に到着し解散することになった。

私はかがみさんと帰り際について一言も喋ることのなかったつかさんを見送って歩き出す。

「結局具体的な対策は出ませんでしたか。このまま野放しにして状況が悪化しなければいいのですが・・・」

私は嫌な予感を覚えつつも、それを振り払うように前を向く。

しかし、その嫌な予感は次の日、早速起こってしまい、思った以上に状況が悪くなり私達が後悔することなどをまだこの時は全然予想していなかった。

悪意の言葉（後書き）

悪「状況悪化中なので今日も私が担当します。

今回の話は悪口という点で入っていきます。

うまく悪口を表現し切れているかは分かりません。あまり好き好んで書いているわけではないので、そこらへんで違和感があれば報告いただきたいです。

次回よりエスカレートしていきます。

自分の考えうる分だけひどくなるとは思いますがこれもまたどこまでひどく表現できるかはわかりません。

それと次回新キャラ登場です。体育祭から登場の優斗同様、佑樹の過去を知るものの登場となります。

ぜひそちらもお楽しみに。

ほんとこの話書いていても楽しくないのですが・・・あと2〜3話ほど続く予定なのでよろしくです。

ちよいとテンションあがらないのでこれで失礼します

悲しい覚悟

<かがみ視点>

いじめを確認した翌日。いつものごとく朝起きて居間に入れば、つかさがすでに起きていた。

「あ、おはようお姉ちゃん♪」

「お・・・おはようつかさ」

つかさはキッチンに立って、2人分の弁当を作っていた。
昨日の元気のなさとは裏腹に明るい声で笑顔を浮かべるつかさに疑問を感じる。

「つかさ・・・？」

「ん？なあにお姉ちゃん？」

なにかあったのかは分からないけど、いきなり元気になったつかさに訳が分からない私は恐る恐るといった感じで尋ねる。

聞こえてきた返事には昨日までの憂いを帯びた類のものが感じられない。

「あ・・・なんでもない」

首を傾げながらも、大して話す話題も見つけられなかった私はそう

答えるしかない。

「へんなお姉ちゃん・・・」

と、つかさは言いながら弁当におかずを詰め込んでいく。

なにかひっかかるけど・・・まあいっか。元気取り戻したみたいだし。

若干の違和感を感じつつも、とりあえず元気を取り戻したつかさの姿を見て、そんな違和感を心の中から消し去った。

「あゝ・・・だりい」

「ちょっと、しっかりしなさいよアンタ」

いかにも寝不足だと言わんばかりの態度で朝の集合場所に現れた佑樹くんはそんな言葉を呟く。私は呆れながらもそれに活を入れるためにも声を発した

「うるせえな、俺がだるそうにしてなんか迷惑かけたかよ」

「目の前でそんなだるそうな姿見せられることが迷惑じゃなかったらいったい何なのかしらね？」

「それにしてもほんとにだるそうだねえ、佑くん」

心配しなくても良いのに、つかさはだるそうに歩く佑樹くんを気に

かける。

「ちっ、ほんとに一昨日バイトの休みに緊急で入ったのが間違いだったぞ……」

「私もだるい……」

佑樹くんのだるそうな姿に連鎖されたのか、今度はこなたまでもがだらけ始めた。

「泉さんも、佑樹さんもしっかりしてくださいね？」

「そーだよ？つかささんの問題はまだ解決してないんだからさ、2人にだらけてもらっちゃ困るんだけどね？」

「あゝはいはい」

「それは、分かってるよ。私もそれについては頭にきてるし」

そう言って、硬く手を握るこなた。それに続いて優斗くんも表情を硬くして、

「でも、こっちからできる対処ってのは限られてるしね。いつそかがみさんの言うとおり力で屈服するのもいいかな？」

のんびりしたような口調だが、発せられる言葉には威圧感にも似た感覚をもたせる。

周りの私達にまで広がるプレッシャーに言葉を続けることが出来ない……。

残念ながらそれが優斗くんと私達の違い。相手を気圧するような威圧感を放つ。どこで培ったかは分からないけど、生半可な素人には出せない存在感を放っている。そんな優斗くんに発言できる人なんてそうはいないだろう。

まあ世の中に例外っているんだろうけど・・・なんでそんなやつが私の隣にいるのかしらねえ。ほんと偶然ってあるものね。で、その例外って言うのが・・・

「そいつは解せねえ手段だな」

当然、佑樹くんなんだけどね。佑樹くんは鞆を背にかけ直して、

「力で押し潰した所で、潰したやつらが納得するはずもねえ。むしろ活発化する。それはお前ならなによりもよくわかってんだろ。・・・なあ優斗」

優斗くんに目を向ける。わずかに名前を呼ぶ声が低くなったことに私達も気付いた。

「それでも、それをしなきゃいけないこともあるでしょうに。納得できないやつらがいるならそれごと潰すってのもありだと思うけどな？」

「それじゃ意味ねえって言ってんだろーが。しかもそれごと潰すのは無理があんだろ」

お互い物騒な言葉を出してはいるが、全てはつかさのことを思っているの発言だと分かっているの、それにわざわざ突っ込むことはしない。

・・・というよりこの会話に入れるのなら苦労してないし。

「なんでさく意味ないのは薄々分かるけど、無理ってことはないんじゃないのかな？」

「・・・光で影を潰そうとしても影は消えねえ。より強い光を作れば、それと同じだけの影が出来る。今回の話はそれと同じだ。根元を変えない限り、この問題に決着はねえ」

「そりゃそうだけどね・・・。そんな方法があるわけ？」

「それが分かんないから相談してるんだろ。俺はとりあえず力で解決しようとするのをやめろと言っているんだ」

「・・・分かったよ。んでもそれじゃどうする？」

一先ず両者の言い合いが済み、互いから発せられていた圧迫感がなくなる。

しかし、一度ずれた空気は元には戻らず、またもや対策も出ずに学校に着いてしまう。

玄関まで歩くうちに、多数の視線を浴びるが佑樹くんが傍に居ることで誰も悪口を言ってくるもない。

ほんとに何もしてないのに・・・。居るだけで抑制になるってどういうことかしら？

まあこっちはそれで助かってはいるんだけど・・・。

「・・・・・・・・ツ」

靴を履いて、待っているとつかさが出てくる。

「つかさ、どうかしたの？」

と、私はそそくさと歩いてきたつかさに問いかける。

「あはは・・・靴全部履けてなくて転びそうになっちゃった」

「なにやってんのよ？ほら、肩貸してあげるからちゃんと履き直しなよ」

「えへへ、ありがとうお姉ちゃん」

肩に手を置いて、靴を履きな姿勢を見ながら、呆れつつもそれを嫌と思えない私はお人好しだなあと頬を掻く。

「いやあほんとに微笑ましい光景だね、佑樹」

「・・・なぜ俺に振る？」

「んゝ・・・なんとなく？」

「なんとなくで振るな。つかそんなの俺には関係ない」

後ろからそんな会話が聞こえたけど・・・まあ気にしないようにしよう。

私はそんなことを考えていたせいでつかさがそつとスカートのポケットになにかを入れていたことに気付かなかった。

<つかさ視点>

お昼休みになった。午前中は佑くんのお陰でなにも起こらない……。

それより心配だったのはこの昼休みのこと。私のいじめへの対策の会議の他に嫌なことがあった。

朝の下駄箱に入れられていた呼び出しの手紙のことだ。

手紙には誰にも気付かれないようにして体育館裏のところに来いと書いてあった。

もちろん体育祭のことだと分かっている。誰にも気付かれないようにというのは佑くん対策なのだろう。

正直不安はたくさんある。怖いしできれば行きたくない。でもこれも試練なんだと割り切る。

お姉ちゃんや佑くんが居なくても出来るってことを証明するチャンスだ。お姉ちゃんなんか居なくても……佑くんなんか居なくても出来るんだから。私にお姉ちゃんの力は要らない。お姉ちゃんの力を借りなくても出来る……！

私はそう考えながら、前に居るお姉ちゃん達を見る。今日もどうやら屋上で食べるらしい。

だけどその横では……

「ねえねえ、食堂行こーよ」

「なんでだよ？」

「だって佑樹、弁当忘れたんでしょ？ 僕も忘れたしさ、食堂で食べよーよ」

「却下だな。俺はパンとコーヒー牛乳さえあれば十分だ」

「やった、じゃあ食堂へ行こう！」

「おい人の話を聞けっ、こら」

まったく佑くんの話聞く気がない優斗くん。

「それじゃレッツゴー！」

「おい、こら放せ！優斗、こら！！てめえ、襟元引っ張んじゃねえ！」

「じゃあ、また後でね」

「食堂なんか行きたくねえよ！放せつつってんだろ！」

残されたのは好奇心な視線と佑くんの叫びの去った静けさだった。

佑くんは可哀想だけど、勘の鋭い佑くんが居なくなったのは良かったと思う私であった。

「まったく、昼は話し合うつて言ってあったのにっ！」

「まあまあ落ち着いてください、かがみさん」

屋上についた時、お姉ちゃんは怒鳴っていた。どうやら話し合おうとしていたのに、2人が来ないことについて怒っているようだ。

「これが落ち着いていられるわけないでしょ!？」

「それはそうですが・・・」

「優斗くんはそうだけど、佑樹くんは仕方ないんじゃない？かがみ」

「そんなの関係ないわよ！弁当作ってくればいい話じゃない」

「いや、それは本人にも都合つてものがあるんじゃないかな？」

こなちゃんがお姉ちゃんを宥めているうちに、私はゆきちゃんに声をかける。

「ちょっとトイレに行ってくるね？」

「あ、はい。早めに戻ってきてくださいね」

「うん、分かった」

私は手紙に書いてあったとおりに指定された場所に向かった。

「やっと来たな、おい」

そこで待っていたのは体育祭のときの5人組。

「な、何か用ですか・・・？」

「用？用ならお前も分かってんだろ？」

「・・・」

「私達はね、別に柊さんをいじめてるわけじゃないんだよ？1度失敗したことを謝ってくればいいんだよ」

「・・・謝る？」

「クラスの全員の前で『こんなドジですみません』って土下座すれば許してあげようと思ってるのよね？」

「・・・冗談じゃない。なんで私がそんなことまでしなきゃならないんだろうか・・・。」

「こんな人達に・・・なんで謝らなきゃならないんだろう・・・。」

「それができないなら・・・覚悟は出来てるよな？」

「姫神くんに隠れて逃げて悪口を回避してるみたいだけど・・・、謝る気がないんならお前は必要ないから退学になってもらうよ」

「そ、そんな・・・」

「だってほんとにいらないしね？」

「“柊姉”とは大違いだもんね。能力のないやつ省くのは当然だし」

「アンタ役立たずすぎだし、そんなのがうちのクラスに1人でも居たら迷惑なんだけど？」

「退学と土下座・・・。そんなのどっち選択することなんて決まってる。」

「つーか姫神も面倒だよなあ？」

「そうそう、こんなドジのお守りとか絶対ご免なんだけど！」

「・・・佑くんは関係ない」

「関係あるわよ？あれもクラスから外れてるやつだし、アンタが退学になるんだったら姫神くんも纏めて退学にしてやるわよ」

「で、結局お前はどっち選択するんだよ」

「私は・・・謝らない」

「へえ、こりゃ意外だ。自ら退学になろうってか？・・・もしかして退学するから姫神には何もするなって言いてえのか？」

私の答えに1歩前に出てきたのはこの前、佑くんによって壁にたたきつけられていた男子。

「私は謝らない。退学もしない。あなた達のいじめになんか屈しない。退学なんか絶対しないっ」

「な・・・なんだと!？」

「アンタがいじめに耐える？ドジで弱虫で1人じゃなにもできないアンタが？」

「私は弱虫じゃない。1人でなんでも出来る」

迷いなく答える私に周りは少し焦りの表情を出す。・・・ただ1人を除いて。

「上等だ。絶対退学にしてやる、姫神諸共退学にしてやる。覚えと

け」

「佑くんは関係ない。でも関係ないよ、私は退学にならないから。私が退学にならないければ、佑くんも退学には出来ない」

私は自分がこんなにもはっきり言葉を言えるんだとこんな状況の中でぼんやりと考えていた。

そんな私に男子のこめかみがピクツと反応する。どうやら爆発寸前のようにだ。

「ちょ、こんなときになんでタバコなんか吸ってられんの!？」

「黙ってる、お前が無理やり食堂に連れて行ったせいでイライラしてんだよ。俺はパンでいいって言っただろ」

「今はそういう話してるわけじゃないからっ!」

「そういう話じゃないって十分これも大事な話だろ？」

「全然たいした話じゃないけど!？」

「………佑くん？」

なにやらバカみたいな言い合いをしている佑くと優斗くんが体育館倉庫の影にいた。

「ひ、姫神……っ」

「ちょ……やばいって」

5人組も気付いてひそひそと小声で話していたが、1人が逃げ出すと他のメンバーも逃げていった。

「なんだ？あいつら・・・」

「ふう・・・とりあえずなんとかあったかな」

優斗くんは逃げていく5人を見遣って、私の方に視線を戻す。

「・・・つかさん？」

<優斗視点>

「・・・」

「ねー悪かったって言ってるでしょ？」

「・・・」

「ていうか、何処まで行くのさ？」

「・・・」

はあとため息を吐いて、佑樹に視線を向ける。無理やり食堂に連れて行った直後からずっとこのままだ。

予想以上にあまり機嫌が麗しくない様子の佑樹は眉間に皺を寄せ校舎裏まで歩いていく。

無理やり連れて行ったのには訳がある。

つかささんの対するいじめをどう思っているのか確認したかったからだ。

「・・・」

しかし、その質問を無視・・・というより一言も声を発さないので本人の口からは確認できていない。

一体どうしたらいいのかさっぱり分からない。何を考えてるのかも分からない。

「・・・・・・・・」

「・・・？」

そんな中ずっと黙っていた佑樹が視線を横の方にずらしたのに気付く。

「あれって」

「・・・ふん」

佑樹の視線の先にはつかささんと男女5人組の姿が見える。

「朝の悪い予感は何らずとも当たってしまった・・・か」

「・・・え？」

佑樹が何かボソッと呟くが、その言葉はつかささんの会話を聞くのに必死だった僕には届かない。

その会話は元々の耳のよさを恨みたくなるほど聞きたくもないものだった。

「なんてことを・・・あいつら・・・」

つかさんは何も悪くない。何も悪くないのになんで迫害じみた言葉を言われてるんだ・・・。

「私は謝らない。退学もしない。あなた達のいじめになんか屈しない。退学なんか絶対しないっ」

悲しい覚悟だ。その迫害に対するつかさんの覚悟は悲しすぎる。なんで仲間を・・・友達を頼ればいいじゃないか。なんで頼らない？なぜ・・・なぜ・・・。

カチッ

その音は隣に居る佑樹から聞こえてきた。

横に向くと、佑樹は火をつけたタバコを咥え、目をつぶっていた。その姿に思わず我慢していた感情が表に顔を出した。

「ちょ、こんなときになんでタバコなんか吸ってられんの!？」

「黙ってろ、お前が無理やり食堂に連れて行ったせいでイライラしてんだよ。俺はパンでいいって言ったろ」

「今はそういう話してるわけじゃないからっ!」

「そういう話じゃないって十分これも大事な話だろ？」

「全然たいした話じゃないけど!？」

思わず佑樹の前ではトラウマを克服するまで使わないと決めていた口調に戻っていたけどそれを直す余裕などなく、目の前の佑樹に驚きと焦りの視線を向ける。

「というか今はそんなの吸ってるわけじゃないだろ!？」

「………佑くん？」

「ひ、姫神……っ」

「ちょ……やばいって」

つかささんと5人組がこちらに気付き、驚きの声を上げる。

5人組は最初ザワザワとしていたが、そのまま1人が逃げ出すと蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

「なんだ? あいつら……」

「ふう……とりあえずなんとかあったかな」

僕は逃げていく5人からつかささんに視線を戻す。

「……つかささん、どうかしたの?」

「……んーん、なんでもないよ?」

なんで、なんでそんな顔して答えてるんだよ……。悲しみを堪え

ながらいうセリフじゃないだろ……。大丈夫だって言うならなんで涙を堪えてるんだ。

「つかさ……」

そんな中、佑樹が口を開く。

「なにかあったのか？」

「ううん、なんでもないよ？」

なにかあったかじゃないだろ佑樹。お前は何を見てたんだ……。つかささんもなんで何も言わないんだよ！

「……そっか。んじゃ戻るか」

「うん」

僕はそんな2人のやり取りを呆然と見つめるだけだった。

<かがみ視点>

放課後になり帰り支度をしている最中も私の頭の中は佑樹くんとつかさのことで頭がいっぱいだった。

昼休みの一件は優斗くんから聞いていたが、私にも2人の言動はよく分からない。

いったいなんだというんだろうか……。

「かがみく帰るよ？」

どうやらこなた達も帰る準備が整ったようだ。

私はつかさ達と合流して下駄箱に移動する。
そこで目を疑いたくなる光景を見た。

「な・・・なによ、これ」

「ひどい・・・」

下駄箱に落書きが書いてあった。

『さっさとやめちまえよ!』

『クラスに塵ごみは必要ねえんだよ!』

などと書いてある。

「人を塵ごみって言うなんて・・・」

「たかが体育祭でなんでここまでするんでしょうか」

「ちっ、まったく不愉快だね」

その落書きは佑樹くんが持ってきてくれた雑巾できれいにして今日は帰ることとなった。

しかし、こんなことまでしてくるなんて・・・なんとかしなきゃ。
私が対策を練ろうと皆に相談しようとしたその時、

「あんなことがあった後で悪いんだが・・・今日も用事があるから

「じゃあな」

「ちよっ、アンタ待ちなさいよ！」

「なんだ？」

「なんだ？ じゃないわよ！ アンタ、ほんとにつかさの味方なの！？」

「味方ではあるが……。俺には俺のやる事がある」

意味不明だ。自分のやる事ってなに……。今は……。今は！

「今はつかさの近くに居て、慰めてあげることとこの状況の対策を考えることでしょ！？ それが大事なことじゃないの！？」

「……。それはお前らがやっつけ。俺にその役は似合わねえよ」

必死の叫びも空しく響き渡るだけで、佑樹くんはそのまま歩いていってしまった。

私はその姿をただただ見送ることしか出来なかった。

悲しい覚悟（後書き）

悪「どうも、今日は久しぶりに後書きに佑樹が来てくれました」

佑「・・・暢気なもんだな」

悪「そういうことは言わないでくれる？」

佑「つか文もグダグダだよな」

悪「いや、だってこういうのってよく分からんし」

佑「それでよく小説やっていけるもんだ・・・」

悪「う、うるさいな！ほらっ、さっさと次回予告！」

佑「（話し逸らしやがったな・・・）え〜ととりあえず次回は新キ
ャラ登場

&佑樹の過去が一部明かされます・・・って俺の過去出すの？」

悪「うむ、そろそろ手付けとかないと・・・」

佑「へ〜、まあ俺が直接語るわけじゃなさそうだしいいけど」

悪「同時につかさ編は次話かその次の話で完結予定なんで一つ宜し
くお願いします」

佑「・・・なんだまだこのグダグダが続くのか」

悪「それではみなさんごきげんよ〜」

佑「（こいつ、スルーしやがった）ではまた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6023g/>

らき☆すた ある高校生の物語

2011年9月11日05時35分発行